

HASHI MOTO ENOKI DA SITE

橋本榎田遺跡

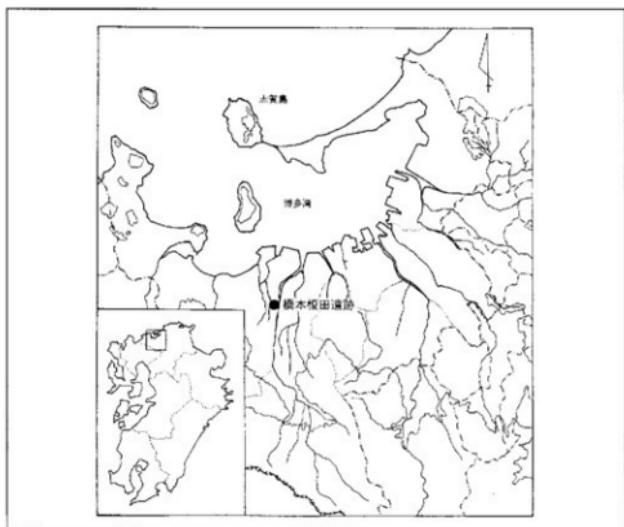
—福岡市埋蔵文化財調査報告書第542集—

1997

橋本榎田遺跡調査会
福岡市教育委員会

橋本榎田遺跡

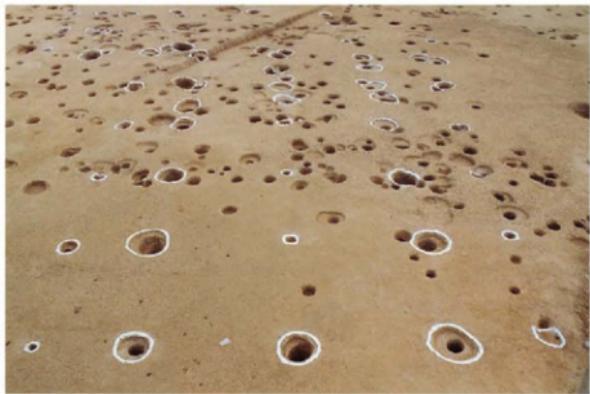
—福岡市埋蔵文化財調査報告書第542集—



調査番号 8014
遺跡番号 HTE-1

1997

橋本榎田遺跡調査会
福岡市教育委員会



(3) 青白磁合子(?)242



(4) 越州窯系青磁碗166

序

福岡市は古来より大陸文化摂取の門戸として栄え、市内に数多くの遺跡や文化財が残されています。

福岡市西部を流れる室見川左岸一帯には、国指定史跡の野方遺跡や吉武高木遺跡をはじめ、数多くの埋蔵文化財が残されています。福岡市教育委員会では、これらの史跡整備を進めるとともに、各種開発に対する埋蔵文化財の事前調査に努めています。

本書は、宅地造成に伴い、昭和55年7月から56年3月に実施した福岡市西区橋本に所在する橋本榎田遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査では、弥生時代前期の溝状遺構、平安時代の掘立柱建物や井戸などの遺構を検出するとともに、弥生土器や石器、貿易陶磁器や国産土器などの各種の豊富な遺物が出土しました。

本書が文化財保護の一助となり、学術研究の資料として活用されますことを願っています。

平成9年3月15日
福岡市教育委員会
教育長 町 田 英 俊

例　言

- 1、本書は、昭和54年度に、東洋開発株式会社による
建売分譲住宅地造成工事に先行して実施した橋本
榎田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2、本書のFig. 5には、国土地理院発行の1/50,000
の地形図「福岡西南部」を原図とした。
- 3、本書に使用した方位はすべて磁北である。座標北
に対して西偏 $6^{\circ}20'$ を測る。
- 5、掲載した遺物には、種類、材質、出土構構の別を
問わず掲載順に通し番号を付した。
- 6、実測図と写真図版中の遺物番号は同一である。
- 7、本書に掲載した遺構実測・写真撮影は塙屋勝利、
田中壽夫が、また遺物実測・写真撮影は田中が行っ
た。
- 8、本書の図面整理・整図は、宮園登美枝、田中が行
なった。
- 9、本書の執筆は第1・2章を塙屋、第3・4章を田
中が分担した。
- 10、本書の編集は塙屋と協議の上、田中、宮園が行なっ
た。
- 11、本報告に関わる出土遺物、記録類はすべて福岡市
埋蔵文化財センターに収蔵管理される。

本文目次

	頁
第1章 序 説	1
1、調査に至る経過	1
2、調査の組織	1
3、調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
1、位置と地理的環境	3
2、歴史的環境	3
第3章 調査の記録	6
1、調査の概要	6
2、遺構と遺物	9
第4章 結 語	20
1、検出遺構について	20
2、出土遺物について	21
3、まとめ	21

挿図目次

Fig. 1 第2区作業風景	2頁
Fig. 2 第4区作業風景	2
Fig. 3 掘立柱建物掘り下げ作業	2
Fig. 4 第6区作業風景	2
Fig. 5 橋本櫻田遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	5
Fig. 6 周辺地形と調査区配置図 (1/1,000)	7
Fig. 7 橋本櫻田遺跡遺構分布全体図 (1/600)	折り込み
Fig. 8 第5区掘立柱建物分布図 (1/200)	11
Fig. 9 井戸SE01~04・溝SM03~10 分布図 (1/400)	17
Fig. 10 復元条里と橋本櫻田遺跡の位置 (1/50,000・1/8,000)	22
Fig. 11 第1区遺構平面図 (1/200)	33
Fig. 12 第2区・第3区遺構平面図 (1/200)	34
Fig. 13 第1区・第2区土層断面図 (1/80)	35
Fig. 14 第4区遺構平面図 (1/200)	36
Fig. 15 第4区溝SM03・04 土層断面図 (1/50)	37
Fig. 16 第4区溝SM04 遺物出土状況平面図 (1/40)	37
Fig. 17 第5区遺構平面図 (1/400)	38
Fig. 18 第6区遺構平面図 (1/300)	39
Fig. 19 第6区溝SM03・05~07 土層断面図 (1/50)	40
Fig. 20 第6区溝SM04・06・07 土層断面図 (1/50) および柵列(SA)平面・断面図 (1/80)	41
Fig. 21 掘立柱建物(SB)平面・断面図1 (1/80)	42
Fig. 22 掘立柱建物(SB)平面・断面図2 (1/80)	43
Fig. 23 掘立柱建物(SB)平面・断面図3 (1/80)	44
Fig. 24 掘立柱建物(SB)平面・断面図4 (1/80)	45
Fig. 25 掘立柱建物(SB)平面・断面図5 (1/80)	46
Fig. 26 掘立柱建物(SB)平面・断面図6 (1/80)	47
Fig. 27 掘立柱建物(SB)平面・断面図7 (1/80)	48
Fig. 28 木棺墓・土壤(SD)、井戸(SE)平面・断面図 (1/40)	49
Fig. 29 井戸(SE)平面・断面図 (1/40)	50
Fig. 30 遺物実測図1 (1/3・2/3・1/2)	51
Fig. 31 遺物実測図2 (2/3・1/2)	52
Fig. 32 遺物実測図3 (1/2)	53
Fig. 33 遺物実測図4 (1/3)	54
Fig. 34 遺物実測図5 (1/3)	55
Fig. 35 遺物実測図6 (1/3)	56
Fig. 36 遺物実測図7 (1/3)	57
Fig. 37 遺物実測図8 (1/4・1/3・1/2)	58
Fig. 38 遺物実測図9 (1/3)	59
Fig. 39 遺物実測図10 (1/3)	59
Fig. 40 遺物実測図11 (2/3)	60
Fig. 41 遺物実測図12 (1/3・1/2)	60
Fig. 42 遺物実測図13 (1/3・1/2)	61
Fig. 43 遺物実測図14 (1/4・1/3)	62
Fig. 44 遺物実測図15 (1/3・2/3)	63

図版目次

卷頭図版	(1) 挖立柱建物 SB01 (北から)	(2) 木棺墓 SD01 (西から)
	(3) 青白磁合子 (?)	(4) 越州窑系青磁碗
PL, 1	(1) 橋本櫻田遺跡遠景 (南東から)	(2) 調査前近景 (北から)
PL, 2	(1) 第1区全景 (西から)	(2) 第2区全景 (西から) (3) 第3区全景 (西から)
PL, 3	(1) 第4区作業風景 (北から)	(2) 第4区全景 (南から) (3) 第5区全景 (南から)
PL, 4	(1) 第6区全景 (北西から)	(2) 第6区全景 (南から)
PL, 5	(1) 挖立柱建物 SB01 (南から)	(2) 挖立柱建物 SB01 (西から)
	(3) 挖立柱建物 SB08 (南から)	
PL, 6	(1) 木棺墓 SD01遠景 (西から)	(2) 木棺墓 SD01 (西から)
	(3) 木棺墓 SD01 (北から)	
PL, 7	(1) 土壌 SD02 (北から)	(2) 土壌 SD03 (北西から)
	(3) 土壌 SD04 (西から)	
PL, 8	(1) 井戸 SE02 (西から)	(2) 井戸 SE02井組南東部 (北西から)
	(3) 井戸 SE02井組南東部 (北から)	(4) 井戸 SE02井筒 (西から)
PL, 9	(1) 井戸 SE01 (北から)	(2) 井戸 SE03 (東から)
	(3) 井戸 SE04 (北東から)	
PL, 10	(1) 溝 SM01・02 (北から)	(2) 溝 SM03 (北西から)
	(3) 溝 SM04検出状況 (西から)	(4) 溝 SM04掘り下げ作業風景 (南西から)
	(5) 溝 SM04周辺作業風景 (西から)	
PL, 11	(1) 第4区溝 SM04 (西から)	(2) 第6区溝 SM04 (西から)
	(3) 溝 SM04第6区東壁土層断面 (西から)	(4) 溝 SM04第6区南北土層断面 (西から)
PL, 12	(1) 溝 SM03北側 (南東から)	(2) 溝 SM03北側遺物出土状況 (東から)
	(3) 溝 SM03・05・07 (北西から)	
PL, 13	(1) 第6区溝群 SM03・05・08 (南東から)	(2) 第6区溝群 SM03・05・08 (南東から)
	(3) 溝 SM08・09 (北東から)	
PL, 14	出土遺物 1 (1/3・1/2)	
PL, 15	出土遺物 2 (1/3)	
PL, 16	出土遺物 3 (1/3)	
PL, 17	出土遺物 4 (1/3)	
PL, 18	出土遺物 5 (1/3・2/3)	
PL, 19	出土遺物 6 (1/3・1/5)	
PL, 20	出土遺物 7 (1/3・3/5)	

表目次

Tab. 1	橋本櫻田遺跡検出掘立柱建物計測一覧表	13頁
Tab. 2	橋本櫻田遺跡検出構造編年表	20
Tab. 3	橋本櫻田遺跡出土土器・陶磁器所見一覧表	23~28
Tab. 4	橋本櫻田遺跡出土石器・石製品所見一覧表	29~31
Tab. 5	橋本櫻田遺跡出土その他所見一覧表	31

第1章 序 説

1、調査に至る経過

橋本櫻田遺跡の発掘調査に至る経過は次のとおりである。

開発事前審査

1) 開発事前審査(福岡市教育委員会文化課受付)

申 請 日：昭和54年9月14日

申 請 者：東洋開発㈱ 代表取締役 住野崎哲哉

福岡市中央区大名二丁目10-34

申 請 地：福岡市西区大字橋本字櫻田1208他42筆

開発面積：22,504.43m²

開発用途：宅地造成

試掘調査

2) 試掘調査

調 査 日：昭和54年11月13日～11月22日

担 当 者：二宮忠司(福岡市教育委員会文化課)

3) 試掘調査の所見

中筋地は、古代の地名で額田(現在は櫻田・野方)と呼ばれ、この付近には奈良・平安時代には怡士から大宰府へ通じる官道がこの一帯を通り、さらに、駅家が置かれていたことが推定されていることから、試掘調査を行うこととした。調査は東西南北に20m間隔の方眼を組み、幅1.0mの試掘トレンドを22本設定し掘削した。その結果、台地(微高地)上に溝状遺構・柱穴、台地下に台地縁辺に沿う杭列を検出し、また、奈良時代から平安時代の土師器、須恵器、青磁、白磁などとともに、馬の下顎骨も出土した。確認されたこれらの遺構と遺物からみて、古代の駅家に関連する遺跡の存在が予想されたために、遺構が分布する約10,000m²の範囲について本調査を要すると判断された。

2、調査の組織

発掘調査の組織は以下のとおりである。

調査委託：東洋開発㈱ 代表取締役住野崎哲哉

調査主体：橋本櫻田遺跡調査会

福岡市教育委員会文化部文化課課長

井上 刚紀

調査担当：埋蔵文化財第2係

塙屋 勝利

田中 肇夫

調査補助：

喜多 丰介

整理補助：

宮園登美枝

整理作業：

堀 一恵・山口玲子・寺村チカ子・金石邦子

3、調査の経過

経過概要

発掘調査は昭和55年7月1日に着手し56年3月30日に完了した。その間、業務上の都合と工事工程との調整のために2回中断した。調査の実施にあたっては、便宜上第1～3期に分け、第1期調査は55年7月1日～10月16日、第2期調査は昭和55年12月15日～25日、第3期調査は昭和56年3月3日～30日にかけて実施し、延べ8ヶ月を要した。

調査日誌抄



Fig. 1 第2区作業風景



Fig. 2 第4区作業風景



Fig. 3 摨立柱建物振り下げ作業



Fig. 4 第6区作業風景

- 7月1日(火) 本日より調査着手。東洋開発㈱主催の安全祈願式。
7月3～5日(土) 伐採作業および調査区設定。10m方眼基準杭設置作業。
第2～5区の重機による表土除去作業開始。
7月10日(木) 第5区の表土除去および遺構検出作業を行う。
7月15日(火) 梅雨明け間近かで久しぶりの青空と涼風。第5区の表土剥ぎと検出作業を行い、柱穴を多数検出。
7月16日(水) 第5区の表土除去と遺構検出作業を継続。包含層には弾生土器片、石鎌、土師器、須恵器等を含む。南北棟 2×3 間・ 1×2 間の摷立柱建物各1棟を確認。
8月2日(土) 台地下で検出した2条の溝状遺構(SM01、SM02)の発掘。
8月7日(木) 台地西側段落ち部に平面隅丸方形の土壤(SD01)を検出。床面から完形の土師器碗2個、皿6個が出土。
8月25日(月) 第5区台地下東側部分土壤(SD03、SD04)を検出。
8月29日(木) 第5区台地下東側部分の遺物包含層振り下げ作業。
9月3日(木) 第5区台上の清掃作業、写真撮影。
9月11日(木) 台風13号九州東岸を通過。
9月22日(月) SM03の発掘作業開始、SM04南側台地縁部の発掘作業。
9月26日(金) SM04北側台地縁部で井戸(SE01)を検出。
10月14日(火) 台風19号通過。SE02の井戸枠が破壊される。
10月16日(木) 平板測量、第2期調査区基準杭改定作業。
2月15日(月) 本日より第2期調査開始。
2月18日(木) SM04検出状況写真撮影、瓦器、土師器皿、白磁等出土。
12月19日(金) SM03の延長部分と新たな溝状遺構2条を検出。
2月22日(月) SM04のE列断面土 sondage作成およびD列土 sondage面写真撮影。
3月3日(火) 本日より調査再開、調査区全城の清掃作業。
3月11日(木) SM03、SM05の発掘作業。
3月12日(木) SM05に切られた溝状遺構1条(SM07)を新たに検出。
3月20日(金) D11区で新たに溝状遺構(SM08)と土壤2基を検出。
3月23日(月) SM07、D11区のSD03～SD05の実測、写真撮影。
3月26日(木) SM08の発掘作業、SM03～07の実測、写真撮影。
3月28日(土) 調査区全体の清掃作業、全景写真撮影、SM06平板実測。
3月30日(月) 等高線測量、器材整理、記念写真撮影。本日で延べ8ヶ月にわたる調査を終了。

第2章 遺跡の位置と環境

1、位置と地理的環境

橋本櫻田遺跡

橋本櫻田遺跡は、福岡市西区大字橋本字櫻田に所在し、早良平野のほぼ中央部に位置する。早良平野は東側を油山山塊から延びる飯倉丘陵によって福岡平野と、西側を背振山塊から伸びる長垂丘陵によって今宿平野と画されている。旧早良郡内野付近を要部とし、室見川を中心河川として開析され、博多湾に向かって扇形に展開する複合扇状地の平野であり、室見川の両側共にいくつかの小河川の開析による沖積扇状地を形成している。

本遺跡は、室見川中流左岸から西方600mの沖積微高地上に立地し、200m西方には名柄川が北流する。当該地点は本来は緩やかに南北へ延びる沖積台地であったが、現況は調査区中央の台地部分が墓地を改葬した畠地で、最高所の標高は9.5mである。その周辺は削られて水田が造成され、台地面との比高差1~1.5mの平坦面をなしている。

2、歴史的環境

橋本八幡宮

本遺跡が所在する橋本の地は、昭和16(1941)年に福岡市に合併する以前は早良郡寺崎村に含まれ、近世には早良郡橋本村であった。福岡藩3代藩主黒田光之はこの地に誕生し、早良区高取にある紅葉八幡宮は、遺跡の南々東300mに位置する橋本八幡宮を寛文6(1666)年に遷座したとされる(貝原益軒編『筑前国統風土記』)。中世の早良平野に関する史料は飯盛神社関係や妙法寺樹家文書などが知られ、古代には早良郡には毗伊、能解、窟出、早良、平群、田部、曾我、能臣の各郷があった(『倭名抄』)。この中では現在の地名では野方となっており、古代における橋本周辺は、額田郷に属していたと考えられる。本遺跡を含む早良平野における遺跡の調査史は、戦前の段階、戦後から1960年後半段階、およびその後の段階に分けられる。戦前では、弥生時代前期・古墳時代初期の埋蔵遺跡である藤崎遺跡が調査されたほか、箱式石棺墓から銅鏡や銅鏡などが出土した五島山古墳、奈良時代の城ノ原廐寺跡が知られていただけである。戦後においても、1960年代後半までは偶然の発見による小規模な調査が行われただけで、有田遺跡の壺棺墓や重留の箱式石棺墓などが研究者によって調査されたに過ぎない。早良平野における埋蔵文化財の本格的な発掘調査は有田地区の土地区画整理事業に伴い1967年~1968年の2年次にわたって行われた有田遺跡の調査が最初である。この調査以後、早良平野においても道路建設、大規模地盤改良、地下鉄建設、圃場整備など各種開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が相次ぎ、各時代の様相が明らかにされつつある。

早良郡七郷

額田郷

藤崎遺跡

五島山古墳

城ノ原廐寺跡

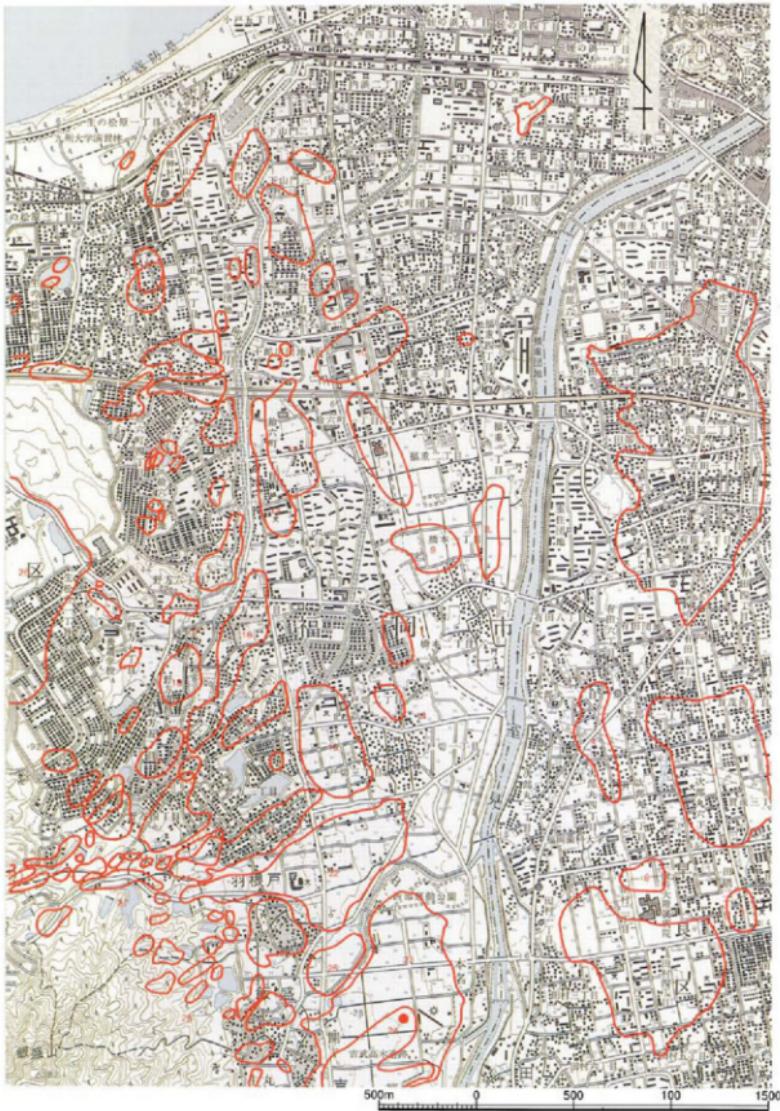
有田遺跡

吉武遺跡群

四箇遺跡

旧石器時代では、早良平野の各地から表面採集の遺物が知られていたが、その後の有田遺跡の発掘調査で石器包含層が検出されたほか、吉武遺跡群の調査でも出土している。縄文時代では、草創期から中期までの遺跡はまだ明確ではなく、後期を主体とする四箇遺跡の調査が最初である。晩期の遺跡としては

有田七田前遺跡	有田台地西側にある有田七田前遺跡が調査され、突帯文土器が出土している。
東入部遺跡	晩期末の埋葬遺跡としては、平野奥部の東入部遺跡で夜臼式の大型壺を組み合わせた形式のものが調査されている。
有田環濠集落遺跡	早良平野においても弥生時代になると遺跡数が増大するが、前期初頭には有田台地に大規模な集落遺跡が出現する。この集落は径200×300mの環濠を巡らす大規模なもので、板付遺跡をはるかに上回り、早良平野における前期初頭の唯一の集落遺跡である。有田台地周辺は、現在まで184次に及ぶ発掘調査が行われ、弥生時代から中世に至る各時期の遺構が発掘されている。このほかの前期の遺跡としては十郎川に面する沖積地の石丸古川遺跡があり、突帯文土器や前期の上器、各種の石器類が出土している。この時期の埋葬遺跡は有田遺跡をはじめ海岸部の藤崎遺跡、平野中央部の田村遺跡などが調査されている。前期末から中期初頭の時期の遺跡は早良平野全城に拡大するようになる。埋葬遺跡では海岸部の藤崎遺跡、平野中央部の吉武高木遺跡、平野奥部の東入部遺跡などが著名である。中期から後期の遺跡は本遺跡周辺では、野方中原遺跡、野方塚原遺跡、野方久保遺跡などが調査されたほか、古墳築造前夜の様相を示す宮ノ前遺跡も調査されている。
石丸古川遺跡	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
野方遺跡群	古代から中世の遺跡も早良平野全体に見られ、数多くの遺跡が調査されている。寺院跡では城ノ原廃寺が古くから知られていたが、発掘調査は行われていない。発掘調査では吉武遺跡群から仏像に垂下したと思われる金銅製勾玉や八稜鏡が出土し、寺院が存在したことが想定される。しかしながら現在までの調査では、古代における早良郡衙や郷家・郷倉を特定する遺構は確認されていない。有田遺跡群の調査で古代の大規模な建物群が検出され、早良郡衙の可能性が指摘されているものの確定には至っていない。本遺跡の北西に位置する下山門の斜ヶ浦瓦窯跡の確認調査で、「伊賀作瓦」銘を刻印した瓦が出土しており、鴻臚館跡の発掘調査でも「伊賀作瓦」銘が出土している。また、斜ヶ浦瓦窯跡からは以前「警固」銘瓦が採集されており、鴻臚館の付属施設が警固所であることから、斜ヶ浦瓦窯跡の瓦が鴻臚館の建物に葺かれていた可能性が高く、今後の調査が期待される。中世の遺跡では平野各地域で集落遺跡が調査されているほか、有田遺跡群で戦国時代の小田部城跡の濠が調査され、古武の都地城跡が一部調査されている。
方形周溝墓	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
橋渡古墳・拝塚古墳	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
西新町遺跡	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
野方勘進原遺跡	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
吉武古墳群	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
早良郡衙	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
郷家・郷倉	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
斜ヶ浦瓦窯跡	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
鴻臚館跡	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。
小田部城跡	古墳時代では、平野の東側丘陵部及び西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝墓の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の橋渡古墳や拝塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも5世紀～6世紀代の古墳群が調査されている。集落遺跡は海岸部の西新町遺跡、台地上の有田遺跡、丘陵上の野方勘進原遺跡、平野部先端部の野方中原遺跡、平野奥部の東入部遺跡をはじめとして平野全体で調査されている。



- | | | | | | |
|------------|--------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 橋本樺田遺跡 | 2. 有田遺跡群 | 3. 次郎丸高石遺跡 | 4. 次郎丸遺跡 | 5. 庄園遺跡 | 6. 平田遺跡 |
| 7. 田村遺跡 | 8. 桥本辻遺跡 | 9. 桥本道跡群 | 10. 桥六町平田遺跡 | 11. 桥本一丁目遺跡 | 12. 桥六町樺田遺跡 |
| 13. 半多田遺跡 | 14. 戸切塚・小町遺跡 | 15. 戸切遺跡群 | 16. 野方久保遺跡 | 17. 野方平原遺跡 | 18. 野方中原遺跡 |
| 19. 野方塙原遺跡 | 20. 道原遺跡 | 21. 羽根戸原田遺跡群 | 22. 羽根戸赤口溜跡群 | 23. 吉沢遺跡群 | 24. 駿河古墳 |
| 25. 大田遺跡 | 26. 広石遺跡群 | 27. 羽根戸吉塙跡 | 28. 羽根戸南古墳群 | | |

Fig. 5 橋本樺田遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

1) 調査区の設定

発掘調査にあたっては、試掘調査の成果を踏まえ、遺構と遺物の存在が確認された6地点について調査区を設け(Fig. 6)、第1区～第6区と呼称した。調査区の配置は、開発予定地の中央から南にかけて特に遺構分布密度が高かった沖積台地周辺を中心とした。全体の調査面積は6,832.07m²である。また、開発予定地全体を覆って、測量のための一辺10mの方眼地区割りを設定し、北から南へ1～21、西から東へA～Jと、番号およびアルファベットを付した。なお、南北基準線は磁北から10°41'西へ偏している。

2) 各調査区の概要

試掘調査によって明らかとなったように、遺構・遺物は、第5区の中央から北側にかけて残った台地上において比較的良好に残っていることが確認されたが、その他の調査区においては、中世以降の削平や、客土による土取り等の結果、消滅している部分が多い。

3) 第1区

開発予定地の最も北側に設定した。調査区面積は809.25m²。ここでは主として、南北に延びる旧沖積台地の遺存状況を把握し、遺構の有無について確認することを調査目的とした。

標高7.1～7.3mの面(黄褐色砂質粘土層上面)での遺構検出作業の結果、調査区中央～東側で、沖積台地縁辺部を確認した。この縁辺部は、室見川の氾濫により平安期以降に開析されたものと考えられ、台地東縁辺部から室見川にかけて展開する沖積層(暗褐色～黒褐色粘質土)は第4・5区で検出した溝SM04が掘削される以前の堆積である。

4) 第2区

開発予定地の北側東縁辺部に設定した。調査面積は93.5m²。当該区では第1区と同じく、旧沖積台地の遺存状況を把握し、遺構の有無を確認するために設定した。検出した遺構は、調査区中央からやや東側にかけて、方形の木組み枠および桶組の井筒を有する井戸(SE02)を1基検出した。廃絶時期は平安末のものである。また調査区南壁で近世の土壤を2基、時期不明の柱穴状ピットを7基検出した。第1区の東側で検出した台地東縁は確認できていない。なお、遺構検出面は標高7.1～7.2mで、黄褐色砂質粘土層上面である。

5) 第3区

第2区の南に設定した。調査面積は95.72m²である。中央から東側は近代以降の土取りにより大規模に削平され、西側が一段高くなっている(標高7.8m)。この面では搅乱土壤を1基検出したのみである。なお、第2～3区周辺台地部の本來の高さは7.8m以上あったことが推定された。

調査総面積
6,832.07m²

第1区

第2区

第3区

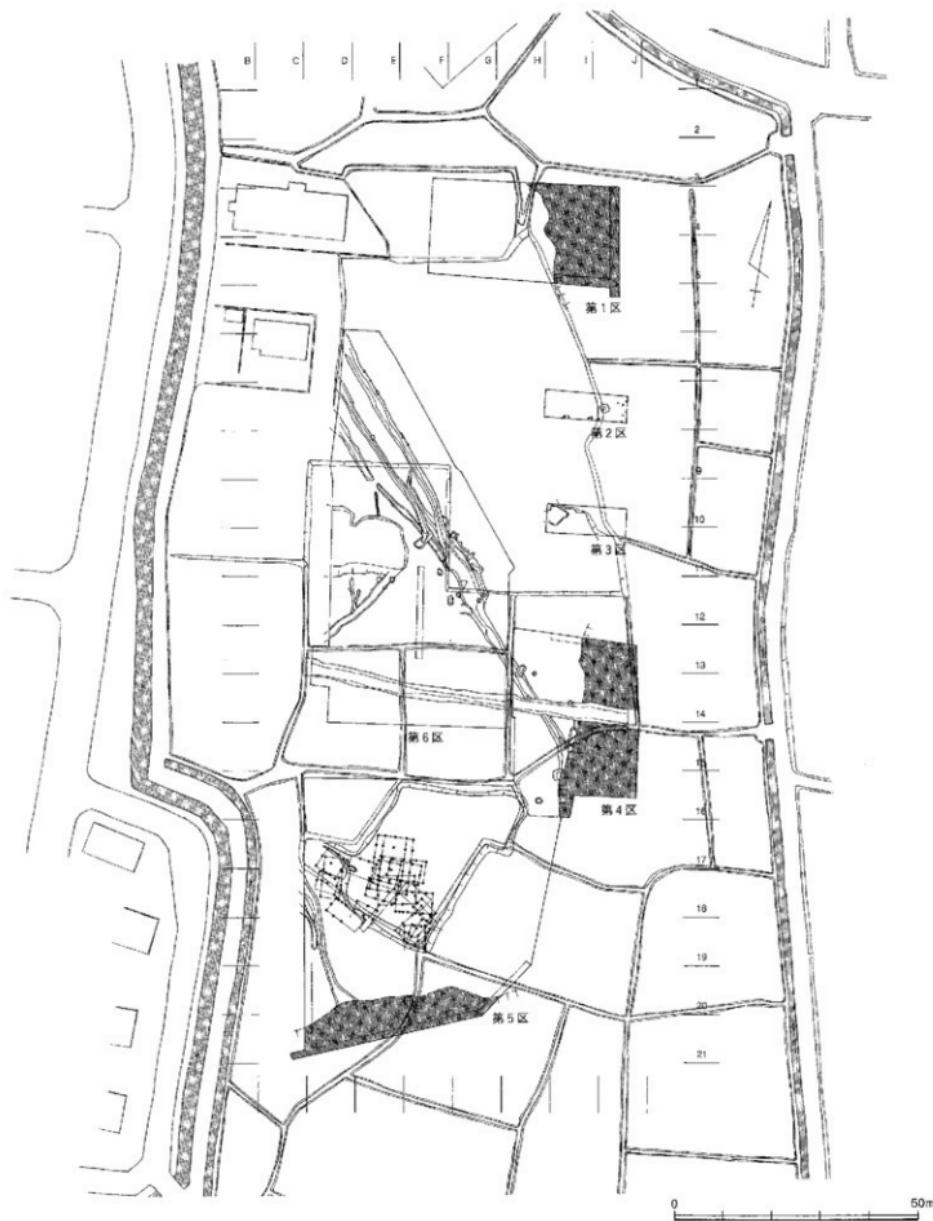


Fig. 6 周辺地形と調査区配置図 (1/1,000)

第4区

6) 第4区

第3区の南側、第5区の北東部に隣接する。調査面積は893.38m²。

当該区では試掘調査で確認された2条の溝および台地部の落ち際の状況観察を調査目的とした。調査では、東西に直線的に延びる平安時代後期～末期の溝SM04と弥生時代～古墳時代の溝SM03、平安末期～鎌倉時代の素掘りまたは井筒に曲物を用いたと思われる井戸3基(SE01・02・04)、土壙1基、および台地際に展開する沖積氾濫原を調査区中央から東側で確認した。沖積氾濫原はSM03とはほぼ同時期かそれ以降の堆積で、SM04よりも古い時期の堆積である。なお、遺構検出面は標高7.3～7.5mで、黄褐色～明褐色粘質土層上面である。

第5区

7) 第5区

開発予定地の中央から南側に位置している。調査面積は2,613.04m²。調査区東北部は第4区と接している。当該区中央から北側に、戦後間もないころまで墓地に利用し、その後畠地として使われていたやや小高い冲積台地がある。この台地周辺では試掘調査によって多数の柱穴と溝が確認され、遺構の遺存状況が最も良好な地点である。台地の最頂部は現況で9.5mを測る。検出遺構は、台地部で柵列(SA)1条、掘立柱建物(SB01～20)20棟、平安時代後期の木棺墓(SD01)1基、台地下では、調査区西側において、溝(SM01・02)を2条検出した。掘立柱建物は、一部弥生時代のものを含みながら、古墳～平安期のものが重複している。なかでも、両面庇を有する2×5間のSB01、3×3間の総柱のSB08、柵列SA01等は、第4・6区の溝SM04とともに、古代における本跡の性格を考える上で重要である。遺物は平安時代後期～末期頃の土師器・黒色土器・瓦器・須恵器質の陶器破片、中国越州窯系青磁、北宋～南宋代の白磁、朝鮮製陶器等が出土している。第1区と4区で確認された沖積氾濫原は、本調査区東側から南側縁辺に沿って弧を描いて展開しており、古墳時代から奈良・平安前期時代にかけては、台地は南南西から北北東方向に長軸をもつ楕円形を成していたと推定された。なお台地部および台地下における検出面の標高は、それぞれ8.5m前後、7.6m前後で、約1mの比高差がある。

第6区

8) 第6区

開発予定地の中央から北西部に位置する。調査面積は2,327.18m²である。本調査区では、試掘調査および第4区の調査で確認された、弥生時代から古墳時代にかかる溝状遺構の配置状況を明らかにすることを目的とした。調査の結果検出された遺構は、弥生時代～古墳時代のものと思われる溝状遺構5条(SM03・05～08)、時期不明の溝2条(SM09・10)、第4区で検出された溝SM04の西側延長部分、不定形土壙(SD03～05)等が検出された。SM03～08の各溝からは、弥生時代前期末～中期初頭の土器および石器、古墳時代の須恵器片などが出土。なお遺構検出面は標高7.3～7.4mの明褐色砂質粘土層上面である。

2、遺構と遺物

1) 概要

遺構の遺存状況は各調査区ともあまり良くない。第5区の一部以外は本来の台地状の高まりが中世以降に削平されているためである。遺物もまた二次的堆積状況で、表土直下の包含層から出土したものがほとんどである。比較的原位置を保って出土したものは、第5区木棺墓SD01副葬遺物と第4区SM04埋上中位に投棄された遺物群のみである。ここでは各調査区で検出された遺構と遺物について柵列(SA)、掘立柱建物(SB)、土壙(SD)、井戸(SE)、溝(SM)の順で説明する。掘立柱建物と各遺構からの出土遺物の個別的な内容についてはTab. 1~5を参照されたい。

2) 柵列(SA)

SA01 第5区で検出された柱穴列である。柱間は2.3~2.42mを測り、ほぼ等間隔である。柱穴の直径は19~26cmで、規模は比較的小さな柵列である。暗褐色粘質土を埋上とする。柱穴列の方向はN-79°-Eで、後述するSB08の長軸とはほぼ直交する。

3) 掘立柱建物(SB)

柱穴は第5区の北側に残った沖積台地上で検出された。台地は北側半部の削平が特に顕著で、南側に集中して分布しているかのようであるが、確認できた柱穴はごく一部のものと思われる。柱穴の検出面は、弥生から古墳時代の遺物を含む暗褐色粘質土層上面とその下部の明褐色砂質粘土層上面である。ただし、下部で検出された柱穴には上層から掘り込まれたものも含まれている。暗褐色粘質土層上面で検出された柱穴群のうち、建物が推定復元できたものはSB01~03・06・08~10・16・18・19である。明褐色砂質粘土層上面で検出された柱穴群のうち、建物が推定復元できたものはSB04・05・07・11・13・15・17・20である。これらの建物群の先後関係および、各群の復元建物の方向は以下のように大きく6群に分かれる。なお下の表で下線のあるものは長軸が同一群内で直交するものであり、また()の遺構は方向性を同じくするものである。

《遺構の切り分け関係》 SB03→SB02

SB09→SB02→SB01→SB04

SB12→SB09

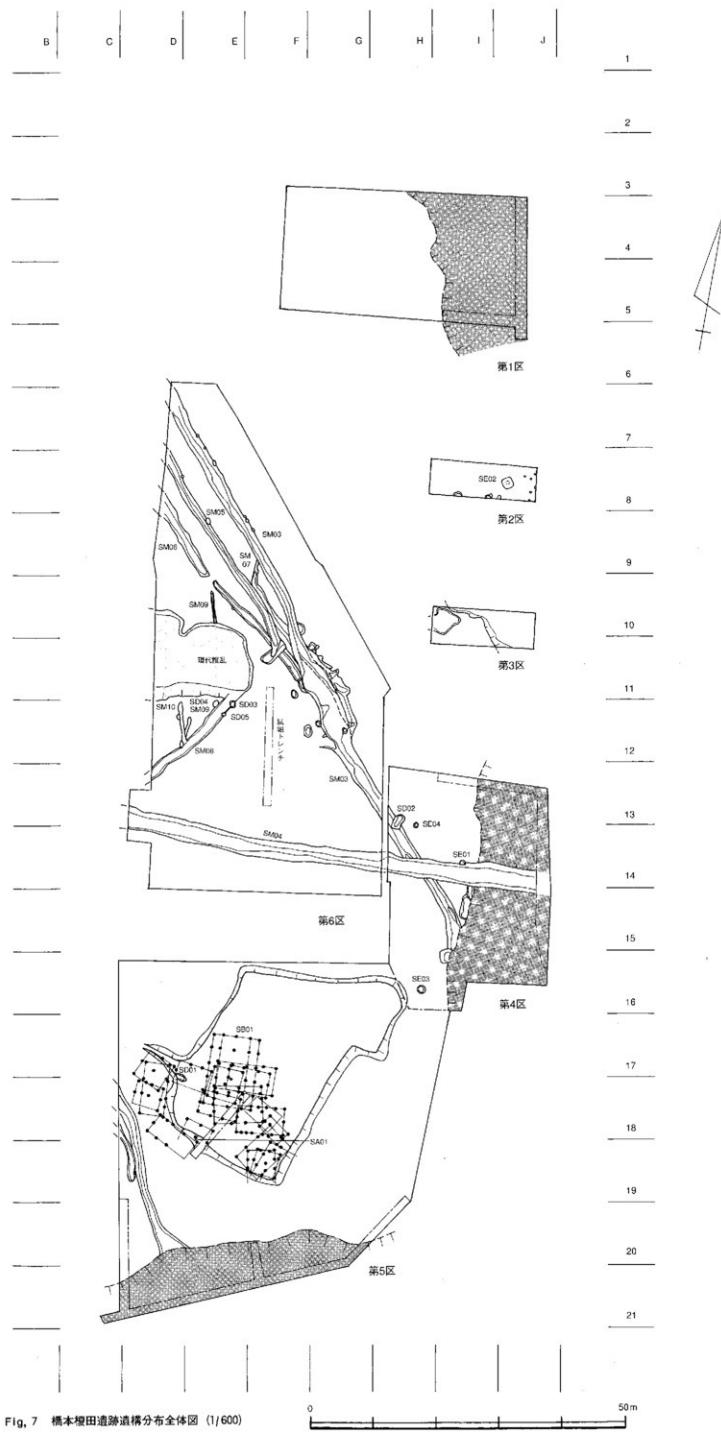
SB09→SB08

《復元建物の方向》	a群	SB12・13・15	(SM03)
	b群	SB <u>07</u> ・ <u>11</u> ・ <u>17</u> ・ <u>20</u>	
	c群	SB04・05・14	
	d群	SB02・09・16・19	
	e群	SB01・03・06・ <u>18</u>	(SM04)
	f群	SB08・10	(SA01)

以上の関係から建物群の変遷は次のようになると考えられる。

1—1期	SB12 SB13 SB15	a	(SM03・05~07)
—2期	SB07・(SB11)・SB17・SB20	b	
2—1期	SB05・SB03・14	c / e	
—2期	SB09・SB19	d	
	SB02・SB16	d	(SM04)
—3期	SB08・SB10	f	(SA01)
—4期	SB01・SB18	e	
	SB04・SB06・(SB18)	e / c	

- SB01 **SB01** (Fig. 21) 台地中央からやや北側に位置する南北棟である。身舎が2×5間で、縦柱の建物である。東西の側面に庇を有しており、推定復元された建物では最も規模の大きな建物である。身舎部分の柱穴は直径が40~47cmで、柱痕跡から推定して、柱は直径26cm前後の大きさが推定できる。庇部分の柱穴は小さく直径30cm内外である。平面形は西北部へわずかに歪んだ長方形である。
- SB02 **SB02** (Fig. 22) SB01と重複する2×3間の東西棟である。南側柱のうち南東隅から1間目の柱穴は確認できていない。平面形は西南部へ歪んだ長方形である。南北側柱間には間隔にややばらつきがある。東西梁行の中柱は棟筋におさまっている。西側妻の中柱から土師器丸底杯(Fig. 30-1)が出土している。
- SB03 **SB03** (Fig. 22) SB01の南東隅で一部重複している2×3(5)間の東西棟である。北側柱はほぼ等間隔で並んでいるが、南側柱は間隔が不均等である。この建物で注意されるのは、東側2×2間部分が床の可能性がある点である。この部分のみに東柱があり、低い床が設けられていた可能性がある。
- SB04 **SB04** (Fig. 22) SB01の南側に重複している。2×3間の東西棟である。柱の配列は均等で、平面形は長方形を呈する。東側妻の中柱は中央より2本配している。
- SB05 **SB05** (Fig. 22) SB01の西側に一部重複している。2×3間の東西棟である。北および東側柱、西側妻の中柱は確認できたが、西および南側柱については確認できなかった。
- SB06 **SB06** (Fig. 23) SB01中央部分で重複している。2×5間の東西棟である。東側妻の中柱および西南隅柱から1間分東側の側柱は確認できなかった。柱穴は直径20~27cmでやや小さいが、建物規模は長大である。柱の配列は均等である。平面形は南東隅がわずかに歪んでいる。
- SB07 **SB07** (Fig. 23) 台地南東部に位置する。2×3間以上の南北棟である。柱配列はほぼ均等で、直径20~30cm、柱痕跡は直径18~22cmを測る。
- SB08 **SB08** (Fig. 24) SB01の南側に重複している。3×3間縦柱の東西棟である。



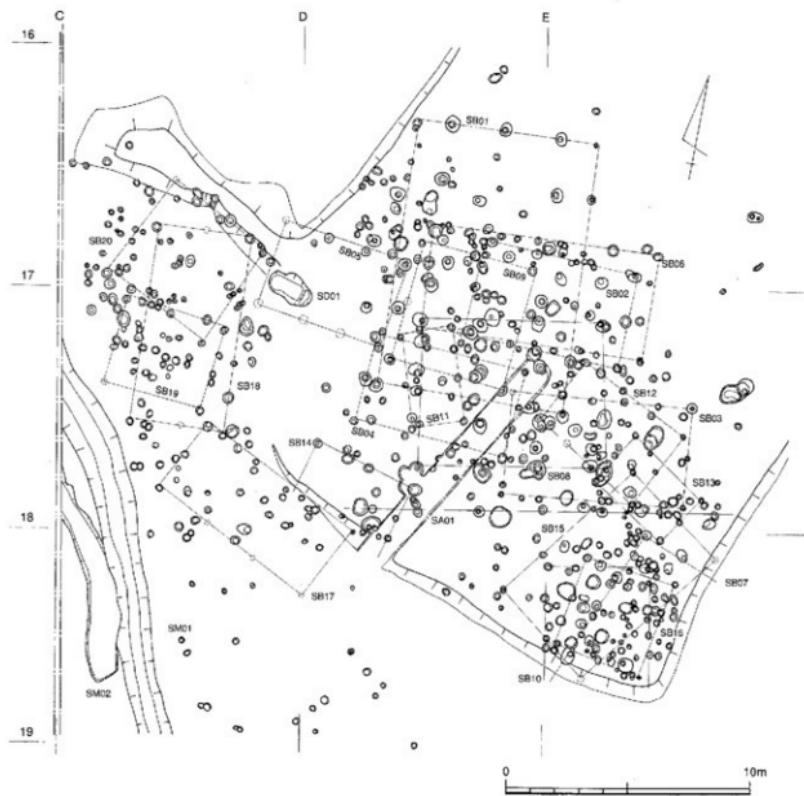


Fig. 8 第5区掘立柱建物分布図 (1/200)

- 柱配列はほぼ均等であるが、平面形は南辺がやや広い長方形である。柱穴は30~56cmを測り、柱痕跡は20~28cmを測る。この建物から約1間分(1.86m)南側に柵列SA01が平行して東西に延びている。
- SB09 (Fig. 23) SB01の中央から南側にかけて重複している。2×2間の総柱建物で、南北棟と思われる。西側の中柱は未確認である。南側中柱は隅柱芯間を結んだ線から南にはみ出している。東柱と考えられる平面中央の柱穴は直径22cmで他と比べて小さい。
- SB10 (Fig. 24) 台地南東側に位置し、SB07・15・16と一部重複している。2×2間の総柱の東西棟である。平面形は南西隅部がやや歪んだ長方形である。柱穴の直径は40cm前後で比較的大きい。柱痕跡は22~24cmである。
- SB11 (Fig. 24) SB01南西隅部に重複している。1×2間の南北棟である。推定復元した建物では最も規模が小さく、また方向性が他と比べ異質である。
- SB12 (Fig. 25) 台地部東南側に位置し、SB03・07・08などと重複している。2×3間の東西棟である。平面形は南西隅部が歪んだ長方形である。西側妻の中柱、西南隅柱から1間分東側の柱穴は未確認である。南北側柱は中央に寄って配されている。層位関係では最も古い建物である。
- SB13 (Fig. 25) 台地東南側に位置し、SB03・07・12・15と重複している。SB12・15との先後関係は不明であるが、方向性はほぼ一致しており、古墳時代後期以降と考えられる溝状遺構SM03等とは直交している。
- SB14 (Fig. 25) 台地南側に位置している。SB17と一部重複している。2×2間の東西棟の可能性がある。総柱の建物である。南西部は削平を受けている。
- SB15 (Fig. 26) 台地南東部に位置する。SB03・07・10・13・16と重複している。2×3間の南北棟で、総柱の建物である。柱穴は北東および南東隅柱が未確認である。柱配列は均等で、平面形は端正な長方形である。
- SB16 (Fig. 25) 台地南東部に位置する。SB07・10・15と重複している。2×2間の南北棟で総柱建物である。平面形は端正な方形で、南北がわずかに長い。東側中柱は未確認である。
- SB17 (Fig. 26) 台地南西部に位置し、SB14と一部重複している。2×3間の東西棟で長大な建物である。南側柱は一部未確認のものがある。柱穴は直径24~39cmで、柱痕跡は20cm前後を測る。SB07・12・20などと方向性が一致する。
- SB18 (Fig. 27) 台地西側に位置する。SB19・20と重複している。1×3または2×3間の長大な南北棟である。柱間は2.3~2.5mを測り、梁行は3.8m前後を測る。南北妻の中柱が未確認のため明確ではないが、桁行の1間は約1.9mほどと考えられる。方向性はSB01と等しく、併存していた可能性が高い。
- SB19 (Fig. 27) 台地西側に位置する。2×2間の東西棟である。南西隅柱と床平面中央の東柱は未確認である。2×2間規模の建物では最も規模が小さい。
- SB20 (Fig. 27) 台地西側に位置する。2×2間の東西棟で、総柱建物である。北西隅柱は確認できていない。床平面中央の柱穴は直径40cmを測る。SB07・17等と方向をほぼ同じくしている。

Tab. 1 横本櫻田遺跡検出据立柱建物計測一覧表

遺構No	間取り規模		長軸方位	梁行×桁行(m)	床面積(m ²)	先後関係
SB01	東西両面庇付 2×5間総柱	南北棟	N-4°-W	7.424×10.88 7.696×11.152	身舎48.43	SB02→SB01
SB02	2×3間	東西棟	N-88°40'-W	4.06×6.24 3.904×6.48	25.41	SB02→SB01 SB02→SB12 SB03→SB02
SB03	2×3(5)間	東西棟	N-85°30'-W	4.184×7.46 4.24×7.464	31.29	SB03→SB02
SB04	2×3間	東西棟	N-86°-W	3.60×6.24 3.64×6.32	22.72	SB01→SB04
SB05	2×3間	東西棟	N-80°-W	(5.2)×3.6	(18.71)	
SB06	2×5間	東西棟	N-87°20'-W	4.304×9.12 4.368×9.448	40.5	
SB07	2×3間か	南北棟	N-21°40'-E	不明	不明	
SB08	3×3間総柱	東西棟	N-81°-E	7.328×6.024 7.744×6.024	45.87	SB08→SB09
SB09	2×2間総柱	南北棟	N-3°20'-E	4.656×5.024 4.72×5.088	23.53	SB09→SB01 (2) (8)
SB10	2×2間総柱	東西棟	N-81°-E	3.344×4.264 3.56×4.32	14.79	
SB11	1×2間	南北棟	N-19°-E	2.08×3.856 2.032×3.92	7.88	
SB12	2×3間	東西棟	N-60°30'-W	3.024×5.024 3.48×5.184	16.58	SB02→SB12
SB13	2×2間	東西棟	N-57°-W	2.368×3.696 2.44×3.776	8.976	
SB14	2×2間総柱	南北棟	N-74°40'-W	4.32×(4.32)	(18.7)	
SB15	3×3間総柱	南北棟	N-37°-E	4.8×7.28 4.88×7.26	35.69	
SB16	2×2間総柱	南北棟	N-8°-W	3.64×3.772 3.768×4.0	14.144	
SB17	2×3間	東西棟	N-65°-W	3.32×7.384 3.304×7.40	24.522	
SB18	1(2)×3間	南北棟	N-4°-W	3.84×8.08 3.888×8.12	31.18	
SB19	2×2間	東西棟	N-85°-W	3.488×4.08 3.69×4.255	14.904	
SB20	2×2間	東西棟	N-68°-W	4.48×4.68 4.584×4.864	21.38	

4) 土壙 (SD)

SD01

SD01 (Fig. 28) 第5区北側台地上で検出した。木棺墓と考えられる。掘立柱建物SB05と重複しているが、先後関係は不明である。平面形は隅丸の長方形で、長軸および短軸の長さは、1.91m・1.16mである。長軸の方向はN-69°-W、断面形は逆台形で、深さは検出面から0.4m。床面は平坦で、長方形をなしており長辺1.25m、短辺0.54mを測る。埋土は暗褐色～灰褐色粘質土で、東壁と北壁に一段の平坦なテラスがある。東床面・壁は板材の圧痕が残る。出土遺物からみて12世紀半ばころのものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 30) 副葬品と考えられる土師器皿(3～7)・椀(8・9)が床面からやや浮いた状況で出土している。椀は東西壁際に、皿は中央にまとまって出土している。遺物の出土状況から頭部は西側に位置していたものと思われる。皿はいずれも表面が磨耗しており調整痕は不明であるが、おそらく回転ヘラ切によるもので、板目圧痕が残るものがある。椀8は内面のみに焼しを施した内里上器である。椀9は焼成があまい須恵質の椀で、底部は幅広の輪高台状に仕上げている。東播磨窯の可能性がある。その他埋土から二次的混入の格子目叩き痕の残る瓦片・瓦器等・須恵器・管状土錘10等が出土している。

SD02

SD02 (Fig. 28) 第4区西側で検出した。古墳時代の溝SM03より占い土壙である。平面形は南北に長い不定形で、断面形は逆台形である。長さ2.57m、幅1.2～1.5m、深さ0.9m。長軸方位N-18°40' - Eを測る。埋土は黒褐色粘質土である。埋土中からは弥生土器の小片がわずかに出土しているのみで、岡示し得るものはない。弥生時代前期末～中期以降のものと思われる。

SD03

SD03 (Fig. 28) 第6区西側に位置する。古墳時代の溝SM08よりも新しい。平面形は隅丸の長方形で、長さ0.98m、幅0.84m、深さ0.16～0.20cm。長軸の方向はN-38°-Wである。埋土は黒褐色～灰褐色粘質土で、木炭片を若干含む。床面は平坦である。出土遺物はない。

SD04

SD04 (Fig. 28) 第6区西側に位置する。溝SM08よりも新しい。平面形は不定形である。長さ1.58m、幅1.0～1.1m、深さ0.20cm。長軸方向はN-30°-Wである。埋土はSD03と同様に黒褐色～灰褐色粘質土で、木炭片を若干含む。床面は浅く窪んでいる。出土遺物は土師器片が若干出土している。

SD05

SD05 (Fig. 28) 第6区西側に位置する。SD03の約3m南西側に位置する。溝SM08よりも新しい。平面形は梢円形で、長さ0.75m、幅0.53m、深さ0.12cm。長軸方向はN-79° - Eである。埋土は灰褐色粘質土で、木炭片を若干含む。出土遺物はない。

5) 井戸 (SE)

SE01

SE01 (Fig. 28) 第4区中央に位置する。平安期の溝SM04の北壁に重複している。検出時には扁平な板石で上面を塞いでいた。平面形はほぼ円形で、断面形は円筒状である。直径0.8～0.9m、深さ0.85mを測る。埋土は暗灰褐色粘質土で一時的に埋め戻している。平坦な床面には拳人の河原石を敷き詰めている。素掘りの井戸と考えられる。鎌倉期に廃絶されたものと思われる。

出土遺物 二次的混入により埋土から土師器、白磁、青磁片が出土している。

SE02

SE02 (Fig. 29) 第2区東側で検出した。一辺1.52mの隅丸方形の竪穴を掘った後、井戸床面に桶を倒置し井筒としている。また竪穴の四隅には7~9cm角の柱を立て、ホゾ穴を穿って床面から約1.00mの高さに横木を渡し、長さ80cm以上、幅15~28cm、厚さ3.5~5cmの板目材を土留め用の板枠としている。井筒に用いた桶は口径0.52~0.62m、底部径約0.60m、高さ0.57~0.62mの杉材を用いており、井筒の底には拳大よりもやや大きな礫石を置き、水を汲む際の土砂の混入防止を図っている。12世紀前半頃に廃絶されたものと思われる。

出土遺物 (Fig. 30) 井筒内の埋土から土師器皿片11、黒色土器12、瓦器楕片13・青磁・白磁片が、また井筒の下部から馬の骨14が出土している。

SE03

SE03 (Fig. 29) 第4区南端部に位置する。平面形はほぼ円形で直径1.43mを測る。底部は二段掘となっており直径0.9m、深さ0.48mを測る。おそらく桶を用いた井筒がおさまっていたと思われる。埋土は黒褐色粘質土で砂礫・木炭片を含んでいる。平安時代末期から鎌倉初期に廃絶されたものと思われる。

出土遺物 埋土から弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁等の破片が出土している。いずれも小片で磨耗し二次堆積による混入品である。

SE04

SE04 (Fig. 29) 第4区西側、SD02の東側に位置する。平面形は梢円形で、長軸0.94m、短軸0.81m、深さ0.68mを測る。SE01~03と比べ規模が小さい。曲物を用いた井筒を据え置いた可能性がある。埋土は暗褐色粘質土で底部近くに木炭が比較的多く認められた。廃絶時期は明確でないが平安時代末期に廃絶されたものと思われる。

出土遺物 上師器破片・須恵器片がわずかに出土している。

6) 溝状造構(SM)

溝は全調査区で10条確認されている。これらは弥生時代前期末から平安時代にかかる時期のものである。調査で確認された先後関係は下記のようになる。

- ・ SM01→SM02
- ・ SM03→SM04
- ・ SM07→SM06→SM05
- ・ SM07→SM06→SM03
- ・ SM08→SM09→SM10
- ・ SM03とSM05との直接の切合い関係はないが、出土遺物から見てSM03→SM05の関係が考えられる。
- ・ SM01・05・08は一連の溝の可能性がある。

これらの所見をもとに、出土遺物から時期区分をすると次のようになる。

弥生時代前期末以降 古墳時代後期以降 平安時代後期～鎌倉時代

SM07	SM06	SM09
	←—————→ SM03	
	SM05	SM10
	SM08	SM02
	SM01	SM04

次に各溝の調査所見について述べる。

- SM01 SM01 (Fig. 17) 第5区の西南側に位置している。古墳時代後期以降の溝である。長さ26m以上、幅1.2m~1.4m、深さ0.4~0.6mを測る。断面形は逆台形で、緩やかに蛇行しながら北西~南東方向に延び、台地縁辺部と氾濫原の境で大きく開きながら終わっている。おそらく南側の氾濫原に流れこんでいたものと思われる。埋土は灰褐色~暗褐色粘質土で床面には黒色粘質土が薄く堆積している。なお、SM01はSM05・08と一連の溝と考えられる。
- SM02 SM02 (Fig. 17) 第5区の西南側に位置する。SM01と重複している。SM01よりも新しい。溝南端部は消滅している。長さ8m以上、幅1.0~1.2m、深さ0.17mを測る。埋土は灰色~暗青灰色砂質土である。
- SM03 SM03 (Fig. 18) 第4区と第5区にかけて検出した。ほぼ直線的に延びる溝である。総延長は101m、幅1.8~2.1m、深さ0.5~0.7mを測る。主軸の方向はN-47°40'~Wである。断面形は、基本的には逆台形と思われるが、部分的に浅皿状になる箇所もある。埋土は暗灰褐色粘質土を主とする (Fig. 19)。
- 第6区中央ではSM05・06・07・08が重複しており埋土が質的に類似しているために、明確な平面形および溝の走向の状況を確認することが難しかったが、土壟断面の結果 (Fig. 19) で先述したような先後関係が確かめられた結果、第5区の北側で3条並列している溝のうち、東端側の溝が第4区SM03につながるもので、また、最も古く考えられるSM06・07はSM03北側の当初部分と考えられた。すなわち、第6区中央から北側において、ある時期に溝の流路を東側に変更したものと考えられる。SM03の上限は古墳時代後期以降と考えられる。
- 出土遺物 (15~56) 弥生前期末~中期土器甕等の破片、黒曜石片、玄武岩破片、黒曜石または貞岩製の打製石錐 (18~46)、石斧 (47・49・50・53~55)、石包丁 (52)、磨石 (56)、管状土錐 (48)、土師器甕・瓶片、古墳時代須恵器(杯15~17、甕など)片が中層から下層にかけて、上層から上面で黒曜石製ナイフ形石器 (18)、中国産の北宋代の白磁片が出土している。弥生時代の遺物はかなり磨耗している。これらはいずれも二次的な堆積である。
- SM04 SM04 (Fig. 14, 18) 第4区中央から5区にかけて検出された平安時代末期の溝である。ほぼ直線的に東西に延びている。主軸の方向はN-87°30'~Eである。調査では長さ65mにわたって検出した。溝の両端はいずれもさらに延びている。断面形は逆台形である。南北両壁の傾斜は50~60°ほどで比較的傾斜が強く掘削されている。幅は2.2~3.1m、深さは0.8m~0.93mを測る。埋土は黒褐色粘質土を主とし、灰白色砂が下部から中位にかけて薄く堆積している。
- 当該溝の早良平野における復元条里上における位置を推定すると、里境から北に1坪分(約118m)北側へいった坪境上に位置している (Fig. 10)。
- 出土遺物 (57~175) 遺物はほとんどが埋土下層~中位からの出土で、二次的混入によるものが多く、いずれも磨耗している。出土分布は第5区東側から第4区の範囲が密度が高く、特に4区においては南壁側から投棄されたと考えられる土師器破片等が集中的に出土した。出土した遺物には、弥生土器(甕・鉢・壺など)、土師器(皿57~68・84~92・111~120・136・160・161・168・169、

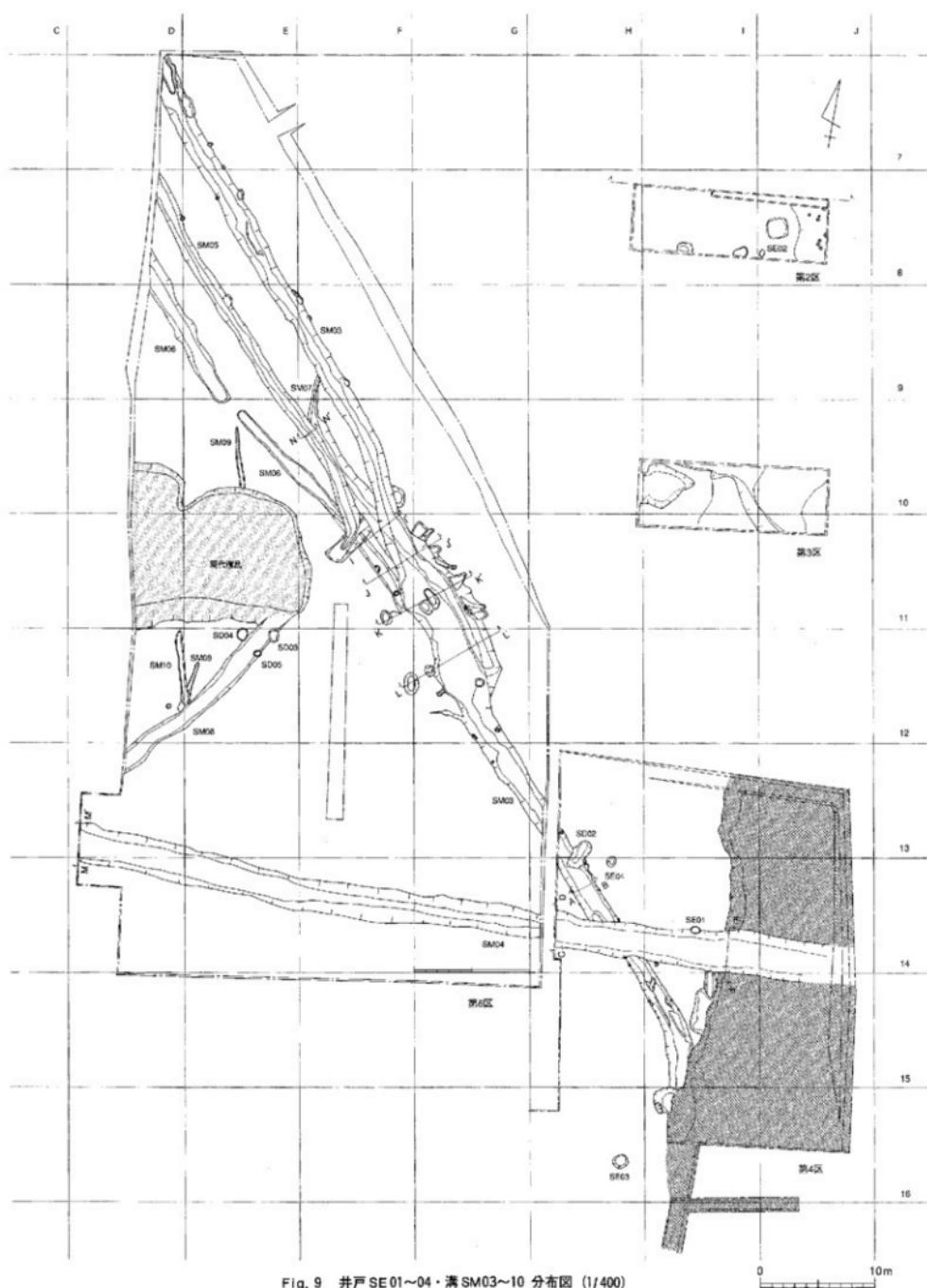


Fig. 9 井戸 SE01~04・溝 SM03~10 分布図 (1/400)

高台付皿93、丸底杯122・134・138、杯94・121・135、椀123)、黒色土器、瓦器(椀69~74・95~97・99~104・124~127・130~133・139~143・162~164、杯98、皿137)、須恵器(壺152、甕156、杯165)、中国産宋代白磁(皿75・76・147・148、椀77~82・105・106・109・128・129・144~146・149~151・167・171)、越州窯系青磁(壺83、椀107・166、皿108)、中国産陶器(鉢110)、滑石製品(紡錘車153、石鍋破片154、円面鏡155、土鍤170、板材172、下駄173、不明木製品174・175、馬下顎骨(00906))などである。

SM05 (Fig. 18) 第5区北側から中央に位置する。古墳時代後期以降の溝である。幅1.2~1.3m、深さ0.4~1.5mを測り、断面形は逆台形または浅皿状である。調査では長さ約37mにわたって検出された。南端部は南西に向かって屈曲しており、底部が緩やかに高くなりながら消滅している。その方向はSM08の方向に等しく、本来両者は同一の溝と考えられる。

出土遺物 須恵器、弥生土器、黒曜石の破片が埋土中位から上層にかけて散発的に出土している。

SM06 (Fig. 18) 第5区北側から中央に位置している。古墳時代の溝である。幅1.3~2.15m、深さ0.45m前後を測る。断面形は浅皿状であるが、逆台形をなしていたと思われる。調査では長さ38.2mを確認し、調査区西壁から14.8mの地点で1.7mの長さでいったん途切れている。南端部はSM03西壁に接する。

出土遺物 埋土中位から溝底部にかけて弥生土器・土師器片が出土している。

SM07 (Fig. 18) 第5区中央に位置する。弥生時代中期以降の溝である。北端部はSM03によって切られている。すでに述べたように、SM07はSM03北側の付け替え以前の溝である。古墳時代以降の溝から切られている。断面形はV字形または逆台形で、幅0.8~1.8m、深さ0.54m前後を測る。

出土遺物 埋土および溝底部から弥生前期~中期の上器片、玄武岩と黒曜石破片が出土している。

SM08 (Fig. 18) 第5区中央から南西部に位置する。溝東北端部は現代の擾乱によって消滅している。先述したSM05の一部と思われる。SM05との間には、少なくとも約3mの間隙があったことが考えられる。

出土遺物 遺物の出土量は少なく、弥生土器・土師器片が若干出土している。

SM09 (Fig. 18) 第5区南西部に位置する。鎌倉期以降の比較的新しいと考えられる溝である。非常に残りが悪く、幅0.6m、深さ0.2m前後を測る。土壤SD03~05によって切られている。

出土遺物 遺物の出土量は少なく、弥生土器・土師器片が若干出土している。

SM10 (Fig. 18) SM08・09を切っている。鎌倉期以降の溝である。遺存状況は悪く、幅0.7m、深さ0.3m前後である。

7) その他の遺物

各調査区の表土・表土直下の包含層、台地落ち際の氾濫原包含層などから各種の遺物が出土している。いずれも二次的に堆積したものである。重要と思われるものを、抜き出し、Fig. 39~44に図示した。個別の説明はTab. 2・3を

参照されたい。ここでは出土遺物の概要について述べる。

出土遺物は、弥生時代の土器片が大量にあるが、磨耗が顕著で小さな破片が多く図示し得るものは少なかった。時期的には弥生時代前期末から中期前半代にかかるもので、182・192・193・194・270・274はこの時期の所産のものと思われる。

出土遺物で主体となるのは、平安時代の遺物である。10世紀後半から12世紀半ば頃におさまると考えられ、特に、中国産越州窯系青磁214・216・219・240・250・256・258・263・267、新羅土器179・181、北宋代白磁195・197・198・241・243・245・246等は注意される。

国内産の陶器で注意されるのは、東播磨産と考えられるコネ鉢238等がある。SD01副葬品中の楕9と同様12世紀代のものと考えられる。

本遺跡の終末時期を推定する遺物に、鎌倉時代13世紀半ば頃の龍泉窯系青磁256、口禿の白磁257等があるが、数量的にきわめて少なく、遺物の出土状況から見ると、本遺跡の終末期は12世紀半ば頃と考えられる。



第4区溝SM04 馬下頸骨出土状況

第4章 結語

以上、調査所見について述べてきたが、今回の橋本榎田遺跡の調査成果についてまとめると以下のようになる。

1. 検出遺構について

橋本榎田遺跡の発掘調査は開発面積22,504.43m²のうち、遺構の存在が予想された6地点について調査区を設定し、総面積6,832.07m²を調査した。各調査区とも後世の削平や掘削等によって遺構の遺存状況は悪かった。検出遺構は、第1区では氾濫原の一部の確認、第2区では平安時代後期の井戸SE02、第3区では近代以降の土取り跡、第4区では土壙SD02、井戸SE01・03・04、溝状遺構SM03・04、氾濫原、第5区では川沖積台地上に1条の柵列SA01、20棟の掘立柱建物、木棺墓SD01、溝状遺構SD01・02、第6区では溝状遺構SM03～10、土壙SD02～04がある。

これらの遺構群は、弥生時代前中期から中期初頭を上限として、下限が平安時代末期頃までのものと考えられ、平安時代後期の遺構群が本遺跡を特色づけるものである。

以上の遺構群の先後関係は、遺構間の切合い関係、氾濫原と遺構との先後関係、各遺構内の埋土、規模、方向性等を勘案すると、大きく2群に分けられ、下記Tab. 2 のようになると推定された。

Tab. 2 橋本榎田遺跡検出遺構編年表

	掘立柱建物	方向性	柵列・溝状遺構	土壙	井戸	推定期
1-1期			SM07			弥生時代まで遡るか ↑
	SB12 SB13 SI5	a	SM06 SM03 (SM01・05・08)			古墳時代後期以降
1-2期	SB07・(SB11)・SB17・ SB20	b				
氾濫原(湿地または水田化)						
2-1期	SB05・SB03・14	c/e				平安時代 10世紀半
2-2期	SB09・SB19	d				
	SB02・SB16	d				
2-3期	SB08・SB10	f	(SA01)			
2-4期	SB01・SB18	e		SD01	SE01・02	12世紀後半
	SB04・SB06・(SB18)	e/c	SM02・09・10		SE03・04	

2、出土遺物について

遺構の遺存状況が悪かったこともあり、原位置で出土した遺物は少ない。第5区木棺墓SD01副葬遺物と第4区SM04埋土中位に投棄された遺物群が比較的まとまって出土したのみで、ほとんどが表土・包含層から出土した。出土量はコンテナケースで約40箱分で、調査面積に比して量的にはさほど多くない量である。

時代別に出土遺物をみると、先土器時代の石器、弥生時代前期から中期前半の土器・石器、古墳時代後期の須恵器、上師器、平安時代の国産土器（土師器、須恵器、瓦器等）、瓦、須恵質陶硯、滑石製品（石鍋等）、中国產青磁・白磁、朝鮮產陶器（新羅～高麗）、鎌倉時代の上師器、中国產青磁などがある。また木製品、馬下頸骨等も出土している。

ナイフ形石器

先土器時代のナイフ形石器18は形態的に見て当該時期終末に近い頃のものと思われる。

弥生時代の土器片が大量にあるが、磨耗が著しく小さな破片が多く図示し得るものは少なかった。時期的には弥生時代前期から中期前半位にかかるもので、182～192・193・194・270～274はこの時期の所産のものと思われる。磨製石鎌46・47は前期後半位の大陸系のものと考えられる。黒曜石のチップ、玄武岩の碎片等も出土しており、弥生時代のある一定期間において、当該地で集落が営まれた可能性が高い。

越州窯系青磁

出土遺物で主体となるのは、平安時代の遺物である。9世紀代のものがわずかにあり、10世紀後半から12世紀後半頃のものが主体となる。中国產越州窯系青磁214・216・219・240・250～256・258・263・267、朝鮮產陶器179～181、北宋白磁195・197・198・241～243・245・246等は、10世紀後半から11世紀代の本遺跡の性格づけを行うにあたって重要な遺物である。国内産の陶器で注意されるのは、9世紀代のものと考えられる須恵質の円面硯155がある。また、やや時代は降るが東播磨産と考えられるコネ鉢238、畿内系の瓦器13等がある。これらはSD01副葬品中の楕9と同様12世紀半ば頃と考えられ、当該期の国内流通の一端を知ることができる。

円面硯

本遺跡の終末時期を推定する遺物としては、鎌倉時代13世紀半ば頃以降と考えられる龍泉窯系青磁256、白磁218、口禿の白磁257等があるが、数量的にきわめて少ない。

したがって、遺物の全般的な出土状況および遺構のあり方から考えると、本遺跡は、弥生時代前期後半から末期を上限とする弥生時代、古墳時代後期以降の時期、平安時代後半から終末期の3時期に大きく区分できる（Tab. 2）

3、まとめ

ここでは、橋本櫻田遺跡の主体である平安時代後期の遺構群を中心に遺構配置等について述べまとめとする。

遺構の構成を見ると、おそらく氾濫原が形成された古墳時代後期以降から奈良時代もしくは平安時代初期を境として遺構の配置のあり方が、大きく変化し

ていることがわかる。すなわちそれ以前の遺構群はSM03をはじめとする磁北から西へ大きく偏する溝状遺構に規制されたあり方を示しているのに対して、それ以降の平安時代後期以降と考えられる遺構群はSM04の方向性にほぼ規制されているとみなすことができる。

早良区条里

日野氏によると、早良平野の条里は單一条里区からなり、その南北基軸線の方向は座標軸北から $7^{\circ}20'$ 西に偏しており（東西軸は $97^{\circ}20'$ 西偏）、また駅路は『和名抄』に記す田部郷（現在の小田部）とその南に続く有田の間を復元条里に平行しながら東西に横断すると想定している（Fig. 10の点線）。

駅路

この復元案と、先述の溝SM04の配置関係を図化するとFig. 10の様になる。SM04の復元条里における位置は、駅路推定線から南へ7町（約750m）下った東西里境（現在この境は大字橋本と大字戸切の境界である）から北へ約1町上った東西坪境上にほぼ近い。またSM04の主軸方位は磁北から西へ $92^{\circ}20'$ 偏している。国土地理院座標軸に換算するとN- $98^{\circ}21'$ -Wとなり、方位の上では約 1° のずれがあるが、検出範囲が狭いこともあり大局的にはほぼ合致していると考えられる。

したがって、今回の調査で検出されたSM04およびそれと方向を同じくするSB08等の建物群は、条里地割りに規制されたものと想定でき、その開始時期は遡って10世紀後半代以降と一応考えられる。なお、SM04から南へ約1町下ったの東西里境は額田郷と平群郷との郷境にあたる可能性が高く、本遺跡は額田郷内に属する遺跡と考えられる。

平安時代後期 居館跡

これらの遺構から構成される本遺跡の性格については、先述した遺物から見て、在地豪族層の居館跡と一応考えておきたい。SB01等は建物施設の内主要な建物とみなすことができ、総柱の高床倉庫と考えられるSB08等の大型家屋の存在は一時期当該地が郷倉的な機能を有していた可能性も示唆している。

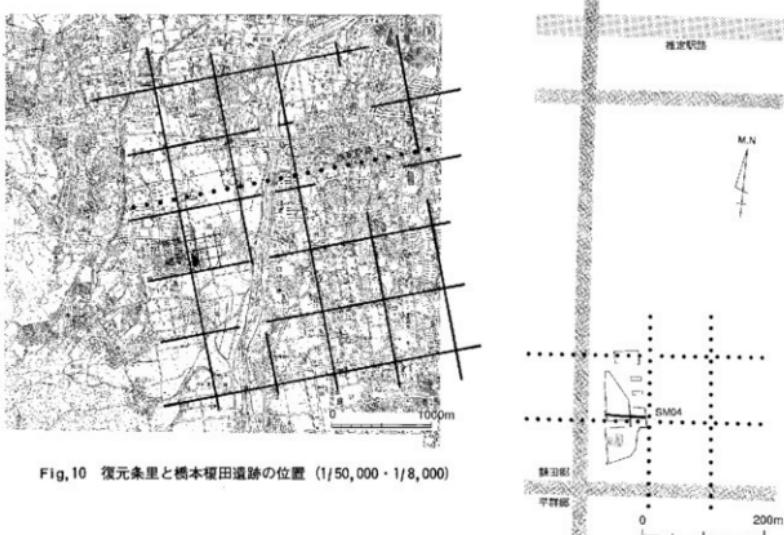


Fig. 10 復元条里と橋本櫻田遺跡の位置 (1/50,000・1/8,000)

Tab. 3 横木櫻田遺跡出土土器・陶磁器所見一覧表

凡例
●は素地(胎土)の容
法量の口径は外径、()は復元値

F.g	PL	揭露 遺物 登録 番号	種類	器種	法量(cm)			形態・技法上の特徴				出土地			
					L	W	H	高台高	高台低	成形・製作手法の特徴	色調				
30	14	1	646	土師器	丸底杯	14.7	3.8	—	—	—	口縁部内面・全体外面は回転ナデ。内面にヘラ印による略痕有。回転刃切底。	明褐色	良	良	SB02
30	44	3	649	土師器	皿	10.8	1.2	7.7	—	—	口縁部内面・全体外面はココナデ。板目江底有。	明褐色	良	軟	SD01 P.2
30	14	4	650	土師器	皿	10.7	1.3	8.2	—	—	口縁部内面・全体外面はココナデ。板目江底有。	明褐色	良	軟	SD01 P.3
30	—	5	652	土師器	皿	10.4	1.6	8.2	—	—	口縁部内面・全体外面はココナデ。	明褐色	良	軟	SD01 P.6
30	14	6	651	土師器	皿	10.8	1.4	7.8	—	—	体部及び口縁部内面はココナデ。	明褐色	良	軟	SD01 P.4
30	—	7	655	土師器	皿	10.5	1.4	9.8	—	—	口縁部内・外表面はココナデ。	明褐色	良	不良	SD01
30	14	8	653	土師器 (内里)	高台杯	15.1	5.9	—	0.6	6.8	口縁部内面～外面はミガキ。体部内面はヘラ印による略痕。裏面はナデツク。	黒灰色 外付：明褐色	良	やや良	SD01 P.8
30	14	9	654	土師器	碗	15.3	6.2	7.7	—	—	口縁部内面～外面は回転ユタケナデ。内面に横筋2列。外付は木挽捺有。底へ切底。	灰・暗灰色 休部：灰色	やや良	不良	SD01 P.8
30	—	11	662	土師器	皿	(9.2)	1.4	6.6	—	—	口縁部内面～外面は回転ナデ。	明褐色	良	やや良	SE02
30	—	12	663	黑色 土器	碗 底片	—	—	—	1.2	6.2	外面はナデツク。折圧痕有。	黒灰色	良	軟	SE02
30	—	13	661	瓦器	碗 縁部片	(16.5)	5.5	—	—	—	内～外面はミガキ。	灰白色	良	軟	SE02
30	—	15	685	須恵器	杯蓋片	11.6	3.7	—	—	—	内～外面は回転ナデ。回転ヘアカツ底。	青灰色	良	堅緻	SM03 D.7下層
30	—	16	689	須恵器	杯蓋片	14.2	4.2	—	—	—	回転ヘアカツ底。	青灰色	良	堅緻	SM03 D.8最下層
30	14	17	684	須恵器	杯片	11.7	4.05	冬山御所(空)遺跡 13.9 高さ1.6	—	—	内部内面はココナデ。回転ヘアカツ底。板目江底有。他は回転ナデ。	青色～ 灰色	良	堅緻	SM03 D.5-7下層
33	—	57	852	土師器	皿片	9.0	1.4	7.0	—	—	底部内面はココナデ。回転ヘアカツ底。板目江底有。他は回転ナデ。	明褐色	良	軟	SM04 鐵塗
33	—	58	872	土師器	皿片	9.4	1.5	7.2	—	—	底部内面はココナデ。ヘアカツ底。板目江底有。他は回転ナデ。	明褐色	良	良	SM04
33	—	59	873	土師器	皿片	9.7	0.9	8.0	—	—	ヘアカツ底。板目江底有。他は回転ナデ。	明褐色～ 明褐色	良	不良	SM04
33	—	60	868	土師器	皿	10.4	1.4	7.7	—	—	ヘアカツ底？(他は回転ナデ)。	明褐色	良	軟	SM04
33	—	61	867	土師器	皿	10.2	1.2	7.0	—	—	口縁部内面は回転ナデ。回転ヘアカツ底。	明褐色白色～ 明褐色	良	軟	SM04
33	—	62	763	土師器	皿	9.1	1.3	7.4	—	—	ヘアカツ底？溝溝不明。	淡褐色	やや 粗い	不良	SM04 F層
33	—	63	853	七輪器	皿片	(10.0)	1.4	8.4	—	—	内面一部外面はナデ。	明褐色	良	良	SM04 F.15; F.16; F.17; F.18
33	—	64	755	土師器	皿片	9.5	1.4	(7.1)	—	—	ヘアカツ。調査不明。	淡褐色	やや 細かい	不良	SM04 F.13
33	—	65	869	土師器	皿	9.2	1.6	6.9	—	—	内面～口縁部外面はココナデ。体部外面は回転ナデ。ヘアカツ底。板目江底有。	明褐色	良	良	SM04
33	—	66	871	土師器	皿片	9.1	1.3	6.7	—	—	内面～口縁部外面はココナデ。体部外面はナデ。ヘアカツ底。板目江底有。	明褐色	良	良	SM04
33	—	67	874	土師器	皿片	9.1	(1.5)	(7.0)	—	—	内～外面は回転ナデ。ヘアカツ底。	明褐色白色	良	軟	SM04
33	—	68	870	土師器	皿	9.1	1.9	7.3	—	—	内面～口縁部外面はココナデ。他部外面は回転ナデ。ヘアカツ底。板目江底有。口部に墨跡有。	灰褐色白色	良	(やや軟)	SM04
33	—	69	865	瓦器	楕片	15.7	4.5	—	0.5	6.0	内面～口縁部外面は回転ナデ後もミガキ。内面に重ね捺痕有。外縁に指圧痕有。	黒灰色	良	良	SM04
33	—	70	866	内墨 土器	楕片	15.5	(5.3)	—	—	—	高台神明。内面からし口縁部外面を焼いている。調整度は不明瞭。	黒褐色 外：暗褐色	良	不良	SM04
33	15	71	740	内墨 土器	楕	17.6	5.6	—	0.8	7.1	L字縁内～外表面はヘアカツ。他は手引ヘアカツ。真白付近はココナデ。	淡灰褐色 口縁は墨変	細かい	良	SM04 F.13
33	15	72	716	瓦器	楕	17.0	5.5	—	0.3	7.1	小窓切端へ向へるところに不定形状の凹部。外縁は指圧痕有。	灰褐色 外縁多：無	良	良	SM04 P.5
33	—	73	760	瓦器	楕片	15.8	4.7	—	0.5	6.1	ヘアカツ底。	灰白色	やや 細かい	不良	SM04 F層
33	15	74	759	瓦器	楕片	16.7	5.9	—	0.5	6.8	大窓ヘアカツ。口縁内～外表面はココナデ。内面はナデ。外縁外周部は指圧痕。底へ突出。	灰白色 外縁多：無	良	良	SM04 F.18
33	—	75	864	白磁	椭片	10.2	(2.5)	(3.4)	—	—	外面へカツ。純白・胎部・体部下部は無釉。内面露見に界線をめぐらす。	素：白色 胎：白磁無	稚長	堅緻	SM04

凡例：()は素地(陶土)の略
法皇の口徑は外径、()は復元値

Fig	PL	遺物登録番号	種類	器種	法量(cm)				形態・技法上の特徴				出土構造		
					口径	高さ	底径	高台高	高台径	成形・製作手法の特徴	色調	胎土	焼成		
33	9	76	733	白磁	口縁部片	10.0	0.2	—	—	—	口縁部外面にコナデ。体部外面は削りヘタリ有り。 口縁部内裏一面体部外側施釉。	素:灰白色 釉:透明釉	良	堅緻	SM04 D13
33	—	77	734	白磁	口縁部片	16.8	(4.1)	—	—	—	体部外表面下部コナデ。体部外面は削りヘタリ有り。 口縁部内裏一面体部外側施釉。	素:乳白色 釉:透明釉	良	やや良	SM04 D13
33	—	78	751	白磁	口縁部片	17.0	—	—	—	—	口面-口縁部外表面にコナデ。体部外面は削りヘタリ有り。 下半以下は露胎。	灰白色 半透明	良	堅緻	SM04 F13
33	—	79	750	白磁	口縁部片	16.5	—	—	—	—	口縁部外表面にコナデ。体部外面はハラケズリ。 下半以下は露胎。	素:白色 釉:灰白色	良	堅緻	SM04 F13
33	—	80	746	白磁	口縁部片	—	—	—	0.7	5.1	体部外表面下部は削りヘタリ有り。 内面一面全体外面は施釉。	素:透明白 釉:白色	良	良	SM04 F13
33	—	81	748	白磁	口縁部片	—	—	—	0.9	5.1	窓臺は回転ヘタリ上昇。 窓台外側は露胎。	黄褐色	良	やや不良	SM04 F13
33	—	82	747	白磁	口縁部片	—	—	—	1.3	6.0	内面に沈黙線1条。標目文有り。	素:灰白色 釉:灰黑色	良	堅緻	SM04 F13
33	15	83	744	青磁	壹胴片	—	(18.6)	—	—	—	外表面はコナデ。内面は痕を残す。 内・外側施釉。	素:湖白色 釉:青色	細かい	良	SM04 F13
34	—	84	861	土師器	皿片	8.4	1.0	6.8	—	—	内~外表面は削りヘタリ。	明褐色	良	軟	SM04 崩壊層上面
34	—	85	860	土師器	皿片	9.6	1.5	8.0	—	—	内面はコナデ。口縁部内一面は削りヘタリ。 回転系切底部。板目庄有り。	明褐色	良	良	SM04 崩壊層
34	—	86	722	土師器	皿片	9.1	1.2	6.6	—	—	内~外表面は削りヘタリ。回転系切底部。	明褐色	良	軟	SM04 F13
34	15	87	762	土師器	皿	8.5	1.4	6.6	—	—	糸切底部。	淡褐色	細かい	やや良	SM04 1号
34	—	88	723	土師器	皿片	9.1	1.2	7.5	—	—	内~外表面は削りヘタリ。	暗褐色	良	軟	SM04 F14
34	15	89	728	土師器	皿片	9.1	1.2	7.5	—	—	内~外表面はコナデ。回転系切底部。板目庄有り。	明褐色	良	軟	SM04 F19
34	—	90	717	土師器	皿	8.7	1.4	6.7	—	—	内~外表面は削りヘタリ。 底はハラケテ受チ付仕上げ。	灰褐色	良	やや良	SM04 P 7
34	15	91	732	土師器	皿	9.2	1.5	7.0	—	—	内~外表面は削りヘタリ。	淡赤褐色	細かい	不良	SM04 D 5
34	—	92	764	土師器	皿片	9.6	1.0	7.3	—	—	ハラ切底部。板目庄有り。	淡橙色	細かい	不良	SM04 1号
34	5	93	729	土師器	調味杯	10.7	3.4	6.4	1.1	—	見込みは不定方向のヘラミガキ。底は削りヘタリ有り。	明褐色	良	良	SM04 P 21
34	—	94	859	土師器	杯片	16.6	0.6	(13.0)	—	—	内~外表面は削りヘタリ。回転ヘタリ底。	暗褐色	良	不良	SM04 崩壊層
34	16	95	772	瓦器	楕	15.6	5.6	—	0.5	6.8	内~外表面はハラカによるミガキ。 窓臺はナラヅキ。外表面下半に擦損痕有り。	明褐色	良	軟	SM04 崩壊土上層
34	16	96	718	瓦器	楕	16.0	5.3	—	0.6	6.7	内面に刮削仕上げ。口縁部外表面は削りヘタリ。 ナラヅキヘタリ有り。底はナラヅキ一部へ3.5cm。	明灰色	良	良	SM04 P 6
34	16	97	719	瓦器	楕片	16.5	5.0	—	0.5	6.8	内~外表面は削りヘタリ。	灰~暗灰色 口縁部外表面	良	やや良	SM04 P 9.2層
34	16	98	720	瓦器	丸底杯	17.0	5.2	—	—	—	内面はコナデ。ミガキ。体部外面は削りヘタリ。 削痕へ凹凸感。板目庄底の手括子有りヘタリ。	灰~暗灰色 口縁部	良	やや良	SM04 P 9.1-2層
34	16	99	721	瓦器	楕片	16.6	5.9	—	0.5	6.0	見込みは手括子ヘタリ有り。 内面は削りヘタリ有り。外表面は削りヘタリ。 底はナラヅキ。底はナラヅキ一部へ3.5cm。	灰~暗灰色 口縁部外表面	良	良	SM04 P 10
34	16	100	724	瓦器	楕	16.8	5.3	—	0.6	6.1	内面に擦損痕有り手括子ヘタリ有り。 外表面は削りヘタリ有り。底はナラヅキ。底はナラヅキ一部へ3.5cm。	灰~深褐色 外表面	良	良	SM04 P 15
34	16	101	725	瓦器	楕	16.5	4.5	—	0.7	6.3	内面はヨコ方向のヘラミガキ。口縁~一体 外表面は削りヘタリ有り。	灰~暗灰色 口縁部	良	良	SM04 P 16
34	16	102	726	瓦器	楕片	16.6	5.1	—	—	—	内~外表面削りヘタリ有り。	暗灰褐色	良	良	SM04 P 17
34	16	103	727	瓦器	楕片	17.2	5.8	—	0.5	7.7	内~外表面削りヘタリ有り。	黑灰~灰色	良	やや良	SM04 P 18
34	16	104	730	瓦器	楕片	16.1	5.2	—	0.6	6.0	内~外表面は手括子ヘタリ有り。窓臺はナラヅキ。 底はナラヅキ。底は板目庄底ナラヅキ。	青~三色~銀色 外表面	良	良	SM04 P 22
34	—	105	863	白磁	楕底部片	—	—	—	0.8	6.8	高白は回転ヘタリ有り。窓臺。	素:白色 釉:透明	良	堅緻	SM04
34	16	106	715	白磁	楕	15.4	6.0	—	0.9	6.4	体部外面はコナデ。下半は削りヘタリ。 見込みは削痕有り。その上に擦損痕有り。	空色~やつら 底~白色	やや良	堅緻	SM04 P 2
34	—	107	857	越州窯系青磁	楕底部片	—	—	—	0.5	7.0	疊付に目模。全面施釉。	赤褐色	良	堅緻	SM04 崩壊層
34	—	108	858	越州窯系青磁	皿底部片	—	—	—	5.7	—	見込み~疊付に目模。	茶褐色	良	堅緻	SM04 崩壊層

凡例 素は素地(船底)の格
法蓋の口径は外径、()は復元値

Fig	PL	馬板 遺物 登録 番号	種類	器種	法 城(cm)				形態・技法上の特徴				出土層構		
					口幅	底径	高台高	高台径	成形・製作手法の特徴	色調	胎上	焼成			
34	19	109	757	白磁	燒 口縫部片	15.2	—	—	—	体外部外面は回転ヘラカズリ、下位は露胎。	白色透明	良	堅緻	SM04 1層	
34	—	110	768	陶器	鉢片	25.6	11.2	12.8	—	内～外面ヨコナデ。口縫部内部は貼付。	暗灰褐色～ 暗紫灰褐色	良	良	SM04 2層	
35	16	111	799	土師器	小皿	9.0	1.5	7.6	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡褐色	細かい	良	SM04 2層	
35	16	112	793	土師器	小皿片	(8.8)	1.4	(6.6)	—	口縫部内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡黃白色	細かい	やや良	SM04 2層	
35	16	113	791	土師器	小皿	9.4	1.4	7.9	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡褐色	細かい	やや良	SM04 2層	
35	16	114	792	土師器	小皿片	(9.8)	1.4	(8.6)	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡灰褐色	細かい	やや良	SM04 2層	
35	—	115	794	土師器	小皿片	(8.8)	1.4	(6.6)	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。 板目圧痕有。	淡褐色	細かい	やや不良	SM04 2層	
35	16	116	789	土師器	小皿	9.2	1.5	7.9	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。 板目圧痕有。	淡褐色	細かい	良	SM04 2層	
35	—	117	795	土師器	小皿片	(9.0)	1.2	(5.0)	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡褐色	細かい	やや良	SM04 2層	
35	—	118	798	土師器	小皿片	(9.6)	1.1	(8.0)	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。 板目圧痕有。	淡赤褐色	細かい	良	SM04 2層	
35	—	119	796	土師器	小皿片	(9.6)	1.2	(7.3)	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。 板目圧痕有。	淡赤灰色	細かい	良	SM04 2層	
35	—	120	797	土師器	小皿片	(9.8)	1.3	(7.7)	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	淡黃白色	細かい	不良	SM04 2層	
35	—	121	788	土師器	丸底杯片	16.4	2.5	(12.6)	—	内面はミガキか？口縫部内部～体部外面 はヨコナデ。ヘラ切り底。指圧痕有。	褐色	細かい	良	SM04 2層	
35	—	122	787	土師器	丸底杯片	15.3	3.3	7.8	—	内～外面はヘラカズリ。	赤：明褐色 底部：黒色	良	やや軟	SM04 2層	
35	—	123	784	瓦器	楕	16.7	—	—	—	外表面と丁寧なヘラミガキ。 口縫部は毛縫状で肥厚する。	明褐色	良	硬	SM04 2層	
35	16	124	774	瓦器	楕片	(15.4)	5.2	—	0.7	6.5	内面にはヘラ噴き。外表面下半には不定 方向へのヘラミガキ。	墨灰色～ 暗灰色	良	良	SM04 2層
35	17	125	775	瓦器	楕	16.6	5.4	—	0.5	6.7	内～外面はヘラミガキ。面白はナデツケ。 体部外表面下位に斜削痕認。板目圧痕有。	墨灰色 内：灰色	良	良	SM04 2層
35	17	126	776	瓦器	楕片	16.3	5.5	—	0.5	6.9	内面は横方向へのヘラミガキ。外表面下 位はナメ方角のヘラミガキ。	墨灰～ 暗灰色	良	軟	SM04 2層
35	17	127	777	瓦器	楕片	17.4	5.8	—	0.4	6.3	内～外面へヘラミガキ。裏白はナデツケ。	外：墨褐色 裏：白色	良	軟	SM04 2層
35	—	128	769	白磁	楕	—	—	—	2.3	6.5	高台内は円形の焼き台(ハマ)を使用。	素：淡白色 椭：白褐色	良	良	SM04 2層
35	—	129	770	白磁	焼 口縫部片	16.2	(4.8)	—	—	—	内～外面に施釉。	素：淡白色 椭：白褐色	良	良	SM04 2層
35	17	130	780	瓦器	楕片	16.9	5.0	—	0.5	6.7	口縫部内～体部外面はヘラミガキ。 高台は白。	内：墨灰色 外：墨灰色	良	やや良	SM04 2層
35	17	131	781	瓦器	楕片	16.5	5.2	—	0.7	7.3	口縫部内～体部外面はヘラミガキ。面白はナデツケ。 体部外表面下位・高台に指圧痕。	内：墨灰色 外：灰色	良	やや良	SM04 2層
35	—	132	782	瓦器	楕	16.5	4.7	—	0.5	8.4	やや浅めの施釉。体部中央に弱い接縫が 認めぐる。	墨灰色～ 灰褐色	良	良	SM04 2層
35	17	133	783	瓦器	楕片	16.6	5.3	—	0.4	5.8	口縫部内～体部外面はヘラミガキ。 不定方向へのヘラミガキ。体部外表面下位はヘラミガキ。 高台は白。	口縫部： 墨灰色 不定方向へのヘラミガキ。 体部外表面下位はヘラミガキ。 高台は白。	良	良	SM04 2層
35	—	134	785	土師器	楕	16.3	(4.7)	—	—	—	高台剥離。内外面とも丁寧なヘラミガキ。	明褐色	良	良	SM04 2層
35	—	135	786	土師器	楕	17.4	5.0	—	0.8	(7.6)	内外面ともヘラミガキ。体部上位に弱い接 縫が認めぐる。	青～ 赤褐色	良	軟	SM04 2層
35	17	136	741	土師器	皿	9.0	1.2	6.7	—	—	内～外面ヨコナデ。ヘラ切り底。	褐色	細かい	良	SM04 E13
35	17	137	834	瓦器	皿	10.0	1.6	8.0	—	—	内～外面ヨコナデ。底に指圧痕有。	灰色	細かい	堅緻	SM04 2b層F13
35	—	138	826	土師器	丸底杯片	(13.4)	2.6	(8.5)	—	—	外面ヨコナデ。ヘラ切り底か？	暗褐色	細かい	不良	SM04 2a b層
35	17	139	773	瓦器	楕	15.9	5.5	—	0.6	(6.1)	内～外面はナデの後ミガキ。	墨色～ 暗褐色	良	良	SM04 2層
35	17	140	778	瓦器	楕	15.8	4.9	—	0.5	6.5	外側の周一帯は焼成材で、体部一概に手付ひれ。 高台はナデツケ。	外：墨灰色 内：灰褐色	良	良	SM04 2層
35	—	141	824	瓦器	楕片	(17.6)	5.6	—	0.5	(6.3)	内～外面はヨコナデ。体部外面・板目圧痕。 高台は焼成三角を望し。貼付後ヨコナデ。	外：墨灰色 内：灰白色	細かい	堅緻	SM04 2 a b層

Fig	PL	器物 件名 番号	種類	器種	法 量(cm)				形 態・技 法		上 の 特 徴			出土構
					口径	器高	底径	高台高	高台厚	成形・製作手法の特徴	色 調	胎 土	燒 成	
36	-	142 825	瓦器	桷片	(17, 6)	-	-	-	-	口端部に乳頭状突起。体部底面は手跡へアリ。高台内にはヘラ切り。板目痕有。	灰白色 乳頭状突起 板目痕	細かい	堅緻	SM04 2 a b層
36	-	143 838	瓦器	桷	16, 1	5, 3	-	0, 9	7, 4	高台部に凹凸状突起。体部底面は手跡へアリ。高台内にはヘラ切り。板目痕有。	灰白色 凹凸状突起 板目痕	良	やや軟	SM04 2層
36	-	144 854	白磁	桷 高台片	-	-	-	1, 4	5, 5	高台部に凹凸状突起。高台はナックル。内底は横方向へのハサギ半。	白色不透明	良	堅緻	SM04 2 b 層 P13
36	-	145 739	白磁	桷 高台片	-	-	-	2, 0	5, 3	内外面は凹凸状突起。	灰白色透明	良	堅緻	SM04 E13
36	19	146 829	白磁	桷 高台片	-	-	-	0, 6	5, 0	内外面は凹凸状突起。	素白色 凹凸状突起	やや粗い	堅緻	SM04 2 b層
36	19	147 737	白磁	桷 口縁部片	9, 6	2, 5	3, 4	-	-	体部外面はヨコナギ。底はナデ。	素白色 ヨコナギ	良	やや粗い	SM04 E13
36	19	148 823	白磁	桷 口縁部片	(10, 2)	2, 6	(5, 3)	-	-	口縁部内部へ体部外面に施釉。	素白色 施釉	良	良	SM04 2 a b層
36	-	149 817	白磁	桷 高台片	-	-	-	1, 7	6, 2	体部外面に施釉。	素白色 施釉不可用	良	良	SM04 2 a b層
36	-	150 738	白磁	桷 口縁部片	15, 2	(5, 2)	-	-	-	口縁部外面はヨコナギ。体部外面はヘラグリ。口縁部内部へ体部外面に施釉。	灰白色 ヘラグリ 施釉不可用	良	堅緻	SM04 E13
36	F7	151 833	白磁	桷	15, 2	7, 4	-	0, 9	7, 4	体部外面は凹凸状ヘラグリ、下位は露胎。	淡黃白色 不透明	良	堅緻	SM04 2 b 層 F13
36	-	152 903	須恵器	壺 口縁部片	18, 8	-	-	-	-	底部に9条の櫛文。	灰白色	良	堅緻	SM04 2 a b層
36	17	155 905	須恵器	円衝窓	外径 11, 8	海径 8, 0	-	-	-	海部には調整痕がそのまま残る。	青灰~灰色	やや粗い	やや軟	SM04 2 a b層
37	-	159 767	須恵器	桷 口縁部片	25, 2	38, 0	-	-	-	口縁部外側はコチコチ。体部窓口はヨコナギ。体部外面は平行タキシをナメ板子灰に施す。	灰白~ 灰青色	良	やや軟	SM04 2層
37	-	160 842	土師器	皿	8, 9	1, 1	7, 1	-	-	見込みはヨコナギ。内面へはクロ回転す。内面は露胎。	明褐色	良	やや軟	SM04 2層
37	-	161 843	土師器	皿	9, 1	1, 1	6, 7	-	-	回転ヘラ切りか。	明褐色	良	やや軟	SM04 2層
37	-	162 841	瓦器	桷	16, 3	5, 0	-	0, 4	6, 2	内外面へヨコナギ。体部中位は一部ヘラグリ。	墨灰~ 暗褐色	良	良	SM04 2層
37	-	163 839	瓦器	桷	16, 1	4, 8	-	0, 6	7, 2	体部外面は崩岸痕の後、ヘラミガキ。高台はナックル。内面へ重ね焼き痕有。	墨灰~ 暗褐色	良	良	SM04 2層
37	18	164 837	瓦器	桷	15, 4	5, 1	-	0, 5	6, 1	内面へ口縁部外面はヘラミガキ。体部窓口はテナヘラミガキ。	灰~灰褐色 窓口部 施釉不可用	良	軟	SM04 2層
37	-	165 878	須恵器	杯身	11, 2	(4, 2)	受容外径 13, 8	0, 6	-	内面へ体部外面は回転ナゲ。見込み内底には押印花文。口縁部はやや内凹気味。	灰~ 灰白色	良	堅緻	SM05 壁上層
37	18	166 835	靜州窯 系青磁	小椀	10, 0	4, 0	-	0, 5	5, 2	高台・体部下部露胎。見込み内底には押印花文。口縁部はやや内凹気味。	細密青色 手透明	細かい	良	SM04 2層
37	18	167 836	白磁	桷	16, 3	6, 8	-	0, 8	7, 3	見込みは脂状焼け。高台はヘラグリ。高台内にはヘラグリ。体部下面下位は露胎。	淡黃白色 不透明	良	堅緻	SM04 2層
37	18	168 731	土師器	皿	9, 4	1, 6	6, 9	-	-	内~外側面は回転ナゲ。底は回転ヘラ切り。後段部は唐模をナメ。	灰~ 灰褐色	良	軟	SM04 F28
37	-	169 856	土師器	皿	10, 3	(1, 4)	(7, 7)	-	-	内~外側面は回転ナゲ。回転ヘラ切り底。	明褐色	良	良	SM04 粗面層
37	-	171 848	白磁	桷 底部片	-	-	-	1, 2	6, 5	見込みは脂状焼け。高台はヘラグリ。高台内にはヘラグリ。体部下面下位は露胎。	素灰白色 施釉不可用	良	堅緻	SM04 2層
39	-	176 441	土師器	皿	9, 1	1, 3	6, 8	-	-	内~外側面は回転ナゲ。回転ヘラ切り底。	明褐色	良	軟	5区 表採
39	-	177 431	静州窯 系青磁	桷	-	-	-	0, 7	4, 7	内面に草花文。高台は露胎。やや小振り。	モスグリーン 透明	良	堅緻	表採 (試掘)
39	-	178 436	静州窯 系青磁	輪花絞	(12, 8)	5, 2	-	0, 7	4, 3	見込みに露胎ダマリ。肩付は輪花をカギり。高台内はヘラグリ。	素: 灰白色 肩: モスグリーン	良	堅緻	表採 (試掘)
39	-	179 405	胡瓶 陶器	桷 口縁部片	(19, 8)	-	-	-	-	内~外側面は回転ナゲ。	墨灰色 素: オーバル	良	良	5区 表土層
39	-	180 434	新羅 須恵器	婬片	-	-	-	-	-	内面は平行アーチ。外側面は格子目クタキ。外側面はタタタ後斜傾方向へのハサギ調整。	青灰~ 青褐色	良	堅緻	表採 (試掘)
39	-	181 403	新羅 須恵器	婬 底部片	-	-	-	-	-	内面は平行タタタ後斜傾方向へのハサギ調整。	青灰~ 暗褐色	良	堅緻	5区 表土層
41	19	195 446	白磁	輪花地 底部片	(13, 8)	4, 6	-	0, 9	4, 8	体部外面~裏白はヘラグリ。内面には草花文。	白色	良	堅緻	5区 表土層
41	-	196 452	土師器	皿	9, 8	1, 5	7, 8	-	-	内~外側面は回転ナゲ。回転ヘラ切り底。	暗褐色	良	軟	割合層 1区 地盤 1層
41	-	197 448	白磁	桷 口縁部片	(15, 1)	-	-	-	-	体部外面下位は回転ヘラグリ。	白色	良	堅緻	5区 表土層

凡例 | 素は素地(胎土)の名
法は法縁の口径は外径、()は復元値

Fig.	PL.	指標 遺物 登録 番号	遺物 種類	器種	法 縁(Φ)				形態・技法上の特徴				出土遺構			
					口径	器高	底径	高台高	高台厚	成形	製作手法の特徴	色調				
41	-	198	449	白磁	楕	底部片	-	-	-	1.6	5.7	体部外面下位～高台は回転ヘラケズリ。 底辺は回転ヘラクの後板付底座をナデ。	素:灰-白色 輪:銀色透明	良	堅緻	包含層
42	B	200	521	十瓣器	皿	9.4	1.6	7.3	-	-	-	内-外面は山輪ナデ。 既に回転ヘラク切後の板付底座。	褐色	良	軟	包含層4区 台地層
42	-	201	485	土師器	皿	10.1	1.4	8.8	-	-	-	口縁部外側は輪郭ナデ。 既に回転ヘラク切後の板付底座。	褐-暗褐色	良	軟	包含層4区 H14シルバ
42	B	202	536	土師器	皿	9.6	1.4	6.7	-	-	-	内底はコナデ。口縁部内-外面は回転ナデ。 既に回転ヘラク切後の板付底座。	明褐色	良	軟	包含層4区 台地層3層
42	-	203	522	十瓣器	皿	9.6	1.7	6.2	-	-	-	内-外面は山輪ナデ。口縁部切底。	明褐色	良	軟	包含層4区 台地層
42	-	204	532	土師器	杯	(13.1)	3.1	9.2	-	-	-	内底はコナデ。口縁部内-外面は回転ナデ。 既に切底。	包含層4区 台地層2層			
42	-	205	484	十瓣器	丸底杯	(16.3)	3.8	-	-	-	-	内-外面はナデ。内底に指痕。既に板付底座。	明褐色	良	軟	包含層4区 H14シルバ
42	B	206	483	土師器	碗	(14.8)	5.6	-	0.9	6.8	-	内底はコナデ。指痕有。高台は回転ナデ。	明褐色 口縁:黒色	良	やや硬	包含層4区 H14下2層
42	-	207	507	瓦器	楕	(16.2)	5.0	-	0.6	7.0	-	内-外面はやや粗いラミガキ。高台はナデツブナデ。	黑色	良	やや硬	包含層4区 台地
42	-	208	467	土師器	丸底杯	(15.6)	3.8	-	-	-	-	既に回転ヘラク切後、ナデ。	明褐色	良	軟	包含層 H13下2層
42	B	209	478	瓦器	楕	底部片	(16.5)	4.6	-	0.5	6.2	内-外面は横方向は横方向のヘラミガキ。 既に板付底座ナデツブナデ。高台はナデツブナデ。	灰-墨灰色	良	硬	包含層 H13脚層
42	-	210	465	土師器	楕	(15.4)	5.8	-	0.9	6.7	-	内底は不定方向ナデ。指痕有。外側は回転ナデ。高台はナデツブナデ。	明褐色 口縁:黒色	良	軟	包含層 H12下2層
42	B	211	490	白磁	ミニチュア 皿	3.8	1.6	-	0.5	2.3	-	体部外面～高台は回転ヘラケズリ。	素:白色 輪:透明	良	堅緻	包含層4区 H15
42	-	212	502	高麗 青磁	楕	底部片	-	-	-	0.6	4.8	高台内に部分的に釉がかかる。	素:灰-色 輪:半透明	良	堅緻	包含層4区 台里
42	-	213	503	白磁	蓋または 蓋付	蓋付高台 底付片	4.2	1.4	-	-	-	つまみは宝珠形か。	素:白色 輪:半透明	良	堅緻	包含層4区 台地
42	B	214	628	越州窯 系青磁	楕	底部片	-	-	-	0.45	6.1	見込みに日痕。 高台は回転ヘラケズリ。	釉が剥落	良	堅緻	包含層4区 S3酸化鉄混
42	B	215	528	青釉 陶器	楕	底部片	-	-	7.0	-	-	内外面は薄いオーラー色の釉を施す。 胎土は須恵質で灰色。	素:灰色 輪:透明	良	良	包含層4区 台地活復土
42	-	216	501	越州窯 系青磁	楕	底部片	-	-	-	1.1	7.0	高台内に日痕。内-外面にヒビ施す。	素:灰-色 輪:ミクラン	良	良	包含層4区 台里
42	-	217	464	白磁	口縁等片	9.4	-	-	-	-	-	内面から口縁部外側に施す。 口縁部は土塗状に肥厚する。	スリガラス 半透明	良	堅緻	包含層 H12下2層
42	B	218	524	白磁	楕	口縁等片	-	-	-	-	-	外面にヒラ片割による花文。	輪:透明 部分:青色	良	堅緻	包含層4区 台地活復土
42	-	219	515	越州窯 系青磁	楕	底部片	-	-	(10.2)	-	-	体部下面下位に水びき痕。 見込みに日痕。	素:灰色 輪:ガーネ	良	堅緻	包含層4区 台地
42	-	220	477	白磁	楕	(15.7)	6.5	-	0.8	5.5	-	内底に6本のヒビ施す。体部外面中～下位は回転ヘラケズリ。下位は露胎。	素:白色 輪:青磁青白	良	堅緻	包含層 H13脚層
43	-	226	481	白磁	皿	底部片	-	-	3.5	-	-	体部外面下位～底座はヘラケズリ。露胎。	素:青白-白色 輪:青磁水色	良	堅緻	包含層4区 H16下2層
43	-	227	499	土師器	皿	(9.1)	1.9	5.9	-	-	-	内-外面はナデ。回転糸切底。	明褐色	良	軟	包含層4区 台地下4層
43	-	228	494	土師器	皿	10.7	1.5	8.4	-	-	-	内-外面は回転ナデ。 既にヒラ切後板付底座。	明灰褐色	良	軟	包含層 H15脚層S1
43	-	229	460	白磁	楕	口縁等片	(16.4)	-	-	-	-	体部下部に火照跡。ヘラケズリ。 内底上位に界縫をめぐらす。	素:白色 輪:从白色	良	堅緻	包含層 H13下2層
43	-	230	456	白磁	楕	底部片	-	-	-	0.75	7.0	体部外面下位～底座は回転ヘラケズリ。	素:灰-色 輪:青磁青白	良	堅緻	包含層4区 H15脚層S1
43	-	231	489	白磁	楕	底部片	-	-	-	0.8	6.3	体部外面下位～底座は回転ヘラケズリ。	灰白色透明	良	堅緻	包含層4区 H14-3層
43	-	232	475	土師器	丸底杯	(15.8)	3.3	-	-	-	-	内底は指痕有りコナデ。口縁部内-外面は 既にコナデ。既に回転ヘラケズリ。	明褐色	良	軟	包含層 H13-4層
43	-	233	474	土師器	丸底杯	(15.6)	4.2	-	-	-	-	内底は指痕有りコナデ。口縁部内-外面は 既にコナデ。既に回転ヘラケズリ。	暗-黑褐色	良	軟	包含層 H13-4層
43	-	234	492	土師器	丸底杯	(16.1)	4.0	13.2	-	-	-	内-外面は回転ナデ。回転ヘラケズリ。	灰褐色	良	軟	包含層4区 H15
43	-	235	497	黒色 土器	楕	口縁部片	(16.5)	4.7	-	-	-	内-外面はナデ。 体部外面中位に指痕有。	黒灰色	良	やや硬	包含層4区 台地3層
43	B	236	466	土師器	楕	(14.0)	5.4	-	1.5	6.8	-	内-外面は回転ナデ。 既に火照跡有り。内底内側有り。内底下部有り。	明褐色	良	やや硬	包含層 H13下2層

凡例 | 実は墓地(船土)の略
法量の口括は外径、()は復元値

Fig	Pl	指標 遺物 番号	遺物 登録 番号	種類	器種	法量(cm)				形態・技法上の特徴				出土遺構		
						口径	高さ	底径	高台高	高台厚	成形・製作手法の特徴	色調	胎土	焼成		
43	-	237	482	丸壺	口縁部片	(16, 6)	5.9	-	-	-	内外面はヘリカギ(体部外斜下位は横方向)。内底に指圧痕。	灰~黒灰色	良	硬	包含層4区 H13台下2層	
43	19	238	457	東播系 漆器質土器	こね鉢	(21, 9)	8.3	9.0	-	-	内底は不定方向のナゲ。内部外斜下位は凹輪ナゲ。	青白から朱色 口縁部: 黑灰色	良	軟	包含層4区 H13層	
43	-	239	488	上神宮 土器	唐	31.8	24.8	-	-	-	口縁部下位はカギナガ。内底はコロハケ。下部はタラハサ。体部外斜下位はターナナカケ。	青上部: 黑褐色 内: 暗褐色	粗い	軟	包含層4区 H13~14層	
43	20	240	470	越州窯 系青磁	楕円片	-	-	-	0.6	6.8	縫合付に目底。	素: 黄~淡褐色 釉: 青磁	良	堅密	包含層H13~4層	
43	-	241	469	越州窯 系青磁	輪花碗	口縁部片	-	-	-	-	口縁部端にカギによる切込み、五輪花か。 青緑色を帯びた透明釉を全周施釉。	素: 黄色 釉: 青緑色	良	堅密	包含層H13台下4層	
43	19	242	468	青白磁	有蓋子鉢	-	-	-	-	-	青緑色を帯びた透明釉を全周施釉。 身と蓋が着目。毛彫文様有。	素: 青緑色 釉: 透明	良	堅密	包含層H13台下4層	
43	19	243	455	白磁	輪	口縁部片	17.8	-	-	-	内面に1条の直線。外面は回転ヘリケツリ、彫飾による花纹。	素: 白色 釉: 透明	良	堅密	包含層4区 H13セクションP1	
43	-	244	475	新羅 陶器	瓦または 瓦蓋板片	-	-	(17, 0)	-	-	内外面ナメ仕上げ。胎土には白色細砂を含む。	青灰~墨灰色 薄: 黑色	不良	軟	包含層H13~4層	
43	-	245	504	白磁	輪	(15, 2)	7.2	-	1.6	6.6	内面に1条の直線。体部外斜下位~高台内は凹輪ヘリケツリ。	素: 白色 釉: 黄白色	良	堅密	包含層4区 台地下	
43	-	246	505	白磁	輪	底部片	(15, 5)	6.1	-	1.2	5.2	内底は輪状カリ。体部外斜中位~高台内は回転ヘリケツリ。	素: 白色 釉: モルテン	良	堅密	包含層4区 台地下
44	19	247	539	土師器	皿	10.1	1.3	8.2	-	-	内底はコロナギ。口縁部内~外面は回転ナゲ。回転ヘリケツリ。	灰褐色	良	軟	包含層5C-1段 黑色土上面	
44	19	248	540	土師器	杯	11.3	3.5	7.5	-	-	内底はコロナギ。口縁部内~外面は回転ナゲ。回転ヘリケツリ。	明褐色	良	やや硬	包含層5C-2段 黑色土上面	
44	19	249	562	土師器	刷毛皿	11.8	2.6	-	脚高 1.3	8.8	内~外面は回転ナゲ。高台はナデツク。	明褐色	良	軟	包含層5区	
44	20	250	558	越州窯 系青磁	輪	底部片	-	-	0.5	6.5	高台部は回転ヘリケツリ。 高台付近崩壊に目底。	素: 黄白色 釉: 不透明	良	堅密	包含層5区	
44	-	251	629	越州窯 系青磁	輪	底部片	-	-	-	1.0	6.9	見込みに目底。高台は回転ヘリケツリ。	素: 黄褐色 釉: 刻絵	良	堅密	包含層5区
44	-	252	557	越州窯 系青磁	輪	底部片	-	-	-	0.8	7.0	見込みに草花文。 体部外斜下位は回転ヘリケツリ。	素: 黄褐色 釉: 刻絵不透明	良	良	包含層5区
44	20	253	581	越州窯 系青磁	輪	底部片	-	-	5.0	0.5	高台はナデ。見込みは施釉。 体部外斜下位~高台は施釉。	素: 黄褐色 釉: 施釉	良	堅密	包含層2次 D-11	
44	20	254	538	越州窯 系青磁	輪	底部片	-	-	-	0.8	8.0	見込みと高台付に目底。	素: 黄褐色 釉: 黄褐色	良	堅密	包含層5区 白里土埋埴
44	-	255	561	越州窯 系青磁	輪	底部片	-	-	-	0.8	6.2	高台付に鉄錆を施す。	青褐色 半透明	良	堅密	包含層5区
44	-	256	556	越州窯 系青磁	輪	底部片	15.1	-	-	-	外面には落葉文。鏡はなく平坦である。	素: 黄白色 釉: 綠褐色	良	堅密	包含層5区 台下包含層	
44	-	257	553	白磁	輪	底部片	12.8	-	-	-	口縁部端は外延も施釉後遡り取ってある。	白色	良	堅密	包含層5区 台下包含層	
44	-	258	554	越州窯 系青磁	輪	底部片 把手部分	-	-	-	-	内面は露胎。底~原部に洗拂を入れる。 側面はやや膨らみのある球形。	素: 黄色 把手: 黄褐色	良	堅密	包含層5区 台下包含層	
44	20	260	555	国産 陶器	水入れ 煮糸桶	-	-	-	-	-	内~外面は回転コロ仕上げ。	素: 黄紫色 把手: 黄褐色	良	堅密	包含層5区 台下包含層	
44	-	263	635	越州窯 系青磁	輪	底部片	-	-	-	0.5	6.6	高台付に目底。	素: 黄白色 釉: 黄褐色	良	堅密	Bトレンチ
44	-	264	634	白磁	輪	底部片	-	-	-	0.8	5.9	高台部は回転ヘリケツリ。 高台はケヅリ出し。	素: 黄白色 把手: 黄褐色	良	堅密	Bトレンチ
44	19	265	641	土師器	丸底杯	15.8	4.3	-	-	-	体部内~外面は回転ナゲ。 回転ヘリケツリ。	内: 黑褐色 外: 明褐色	良	軟	Bトレンチ	
44	-	266	642	土師器 (内腹)	高台付 輪	口縁部 25.6	6.0	-	1.4	7.0	高台はナデツク。	内: 黑褐色 外: 明褐色	良	軟	Bトレンチ	
44	20	267	637	越州窯 系青磁	輪	底部片	-	-	-	0.5	8.2	見込み: 高台付に目底。体部外斜下位~高台は回転ヘリケツリ。	釉: 青灰色 透明	良	堅密	Bトレンチ

Tab. 4 橋本櫻田遺跡出土石器・石製品所見一覧表

凡例：法量の()は復元値

Fig.	PL.	掲載 遺物 登録 番号	種類	素材	法量			形態・製作上の特徴	出土構	
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
30	-	2 647	鎌	黒曜石	2.5	1.8	3.5	1.2	良質の透明白黒曜石を素材とする。表面から丁寧な二次調整。抉りは浅い。	SB03
30	-	10 656	管状土器	泥質粘土	4.0	直径 0.9	孔径 0.3mm	4.0	両端は平坦に調整。全面ナデ仕上げ。	SD01
31	11	18 668	ナイフ形 石器	黒曜石	2.5	1.1	3.5	1.0	表面はわずかに黒化。端及斜片を素材。側縁を最終的に磨き面から刃溝している。	SM03 上層
31	14	19 669	鎌	黒曜石	1.8	1.4	0.35	0.6	黒灰色のやや薄い黒曜石を素材とする。右側返りが欠損。二次調整はやや強め。	SM03 上層
31	14	20 670	鎌	黒曜石	2.1	1.6	0.4	1.0	黒色半透明の黒曜石を素材とする。先端部欠損。	SM03 上層
31	14	21 671	鎌	頁岩	2.3	1.5	0.35	0.7	二次調整はばらつきがある。基部抉りはやや深い。表面は風化し灰色を呈す。	SM03 上層
31	14	22 688	鎌	黒曜石	2.7	1.7	0.55	1.6	深黒色の黒曜石を素材とする。両面は三角形でやや厚手である。	SM03 D 8
31	14	23 693	鎌	頁岩	2.1	0.8	0.35	0.6	一次調整は丁寧。鍔は明瞭。基部抉りは三角形で深い。右側返りが欠損。	SM03 F 12
31	14	24 712	鎌	頁岩	3.7	1.5	0.7	6.0	二次調整は両面から交互に施す。基部は薄く仕上げている。先端部は欠損。黒化し灰色。	SM03 床面
31	14	25 694	鎌	頁岩	2.0	1.8	0.45	1.6	左側縁は細かな二次調整。基部は薄く仕上げている。黒化し灰褐色。	SM03 F 12
31	14	26 698	鎌	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.0	良質の透明白黒曜石を素材とする。先端、右返りが欠損している。抉りは丸く多く付く。	SM03 西面下層
31	14	27 711	鎌	黒曜石	2.1	1.4	0.4	1.2	良質の透明白黒曜石を素材とする。基部は丸く仕上げ、剣は直線的で基部に付く。	SM03 床面
31	14	28 667	鎌	黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.7	良質の透明白色透明黒曜石を素材とする。薄手で、五角形に仕上げている。	SM03 漫上層
31	14	29 699	鎌	黒曜石	1.8	1.5	0.35	0.7	良質の透明白色黒曜石を素材とする。左側縁の二次調整が強く、左端部は丸く付く。	SM03 漫土下層
31	14	30 700	鎌	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.4	良質の透明白色黒曜石を素材とする。左右側縁から鍔を明瞭に作り出している。抉りは浅い。	SM03 漫土下層
31	14	31 674	鎌	頁岩	1.6	1.3	0.35	0.4	鍔から側面に二次調整を施す。基部抉りは丸くやや深め。	SM03 C 6区下層
31	14	32 710	鎌	黒曜石	1.7	1.5	0.15	0.4	良質の透明白色半透明黒曜石を素材とする。薄手に仕上げている。返りは浅い。先端部は欠損している。	SM03 床面
31	14	33 708	鎌	黒曜石	1.8	1.2	0.25	0.6	良質の黒曜石。薄手である。右側縁の二次調整は細かい。基部は薄く抉りは浅い。	SM03 床面
31	14	34 676	鎌	黒曜石	1.8	1.6	0.35	0.8	二次調整はやや粗い。基部は両面から丁寧に丸く抉りを入れる。先端欠損。五角形。	SM03 C-6区下層
31	14	35 675	鎌	頁岩	2.5	1.5	0.38	1.1	やや長めの五角形。基部は両面から薄く仕上げる。黒化し灰褐色。左端部は欠損。	SM03 C-6区下層
31	14	36 697	鎌	黒曜石	2.1	1.5	0.45	0.8	両側縁はわずかに外溝し。基部は両面から薄く直線的に仕上げる。やや厚手。	SM03 E9-10下層
31	14	37 702	鎌	黒曜石	2.1	1.4	5.0	1.2	良質の透明白色黒曜石を素材とする。鍔は明瞭。抉りは両面から丸く入れている。	SM03 D7下層
31	14	38 703	鎌	黒曜石	2.2	1.9	0.4	1.1	先端は三枚み消したように尖る。両側縁は外溝し、基部は両側縁から直線的に仕上げる。	SM03 下層
31	14	39 701	鎌	黒曜石	2.15	1.5	0.35	1.1	やや長めの五角形。表面の筋は明瞭。基部の抉りは浅く、直線的。頗る薄手である。	SM03 E10下層
31	14	40 677	鎌	黒曜石	2.7	0.9	0.3	1.0	先端欠損。筋の形。抉りは浅い。二次調整はやや粗く、筋は不明瞭。	SM03 C 6区下層
31	14	41 704	鎌	頁岩	2.4	1.5	0.3	1.1	先端欠損。筋の形。抉りは浅い。二次調整はやや粗く、筋は不明瞭。	SM03 下層
31	14	42 707	鎌	黒曜石	3.0	2.2	0.4	1.8	先端は欠損。鍔は明瞭で二次調整は丁寧。大きさに比して薄手。抉りは直線的。	SM03 最下層
31	14	43 709	鎌	黒曜石	2.4	1.8	0.45	1.7	渡りは欠損。二次調整はやや粗く、筋は不明瞭。素材はやや不純物が付く。	SM03 床面
31	14	44 706	鎌	黒曜石	3.2	1.5	0.5	2.1	素材は継続の剥離。先端部は両面からの網目な二次調整により鋸歯状。他は未調整。	SM03 最下層
31	14	45 687	磨製 石器	頁岩	3.9	1.5	0.7	5.2	先端・基部は欠損。刃部に対し斜めから研ぎだし、表面要形に仕上げている。	SM03 D7下層
31	14	46 690	磨製 石器	頁岩	5.2	1.5	0.65	5.9	基部は欠損。刃部に平行・斜めから研ぎだし断面要形に仕上げている。	SM03 1ベルト
31	14	47 691	石器	頁岩	4.7	1.6	0.8	—	基部は丸く成形し、表面は粗く仕上げる。刃部は直線的に研ぎ出している。	SM03 F 11
31	14	48 695	管状土器	—	6.0	直径 1.7	孔径 0.4mm	15.0	渡りながら成形し、ナデ仕上げ。両端は粗く仕上げる。焼成良好。暗褐色。	SM03 F 12

Fig. No.	測定 遺物 番号	標識 番号	種類	素材	法量				形態・製作上の特徴	出土遺構
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
31_5	49	899	石斧	玄武岩	10.0	基部幅3.6 6.6	4.5	—	刃部欠損。基部端は直線的。二次剥離・敲打痕を留めている。灰白色。磨耗している。	SM03 層下層
31_5	50	893	石斧	玄武岩	11.1	刃部幅 6.0	(3.5)	—	基部欠損。二次剥離・敲打痕を留めている。刃部は折損後印字されている。灰白色。	SM03 F10 3層
32_5	51	680	石包丁	頁岩	9.0	5.2	0.4	—	敲打段階の未完成品。刃を山面から突けている。刃部は部分的に細かな二次剥離を有す。	SM03 C-6区下層
32_5	52	698	石包丁	頁岩	6.7	12.6	1.1	—	二次剥離調整段階の未完成品。刃部調整を終え背面部の打撃により理屈面から破損したもの。	SM03 C6層
32_5	53	696	石斧	玄武岩	13.7	8.4	(3.6)	—	刃部破損。刃部は折損後引き落れている。断面は錐形。灰白色。全体に磨耗している。	SM03 C6上層
32_5	54	679	斧	玄武岩	14.5	6.5	2.9	—	基部が折れ、刃石斧棒の平面を自然端を素材とし、刃部を二次剥離により作り出している。	SM03 C-6区下層
32_5	55	678	斧	玄武岩	9.0	8.8	3.3	—	基部欠損。断面形は扁平な錐円形。刃部は敲打使用により丸く削られている。灰白色。	SM03 C-6区下層
32_5	56	714	磨石	花崗岩	9.5	8.1	5.2	—	扁平な円錐の層面、上面に敲打または打撃使用痕が残る。	SM03
36_20	153	812	結晶車	滑石	直径3.7 孔径2.5	—	1.5	16.5 (24.7)	良質な灰色滑石を素材とする。全面丁寧な磨き仕上げ。側面は斜面（段）を有す。	SM04 2層
36_20	154	855	石鑿	耳部	滑石	直径3.8 孔径3.1	—	—	良質な灰色滑石を素材とする。耳に向かって表面を削り込んだり。	SM04 ペルト 2b層 F13
37_20	156	847	結晶車	滑石	直径3.7 孔径2.7	—	1.7	33.5	良質な灰色滑石を素材とする。上面は粒が不明瞭でやや丸みがある。	SM04 3層
37_20	157	811	鑿	滑石	11.6	—	2.0	—	石錐被覆の配用。周縁を丸く削りその後滑らかに仕上げている。手根品で本体は円錐形。	SM04 2層
37_19	158	765	石錐蓋	滑石	9.7 孔径0.8	11.3	3.4	316.5	石錐耳部の転用。底面、裏面は角を削り落とし滑らかに仕上げている。中央で折損。	SM04 1層
37_19	170	862	土鍛	—	(4.5)	直径1.1 孔径2.0	6.0	—	下端が丸く削りしている。捻りながら成形しナビ上に上げている。焼成段階。褐色。	SM04 層下層
41_18	182	401	石核	黒曜石	2.7	3.1	2.5	—	素材は良質の小円錐。裏面を作り削片を剥ぎ取り、その面をまた打撃面として剥出。	表土層
41_18	183	402	石核	黒曜石	2.2	2.5	1.4	—	円錐表面を打撃面として周縁から打撃し剥片を得る。結果的に凹錐状になっている。	表土層
41_18	184	408	石核	黒曜石	2.3	4.6	2.2	—	素材はやや大きい角錐。打撃面を作り剥片を剥ぎ取り、その面をまた打撃面として剥出。	4区 表土層
41_18	185	410	核	黒曜石	3.3	(2.1)	0.3	1.9	やや大方形の五角形。大きさの割りに薄手。基部は三角に抉る。捻りは少部欠損。	表探
41_18	186	411	鑿	黒曜石	2.9	1.8	0.5	2.0	J字型に二次調整で裏蓋の網はやや明瞭。基部は直線的に湾入性上げる。	表探
41_18	187	412	鑿	黒曜石	2.1	1.8	0.35	1.0	捻りが外に強く聞く。五角形。抉りは浅い。二次調整はやや粗く、網は不明瞭。薄手。	表探
41_18	188	413	鑿	頁岩	2.1	1.2	0.3	0.5	先端・通路が欠損。網は明瞭で二次調整は丁寧。抉りは直線的に深く入れる。	表探
41_18	189	415	縦長剥片	黒曜石	3.85	1.9	0.4	—	素材は良質の半透明暗色樹脂剥片。左側縁に細かな刃潰れがあり、裏面は時代後葉の産業。	表探
41_18	190	443	鑿	頁岩	2.8	1.6	0.3	1.2	素材は良質の剥片。先端部は両面からの網かな二次調整により細く尖る。他の剥片は不整然。	表探 D7区
41_18	191	429	断片刃 石斧	頁岩	5.5	3.9	1.5	48.5	通常より全体的に丸みがある。刃部は研ぎなおしにより両端が磨耗し多い。灰白色。	表探
41_18	192	409	石斧	玄武岩	6.8	刃部幅 7.2	4.0	—	刃部欠損。かなり大坂型である。断面は扁平刃部は敲打使用面には丸く削られた。	4区 表土層
41_18	193	447	鑿	黒曜石	1.5	1.7	0.3	0.5	基部が鋸切の三角形。二次調整はやや粗く、網は不明瞭。素材が直線的。	包含層
41_18	194	630	鑿	頁岩	2.6	1.4	0.4	1.3	肉瘤部がわずかに外溢している。二次調整は端正で、網が明瞭である。基部は直線的。	包含層 12.2
41_19	199	453	石鍬 口跡片	滑石	—	—	—	—	網の深さ・株の可能性がある。表面には炭化物が付着している。素材は良質の灰色滑石。	包含層 1区 石池落1層
42_19	221	479	鑿	滑石	口徑 (11.10)	器高 3.1	—	—	宝珠様のつまみが付くと思われる。素材は良質の灰色滑石。口跡片の転用か。	包含層 H13砂質砂
42_20	222	480	蓋か	滑石	口徑 4.6	器高 2.5	底高 4.8	—	素材は良質の灰色滑石。口跡片の転用か。蓋もしくは合子様のつまみと思われる。	包含層 H13灰質砂
42_19	223	509	石錐	滑石	口徑 35.5	—	—	—	口縁部は強く内傾している。房下部には炭化物が付着している。素材は良質の灰黑色滑石。	包含層 4区 古墳下
42_18	224	495	石錐	片岩	9.2	8.2	1.6	160.0	扁平圓錐の周縁を二次調整し、紐を受けるため上口1対の浅い凹をついている。	包含層 4区 古墳セクション
42_18	225	897	石包丁	頁岩	8.1	7.9	0.6	—	穿孔段階の未完成品。穿孔している際に底部に沿って削れたもの。	E10 溝底復土層

凡例：法量()は復元値

Fig	PL	掲載 遺物 登録 番号	種類	素材	法量				形態・製作上の特徴	出土遺跡
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
44	-	261	541	瓶の栓	滑石	4.3	3.8	2.1	-	素材はやや良質な灰色滑石。下端は未広がりである。
44	19	262	463	石鏡片	滑石	-	-	-	-	耳部の破片。やや質の悪い灰色滑石。表面は磨耗している。
44	19	268	643	石鏡片 耳部	滑石	5.0	3.7(基部) 2.5	3.5	-	素材は良質の灰白色滑石。大型の鏡の耳部である。耳に向かって削り込んでいる。
44	20	269	636	石鏡片 用途不明	滑石	7.1	3.4	2.1	-	石鏡片に両面から穿孔したものです。不整な円形。孔は縦等を通過するもの。
44	-	270	625	石槍残欠	サヌカイト	8.1 (9.8)	1.3	-	54.0	良質のサヌカイト。(輝石安山岩)。両面から二次調査が施されている。明次白色。
44	-	271	595	鏡	黒曜石	2.1	1.4	0.5	1.3	良質の半透明墨色の黒曜石を使用している。鏡は明瞭。基部は下へやや傾斜している。
44	-	272	602	鏡	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.6	先端部は欠損。両側基部からの二次調整はやや粗正。基部は深く平坦に仕上げている。
44	-	273	603	鏡	黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.9	先端と振りの一部が欠損している。鏡は明瞭基部は浅く、また薄く仕上げている。を
44	-	274	611	鏡	黒曜石	1.3	1.9	0.25	1.0	滑正な二角形。薄手である。両側はから細かな二次調整を加える。端は不明瞭。

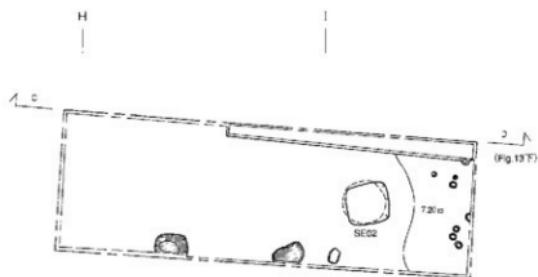
Tab. 5 橋本櫻田遺跡出土その他所見一覧表

Fig	PL	掲載 遺物 登録 番号	種類	素材	法量				形態・製作上の特徴	出土遺跡
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
30	14	14	660	馬骨	-	19.8	4.5	-	-	S E02井筒内出土。骨盤の中央部に穿孔したもの。孔の直径は10.4~5mm。馬骨か。

— 0 — 10m



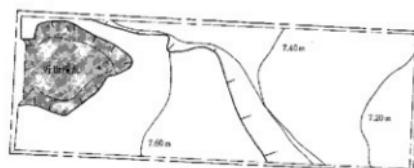
Fig. 11 第1区道路平面图 (1/200)



第2区



8



第3区



Fig.12 第2区・第3区造構平面図 (1/200)

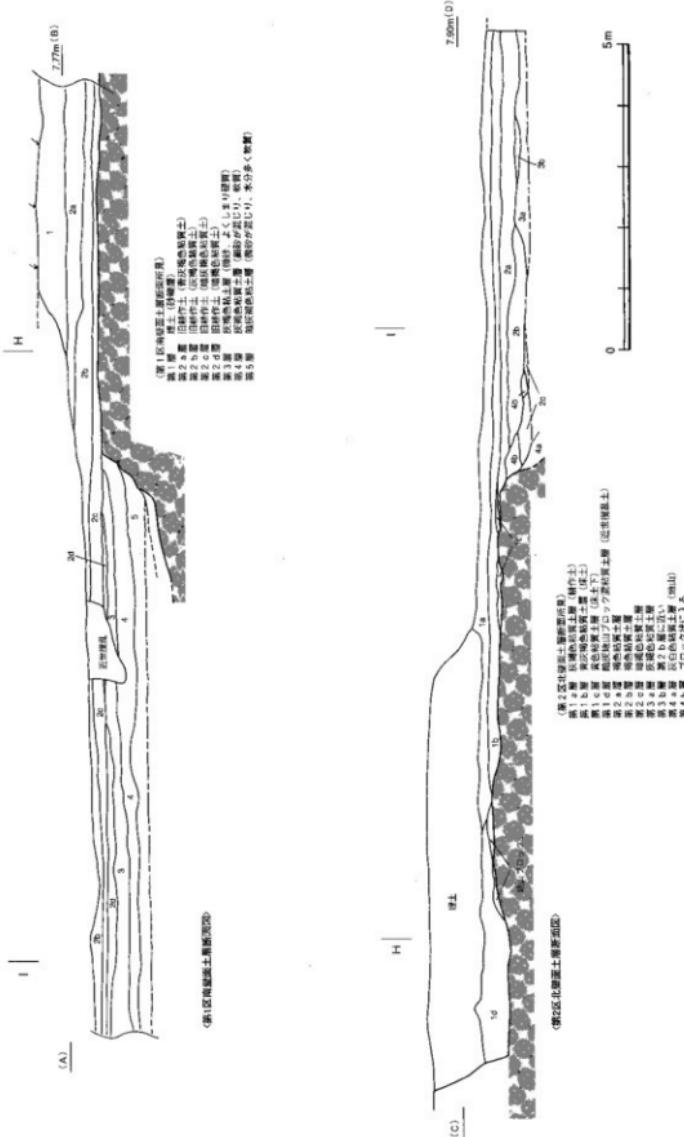


Fig.13 第1区・第2区土層断面図 (1/80)

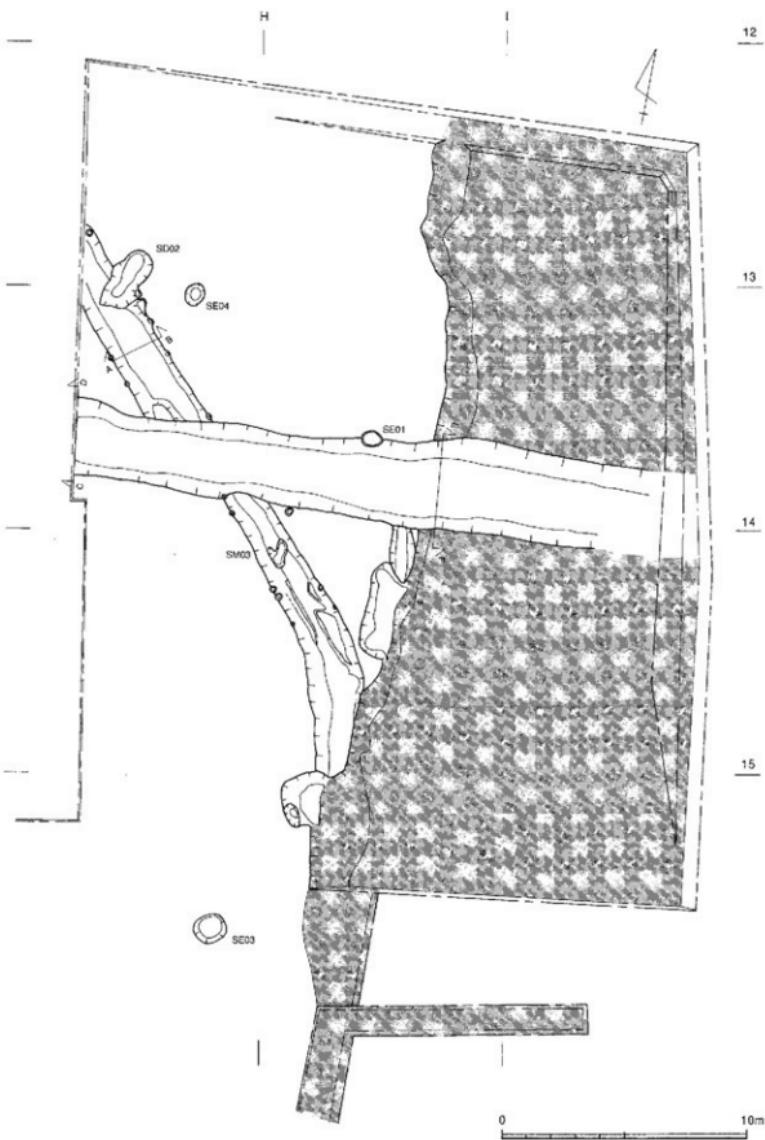


Fig.14 第4区造構平面図 (1/200)

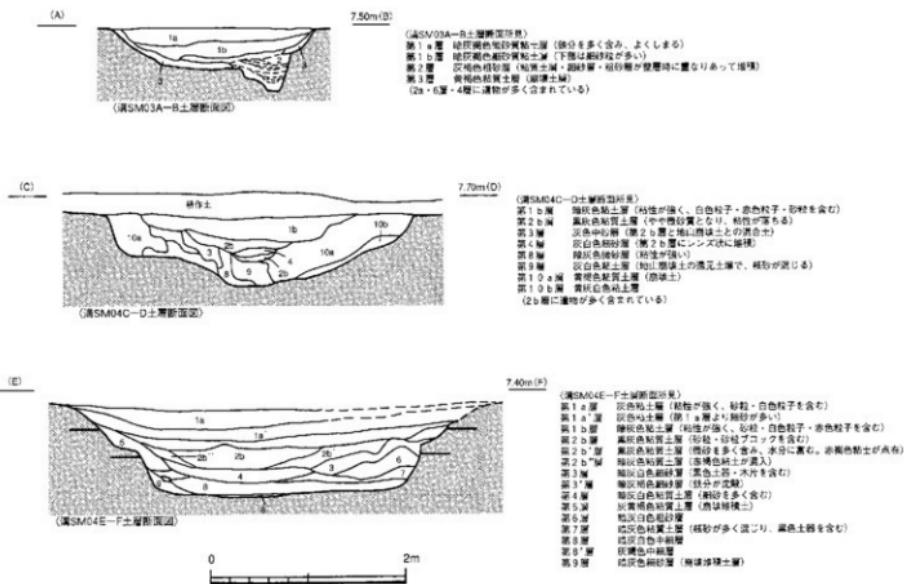


Fig.15 第4区清 SM03・04 土層断面図 (1/50)



Fig.16 第4区清 SM04 遺物出土状況平面図 (1/40)



Fig.17 第5区造構平面図 (1/400)

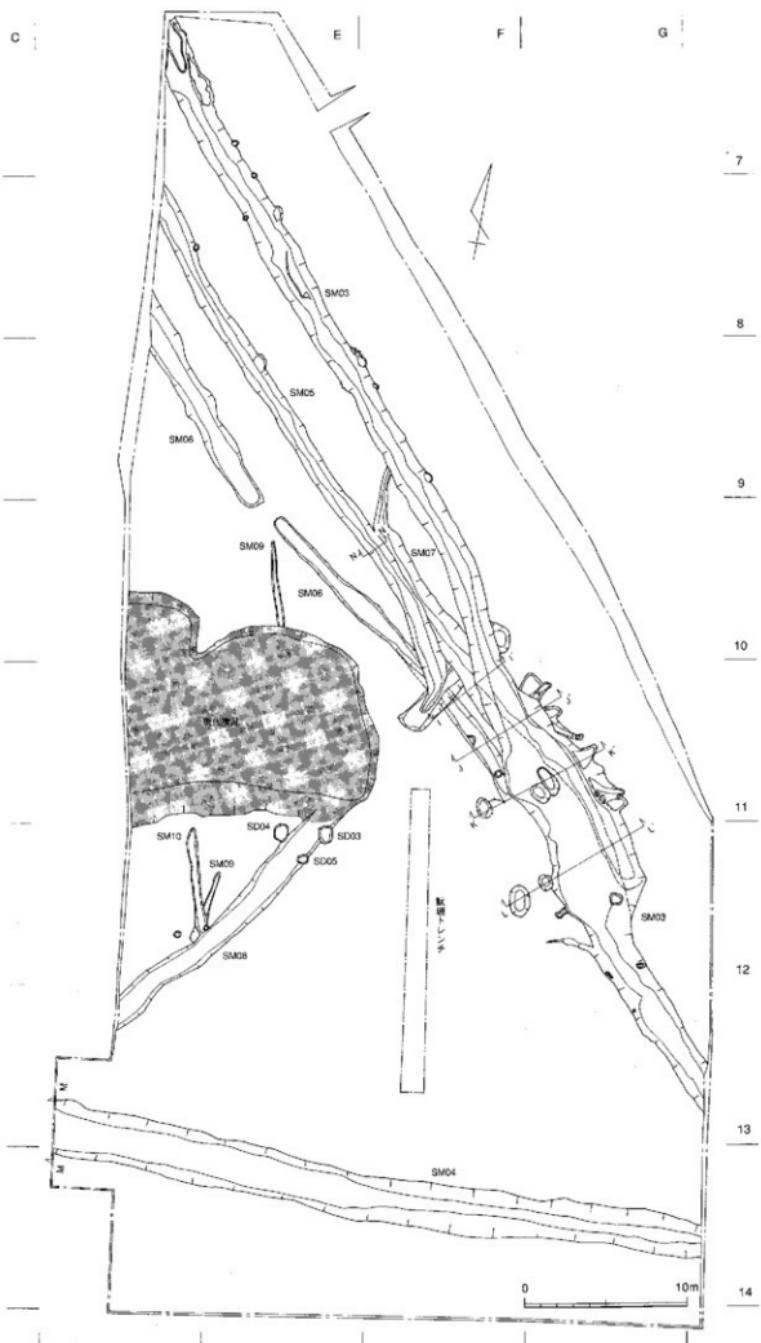


Fig.18 第6区造構平面図 (1/300)

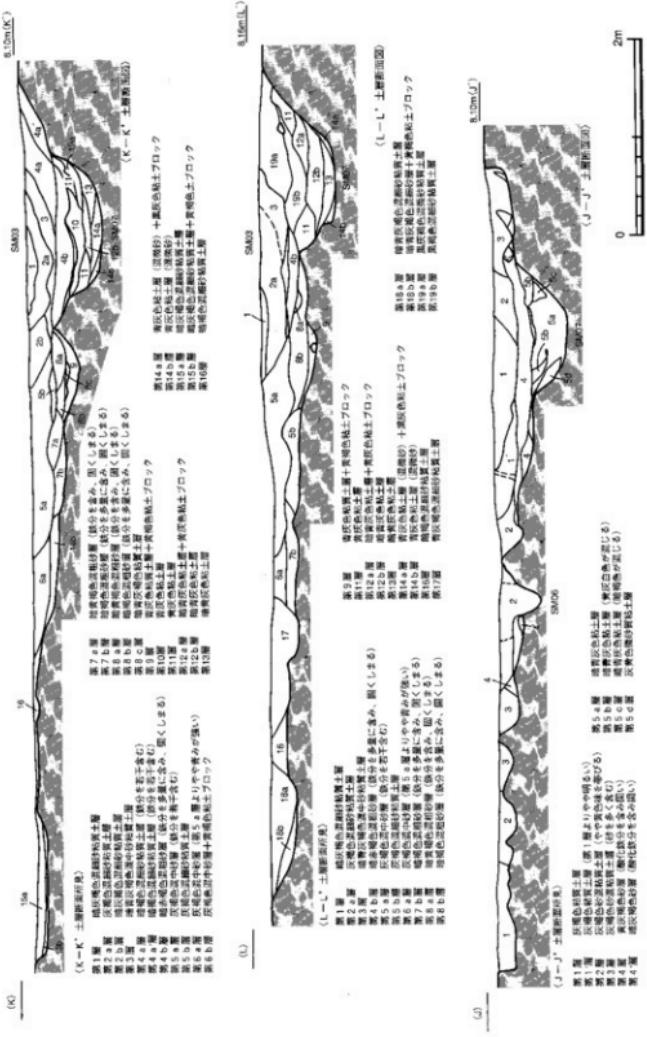


Fig. 19 第6区溝SM03・05~07 土層断面図 (1/50)

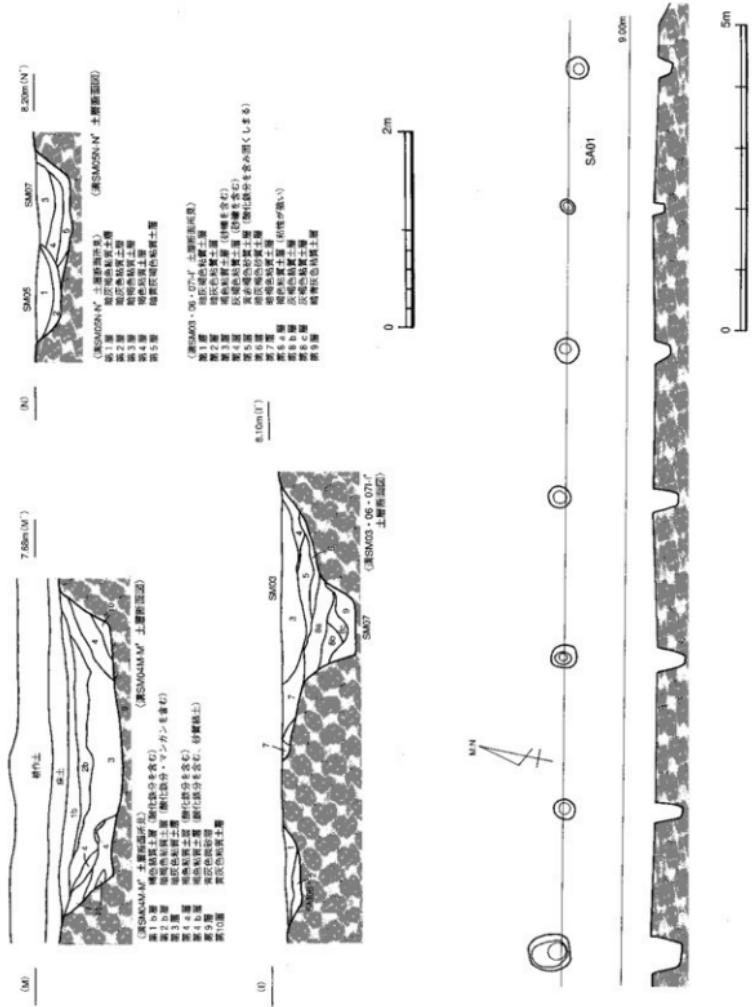


Fig.20 第6区溝SM04・06・07 土層断面図 (1/50) および構造物 (SA) 平面・断面図 (1/80)

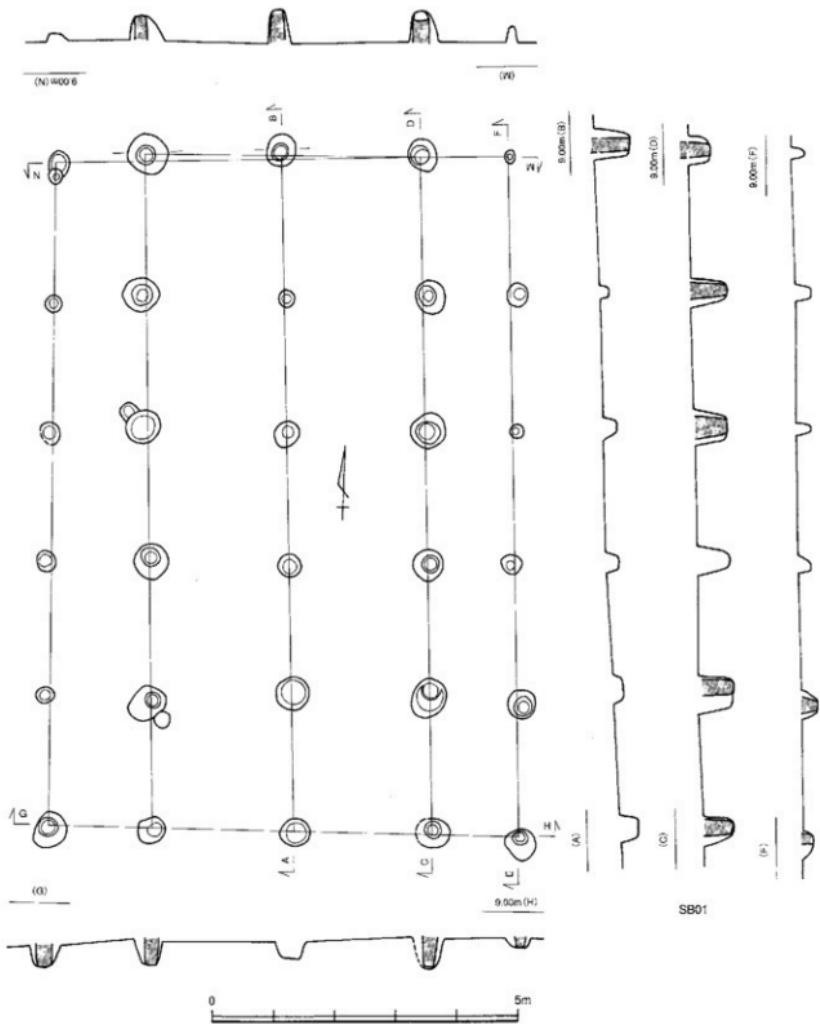


Fig. 21 据立柱建物(SB)平面・断面図 1 (1/80)

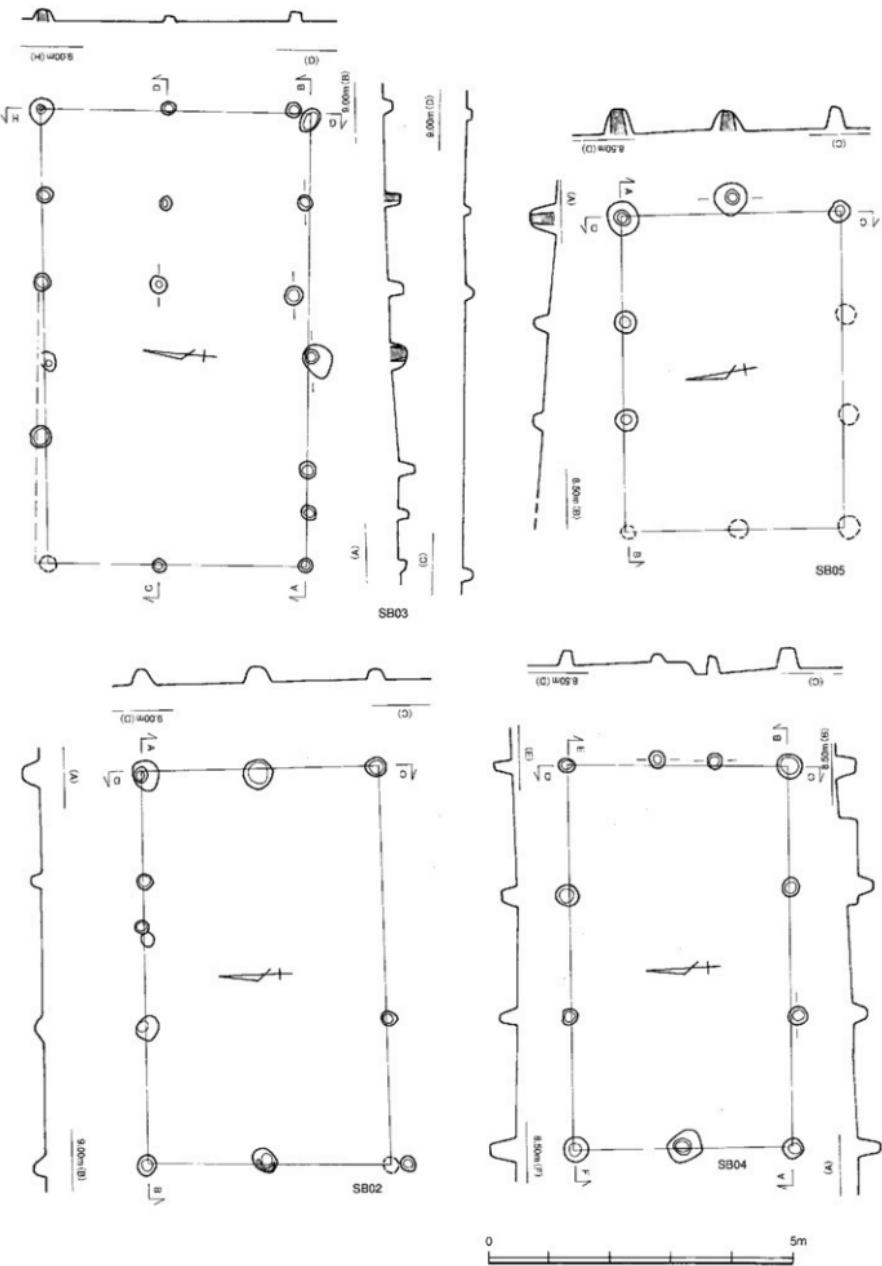


Fig. 22 捕立柱建物(SB)平面・断面図2 (1/80)

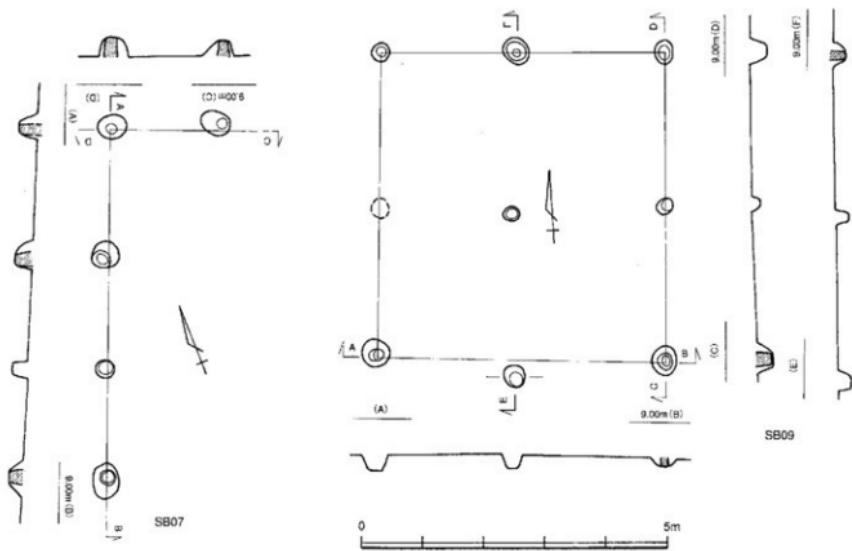
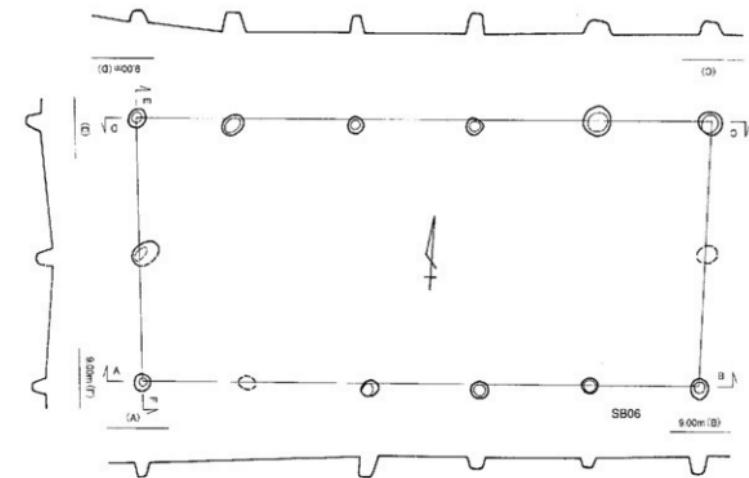


Fig. 23 挖立柱建物(SB)平面・断面図3 (1/80)

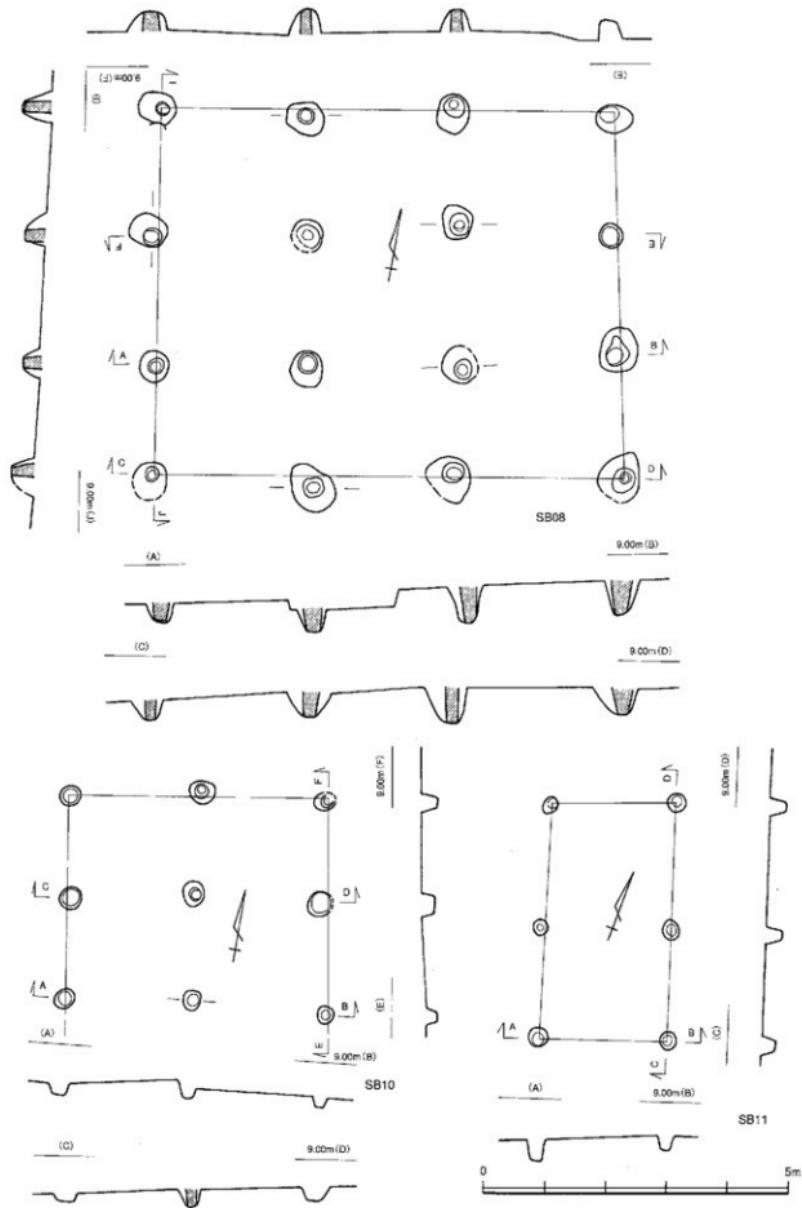


Fig.24 据立柱建物(SB)平面・断面図4 (1/80)

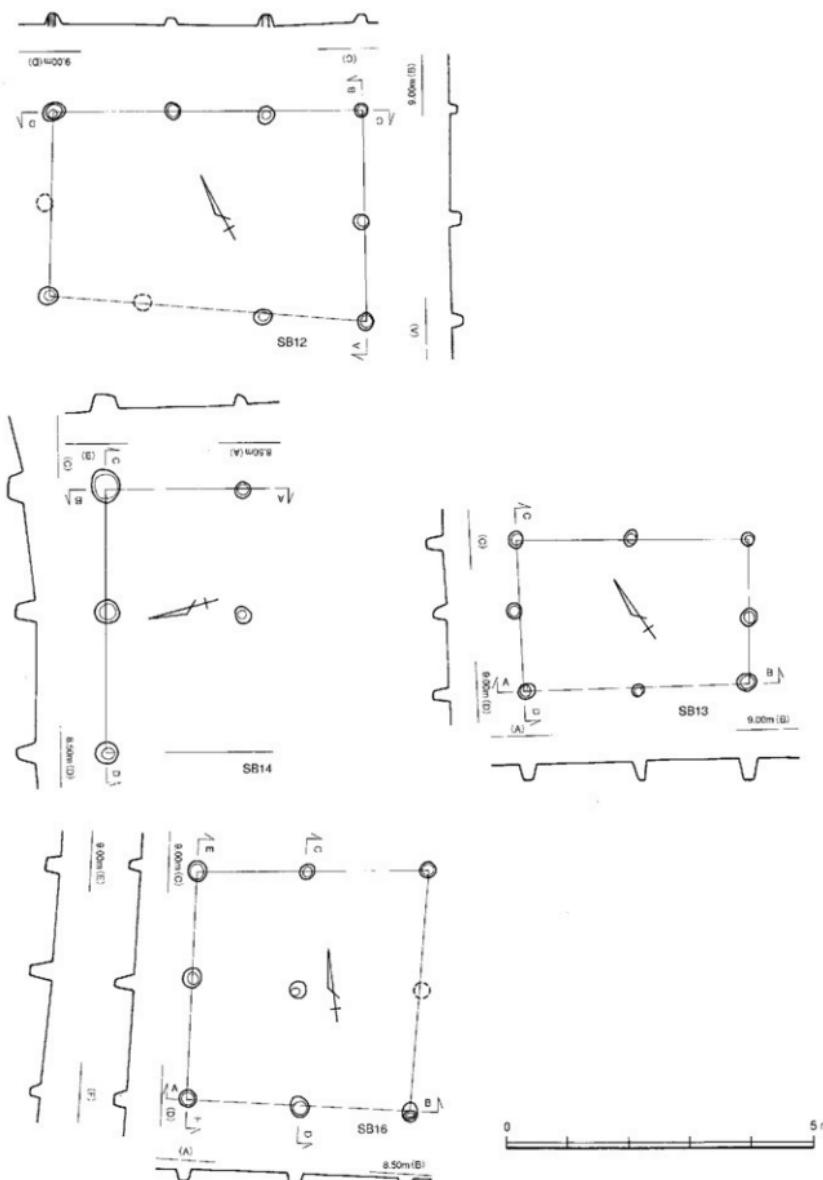


Fig.25 摩擦柱建物(SB)平面・断面図 5 (1/80)

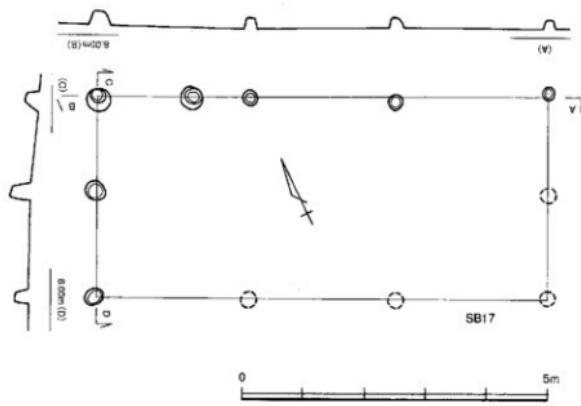
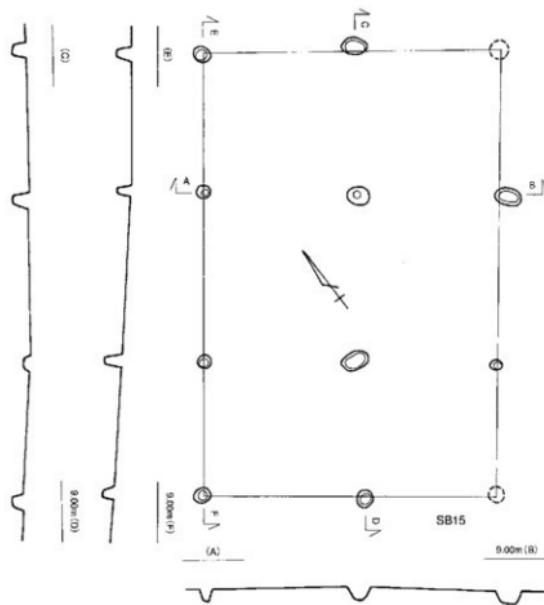


Fig.26 据立柱建物(SB)平面・断面図6 (1/80)

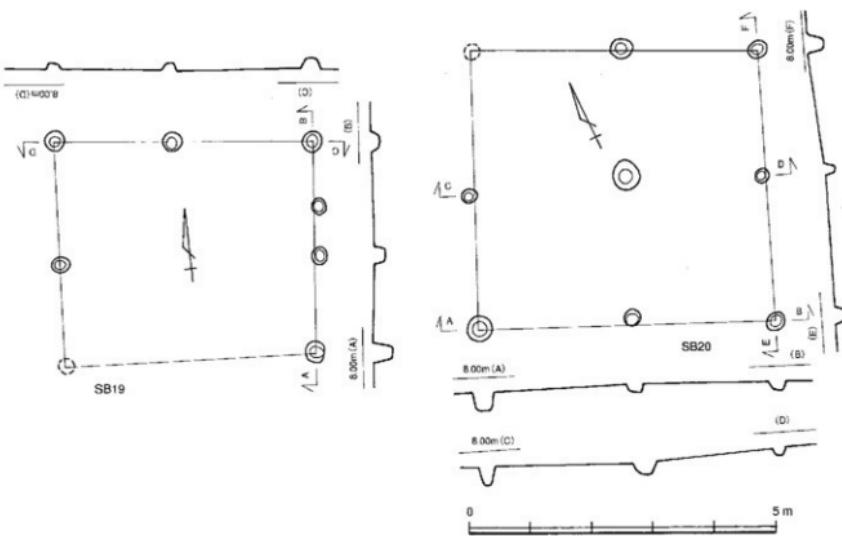
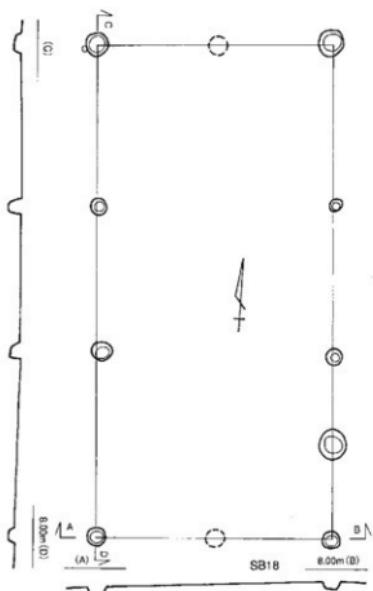


Fig. 27 据立柱建物(SB)平面・断面図7 (1/80)

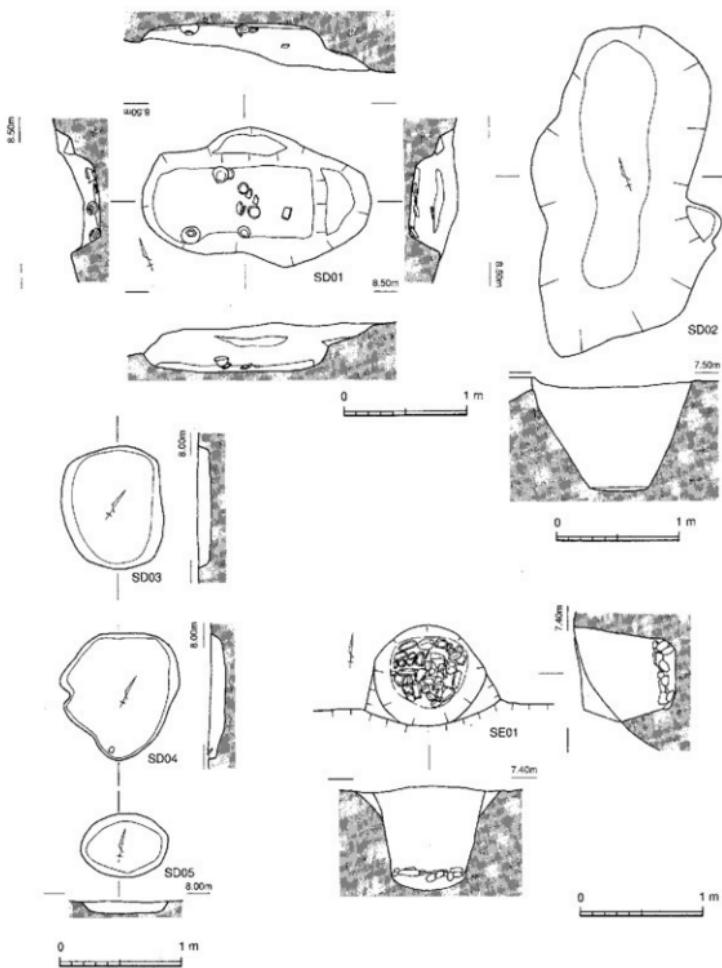


Fig. 28 木棺墓・土塙(SD)、井戸(SE)平面・断面図 (1/40)

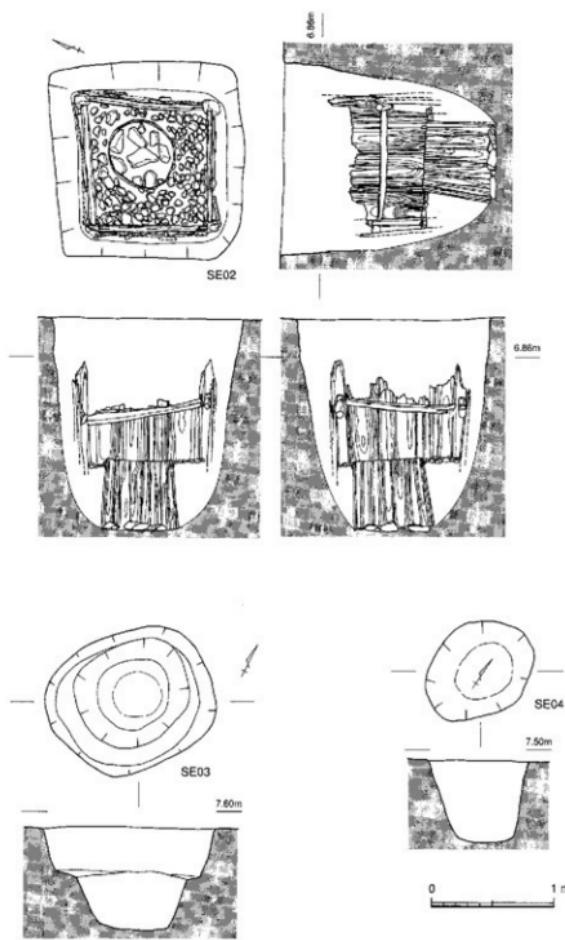


Fig.29 井戸(SE)平面・断面図 (1/40)

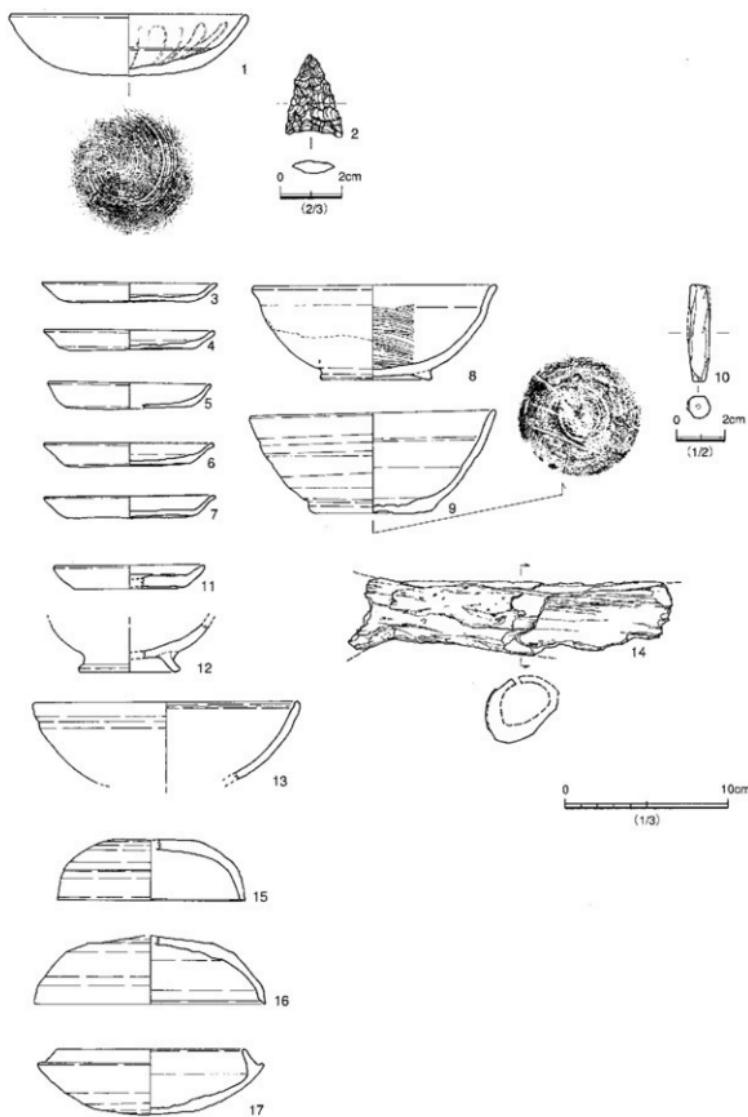


Fig.30 遺物実測図 1 (1/3 • 2/3 • 1/2)

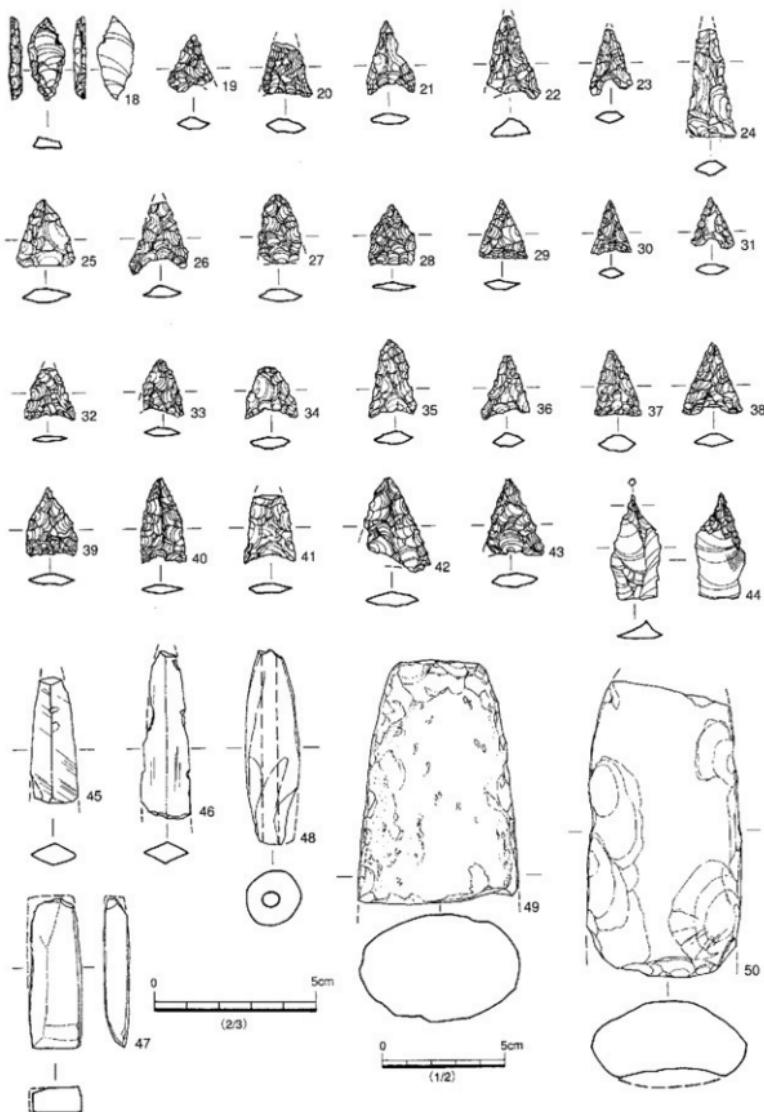


Fig. 31 遺物実測図 2 (2/3・1/2)

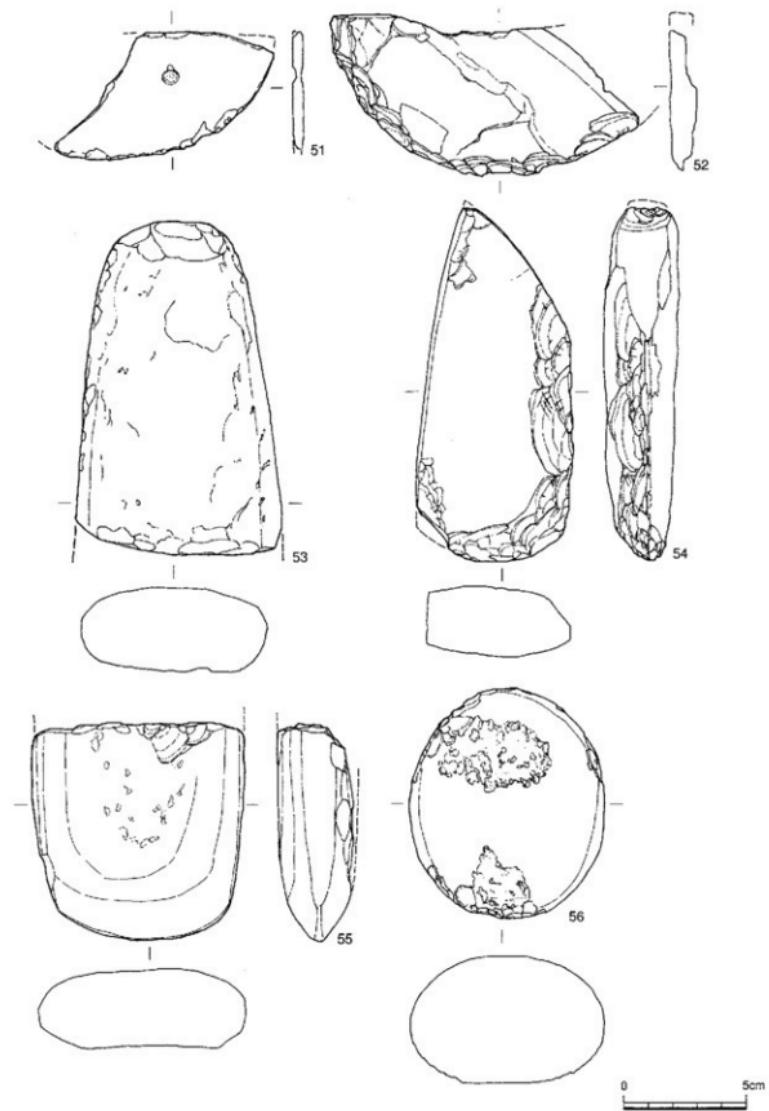


Fig. 32 遺物実測図 3 (1/2)

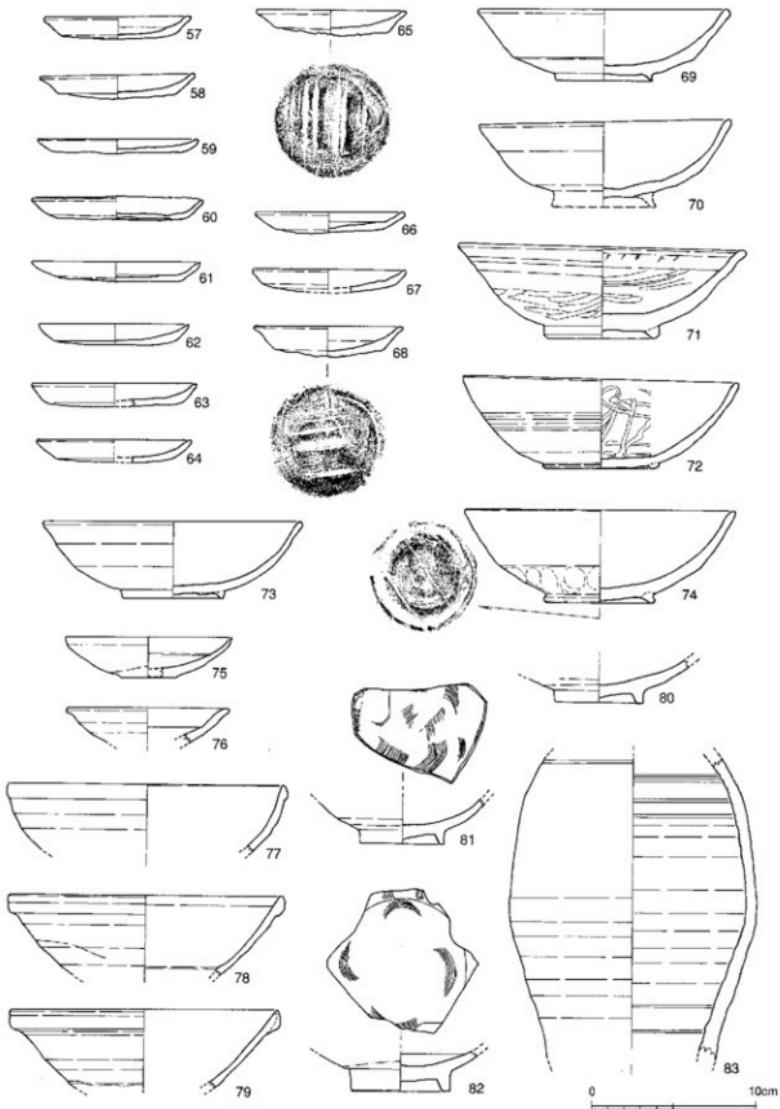


Fig. 33 遺物実測図 4 (1/3)

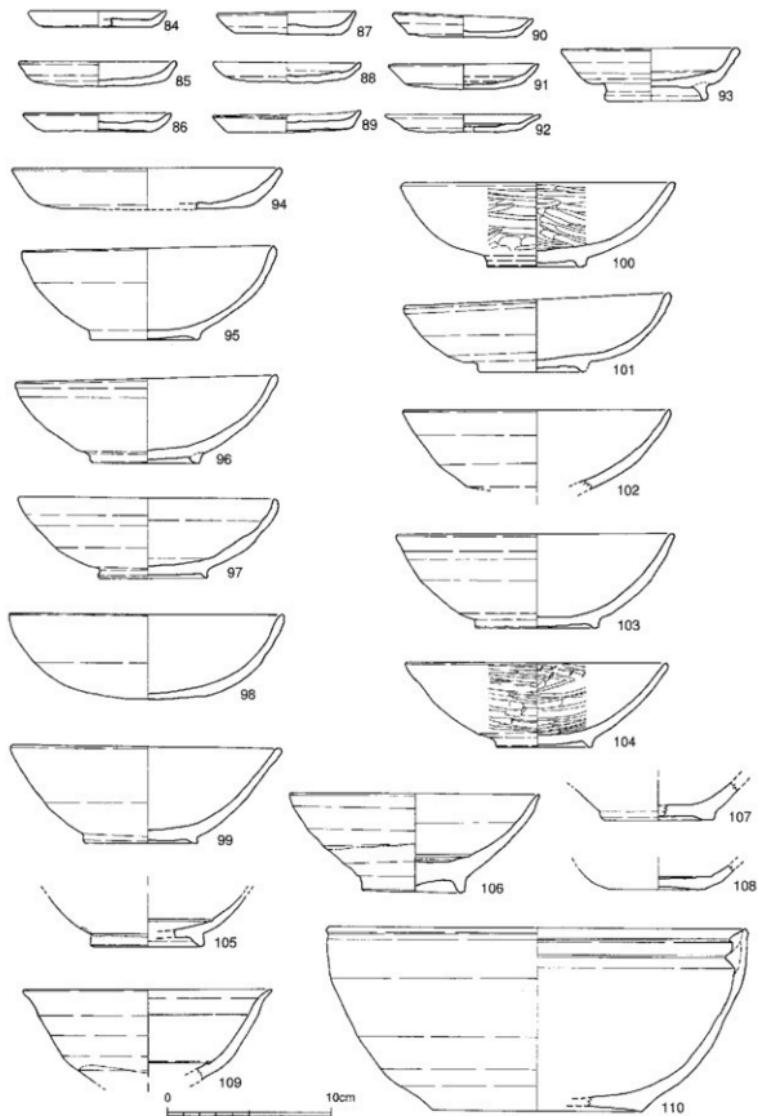


Fig. 34 遺物実測図 5 (1/3)

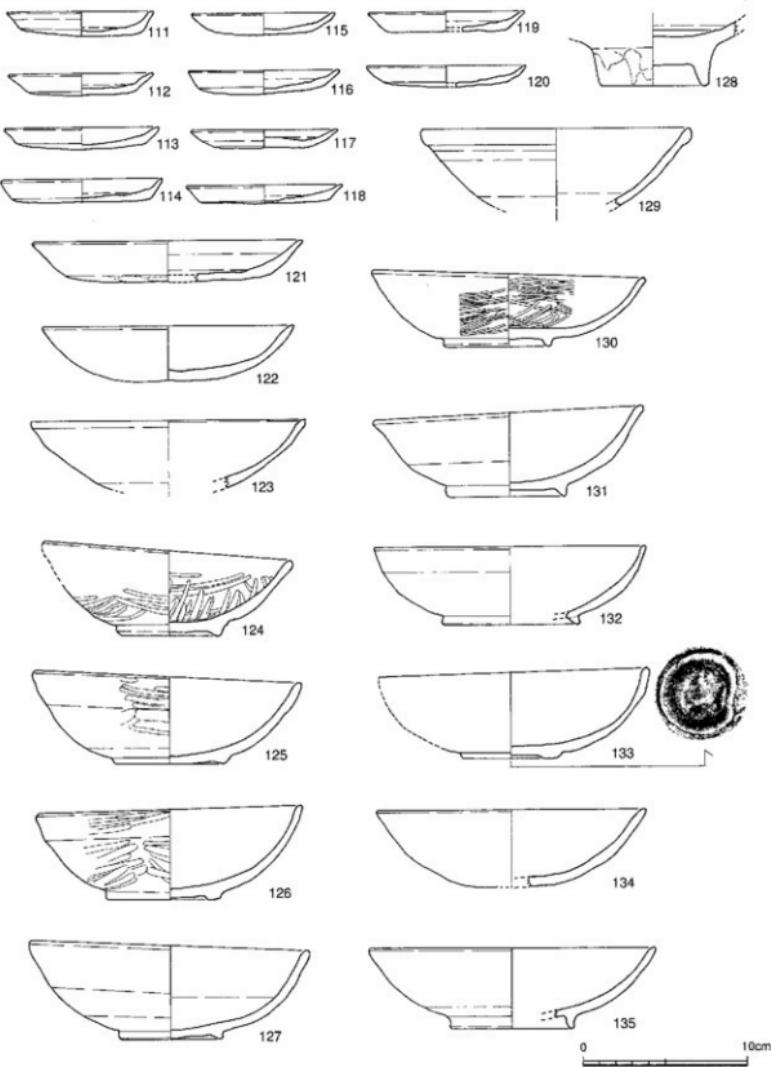


Fig. 35 遺物実測図 6 (1/3)

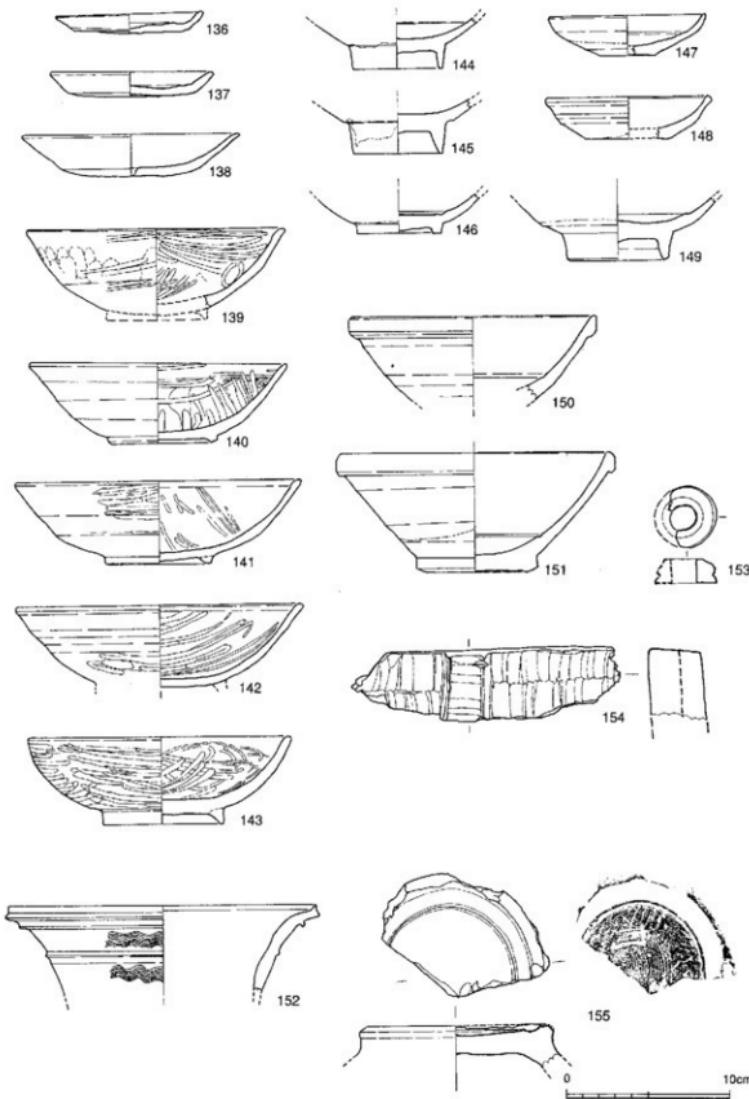


Fig.36 遺物実測図 7 (1/3)

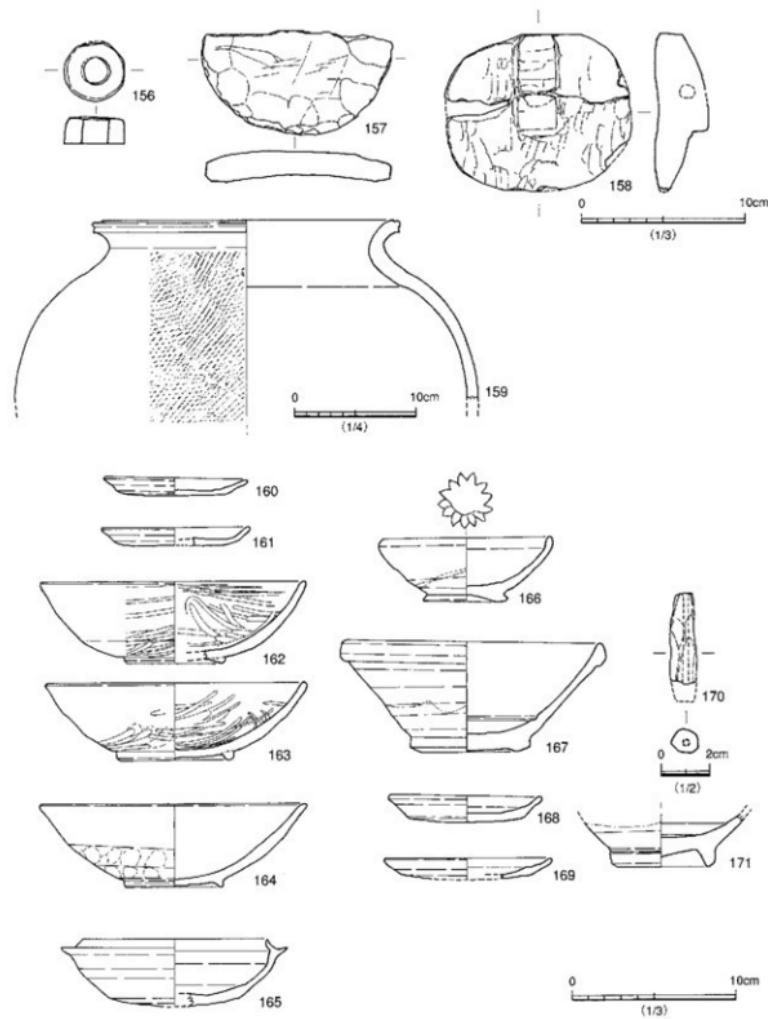


Fig. 37 遺物実測図 8 (1/4 + 1/3 + 1/2)

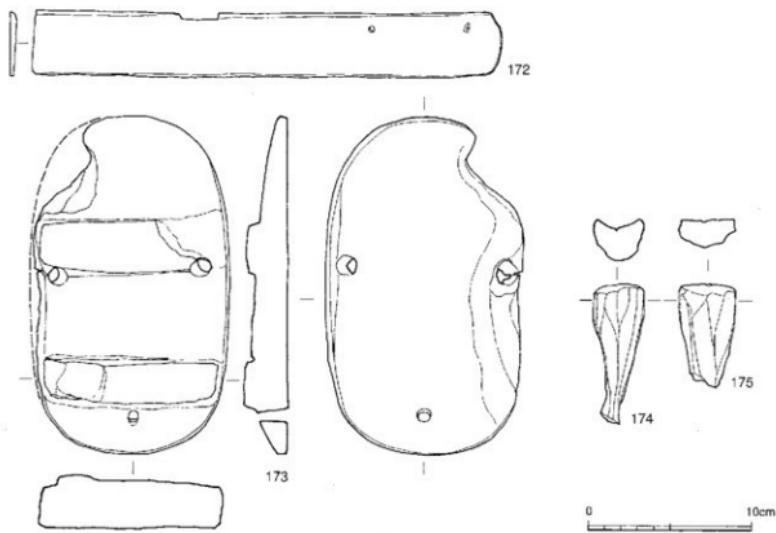


Fig. 38 遺物実測図 9 (1/3)

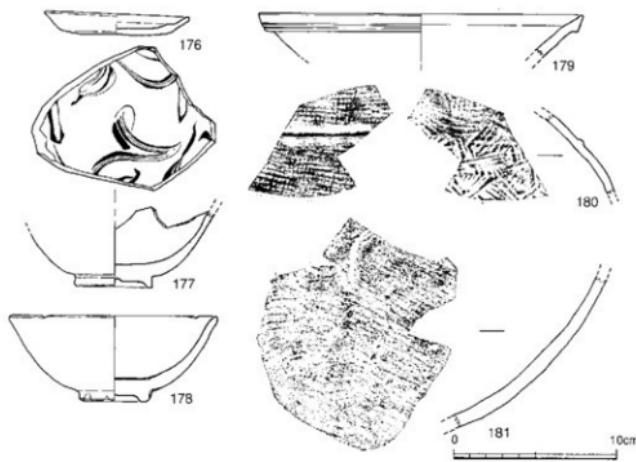


Fig. 39 遺物実測図 10 (1/3)

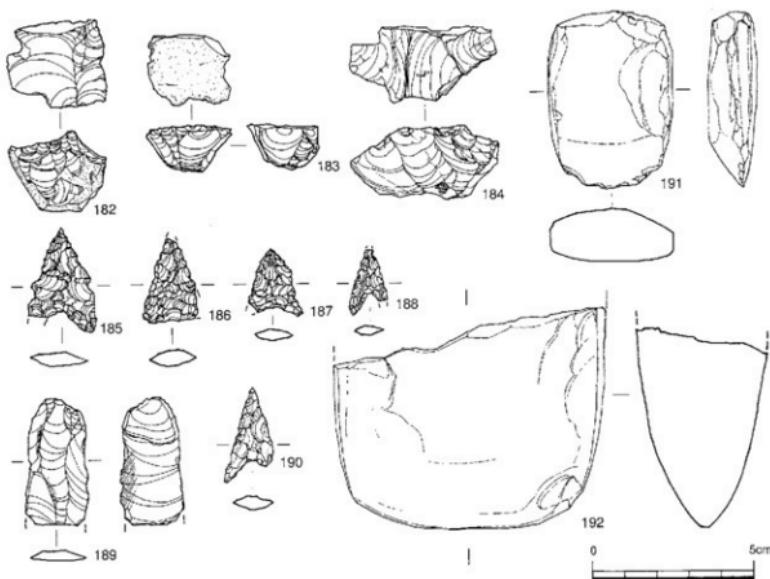


Fig. 40 遺物実測図11 (2/3)

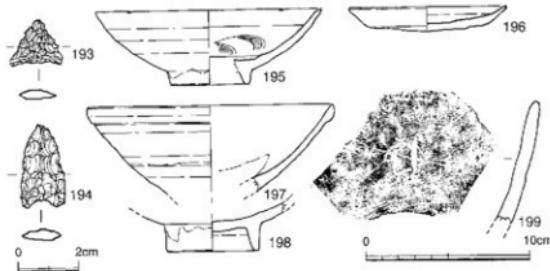


Fig. 41 遺物実測図12 (1/3 + 1/2)

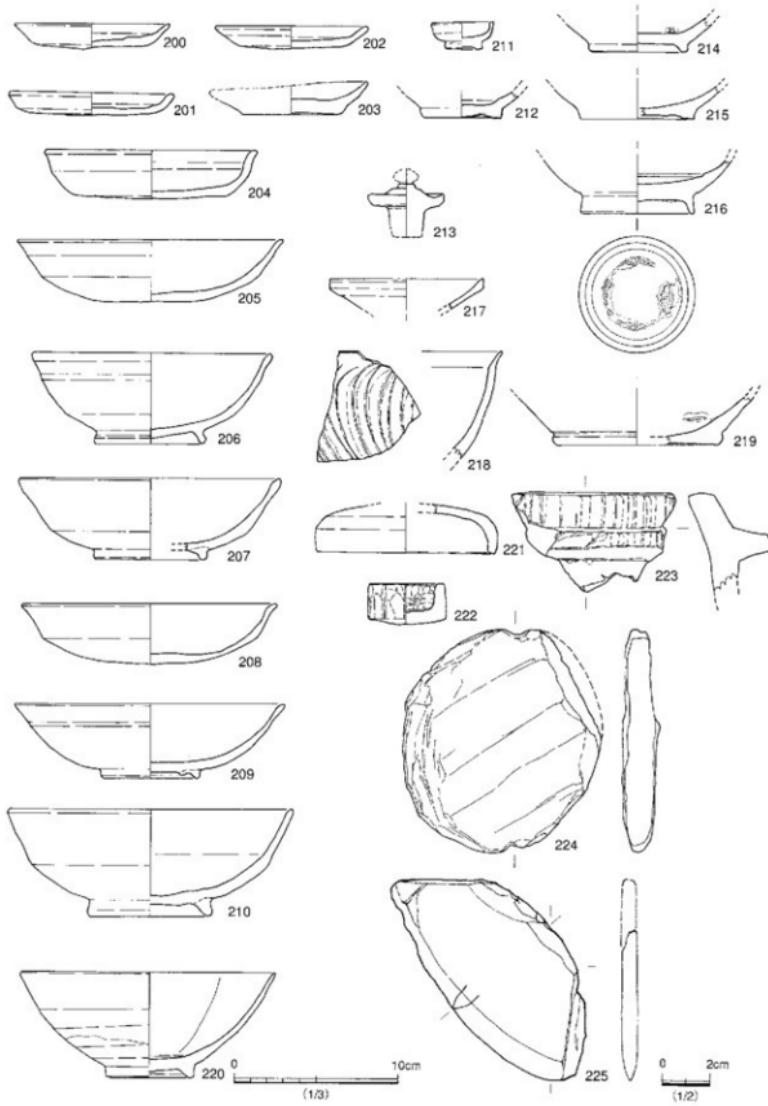


Fig. 42 遺物実測図13 (1/3・1/2)

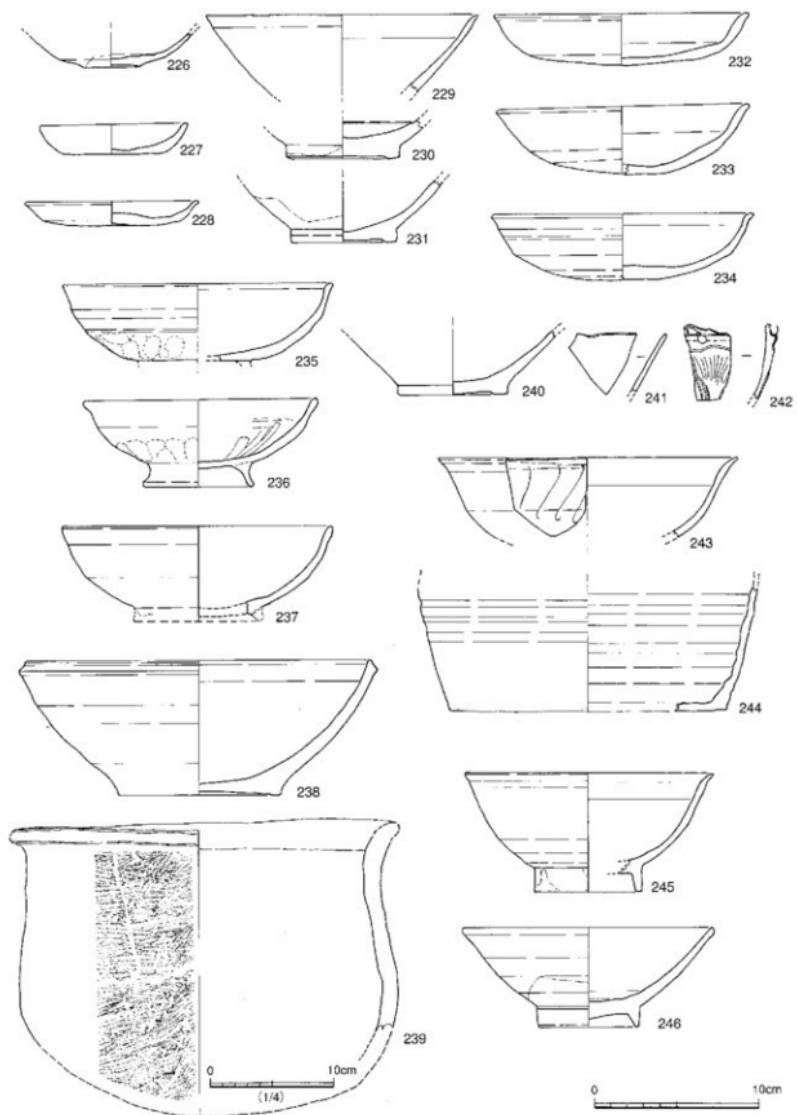


Fig.43 遺物実測図14 (1/4・1/3)

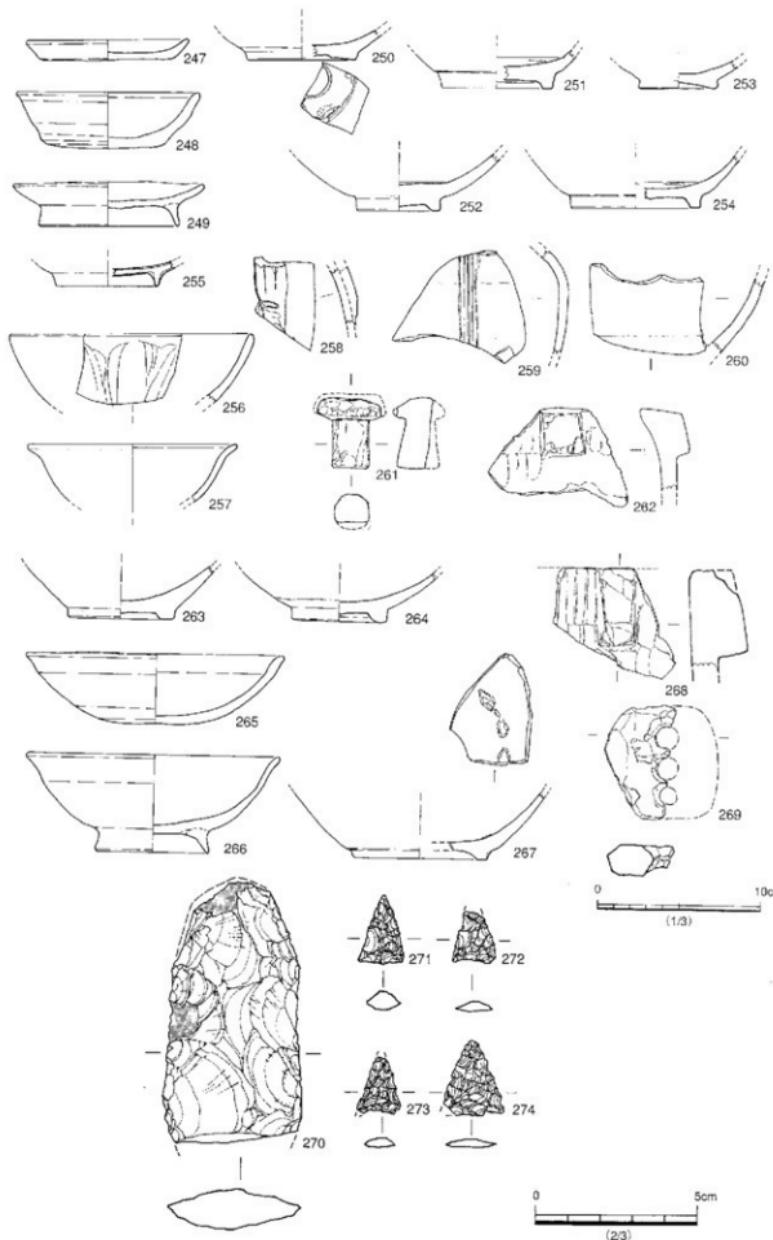


Fig. 44 遺物実測図15 (1/3・2/3)

図 版
(PLATES)



第4区 南東部作業風景 (北から)



(1) 橋本棲田遺跡遠景（南東から）



(2) 調査前近景（北から）

8014-6-12



(1) 第1区全景 (西から)



(2) 第2区全景 (西から)



(3) 第3区全景 (西から)

8014-8-4



(1) 第4区作業風景（北から）

8014-9-29



(2) 第4区全景（南から）

8014-13-3



(3) 第5区全景（南から）



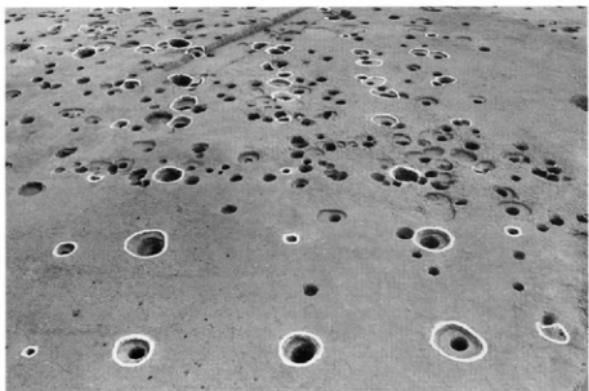
(1) 第6区全景（北西から）

8014-109



(2) 第6区全景（南から）

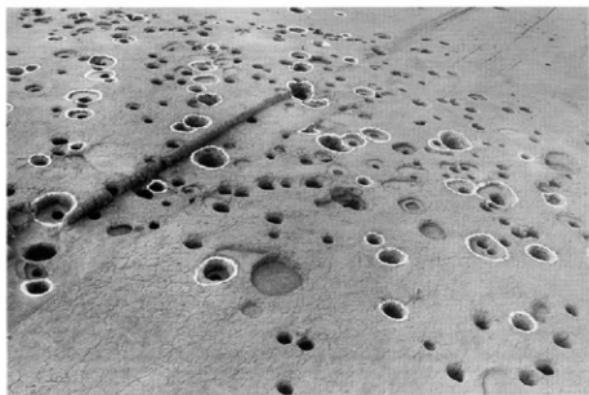
8014-90



(1) 挖立柱建物SB01 (南から)



(2) 挖立柱建物SB01 (西から)

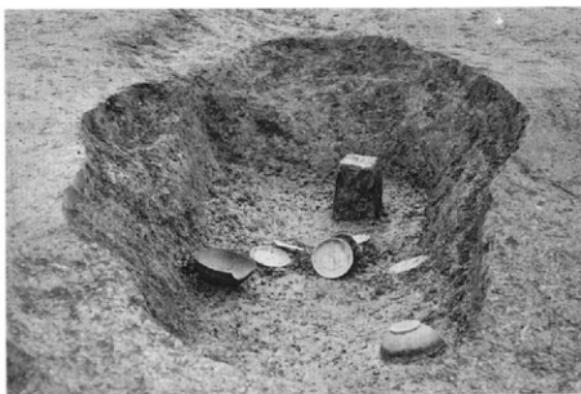


(3) 挖立柱建物SB08 (南から)



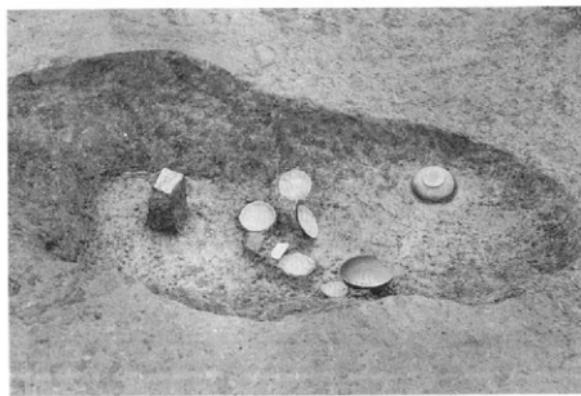
8014-6

(1) 木棺墓SD01遠景（西から）



8014-3

(2) 木棺墓SD01（西から）



8014-13

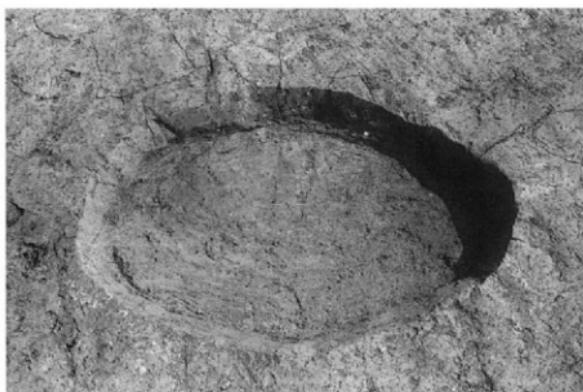
(3) 木棺墓SD01（北から）



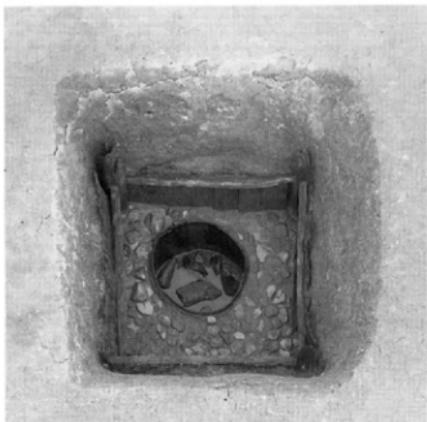
(1) 土壌SD02 (北から)



(2) 土壌SD03 (北西から)



(3) 土壌SD04 (西から)



8014-14-2

(1) 井戸SE02 (西から)



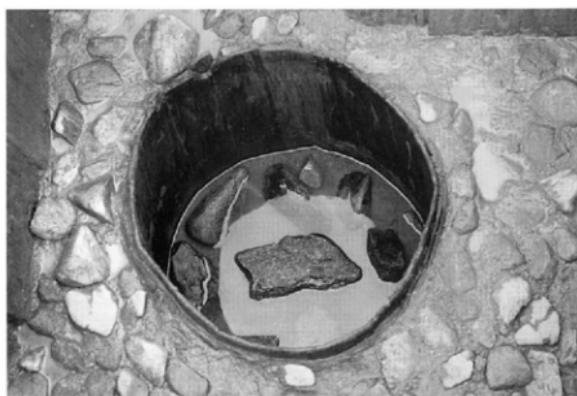
8014-14-23

(2) 井戸SE02井組南東部 (北西から)



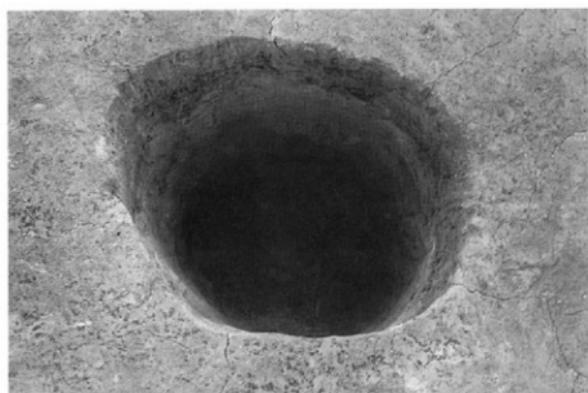
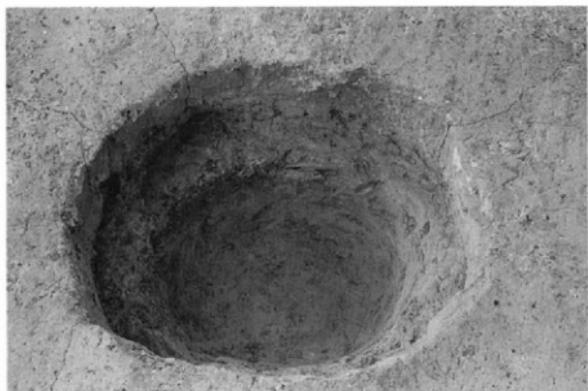
8014-14-22

(3) 井戸SE02井組南東部 (北から)



8014-14-25

(4) 井戸SE02井筒 (西から)



8014-3-31

8014-9-15



(1) 溝SM01・02 (北から)



(2) 溝SM03 (北西から)

8014-16-14

8014-16-22



(3) 溝SM04検出状況 (西から)



(4) 溝SM04掘り下げ作業風景 (南西から)

8014-21-16



(5) 溝SM04周辺作業風景 (西から)



(1) 第4区溝SM04 (西から)

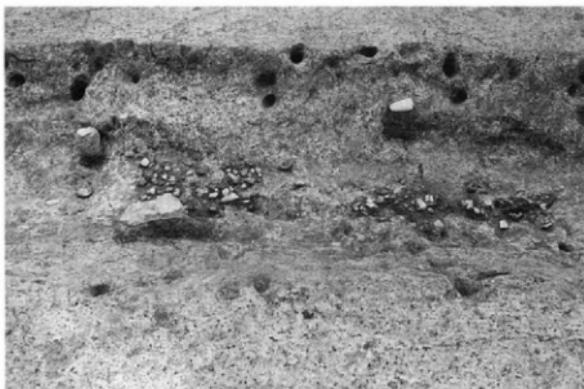


(2) 第6区溝SM04 (西から)

(3) 溝SM04第6区東壁土層断面
(西から)(4) 溝SM04第6区南北土層断面
(西から)



(1) 溝SM03北側（南東から）



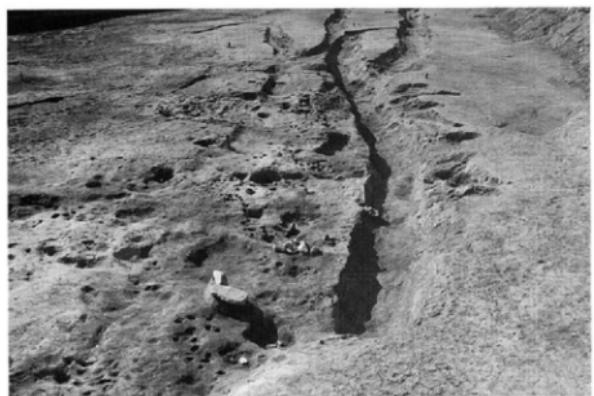
(2) 溝SM03北側遺物出土状況（東から）



(3) 溝SM03・05・07（北西から）



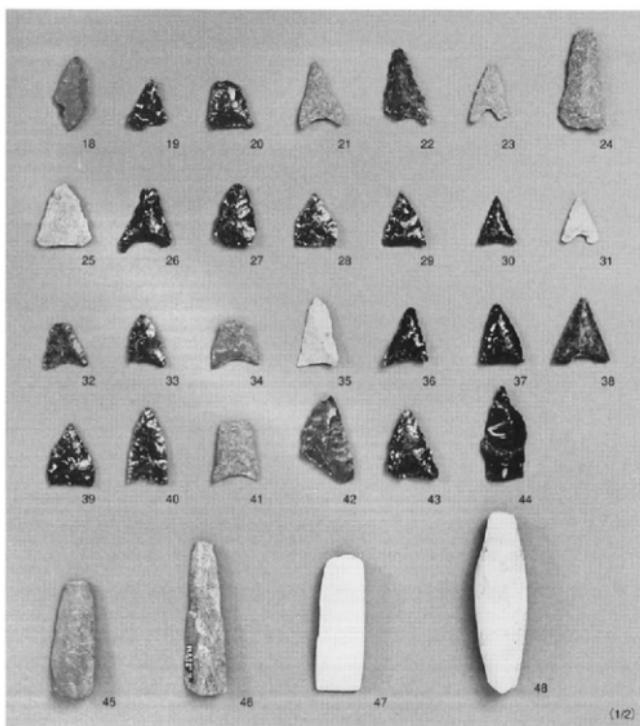
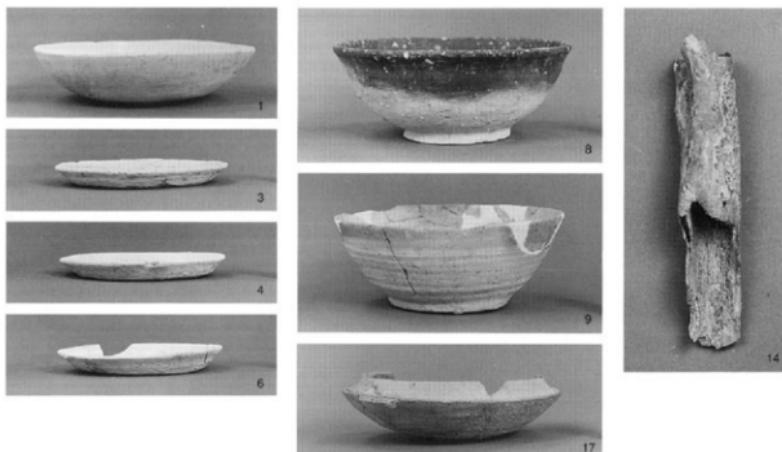
(1) 第8区溝群SM03・05～06 (南東から)



(2) 第8区溝群SM03・05～06 (南東から)

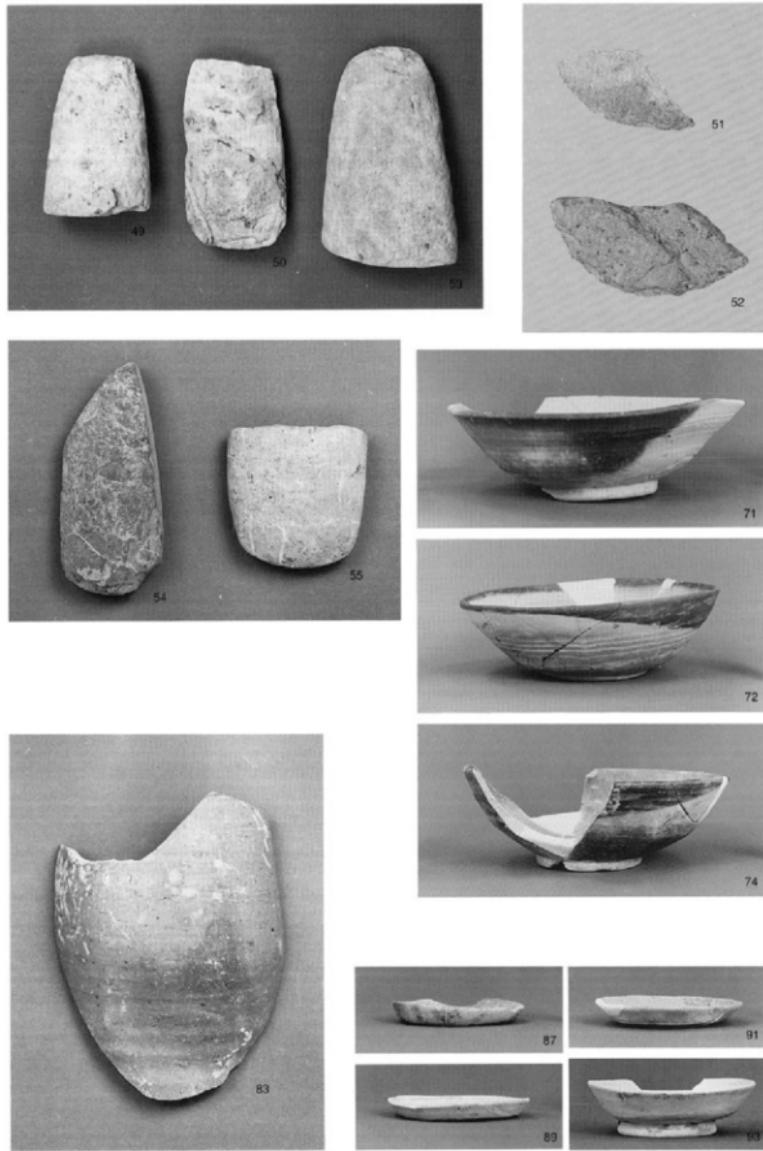


(3) 溝SM08・09 (北東から)

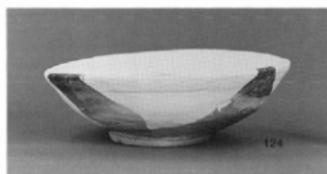
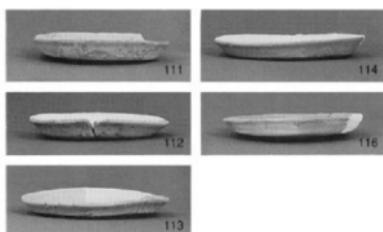
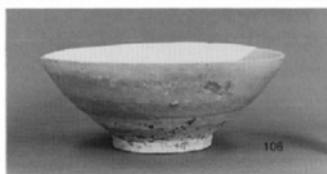
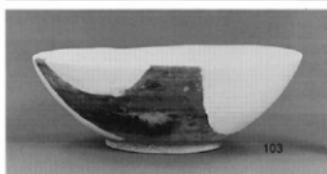
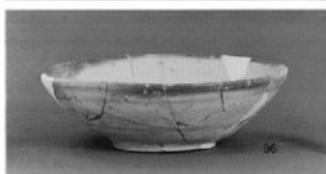


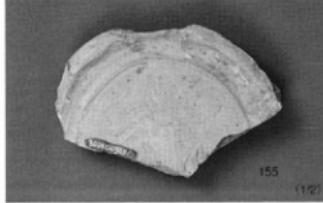
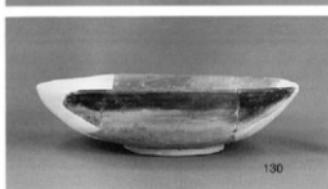
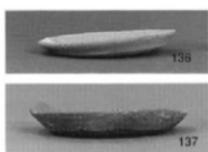
出土遺物 1 (1/3 · 1/2)

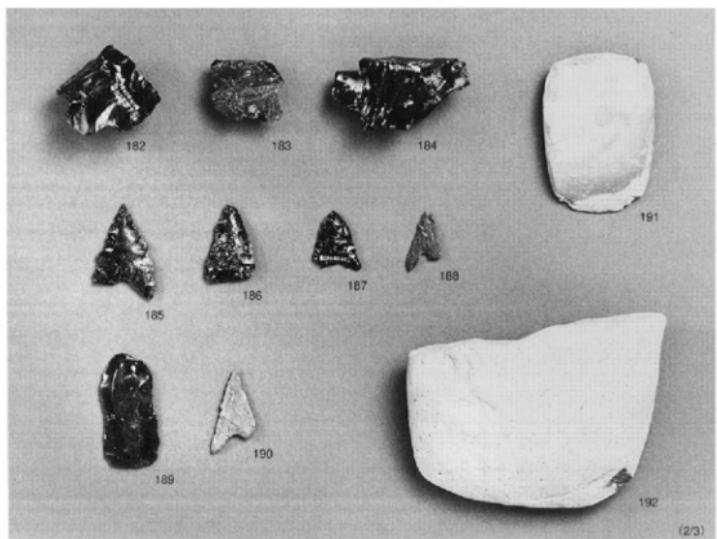
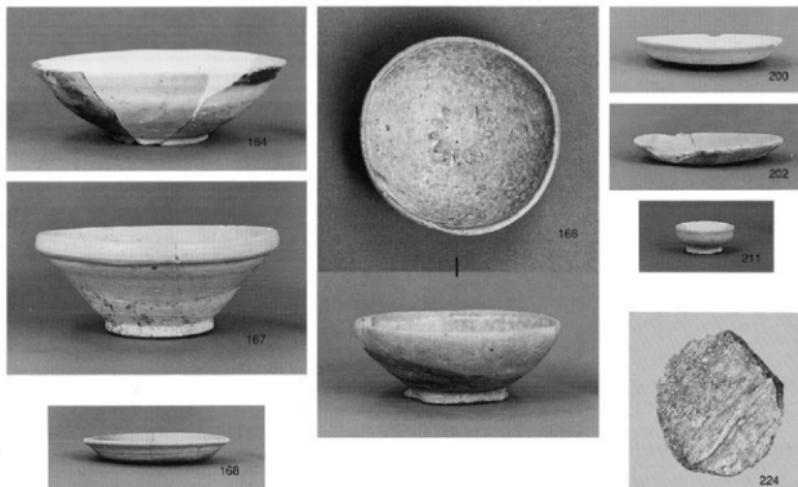
(1/2)

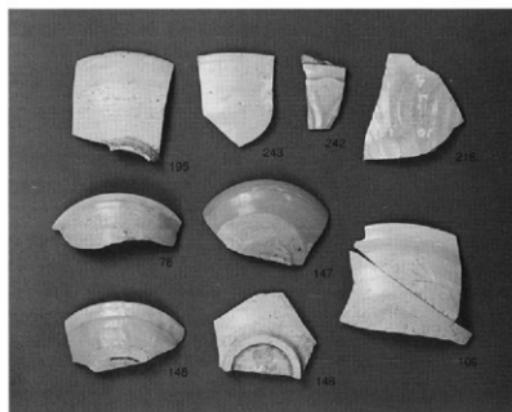
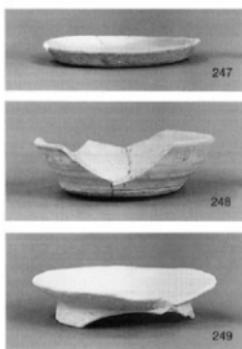
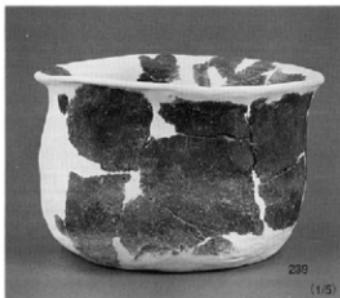
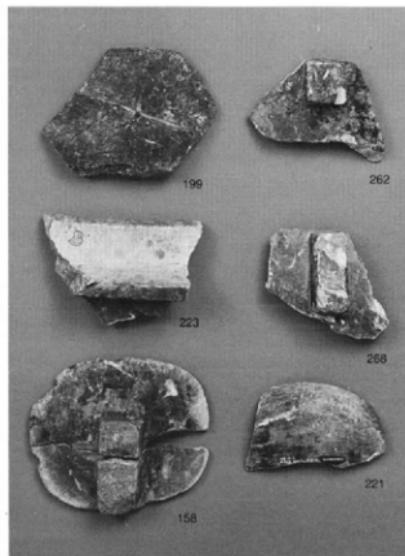


出土遺物 2 (1/3)

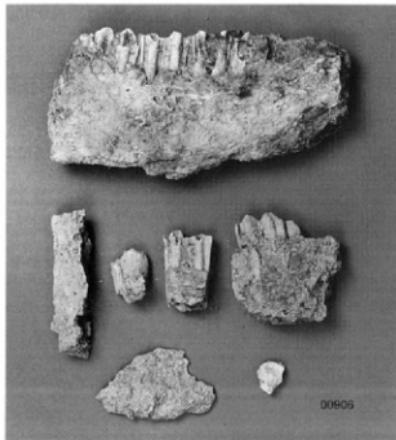
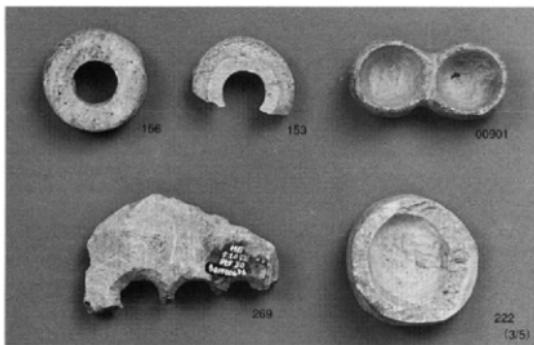
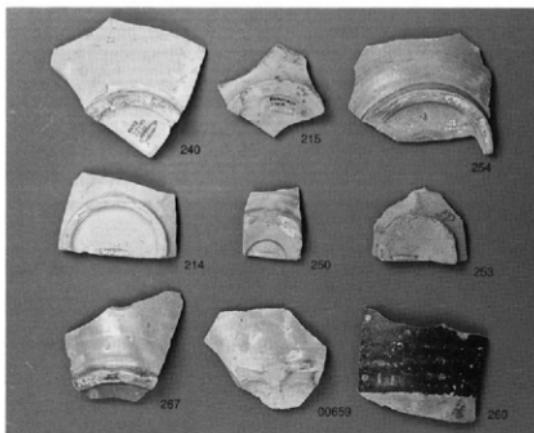








出土遺物 6 (1/3 · 1/5)



出土遺物 7 (1/3・3/5)

橋本榎田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書

〈第542集〉

編集・発行 橋本榎田遺跡調査会
福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8-1

平成9年3月15日

印 刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10-15

